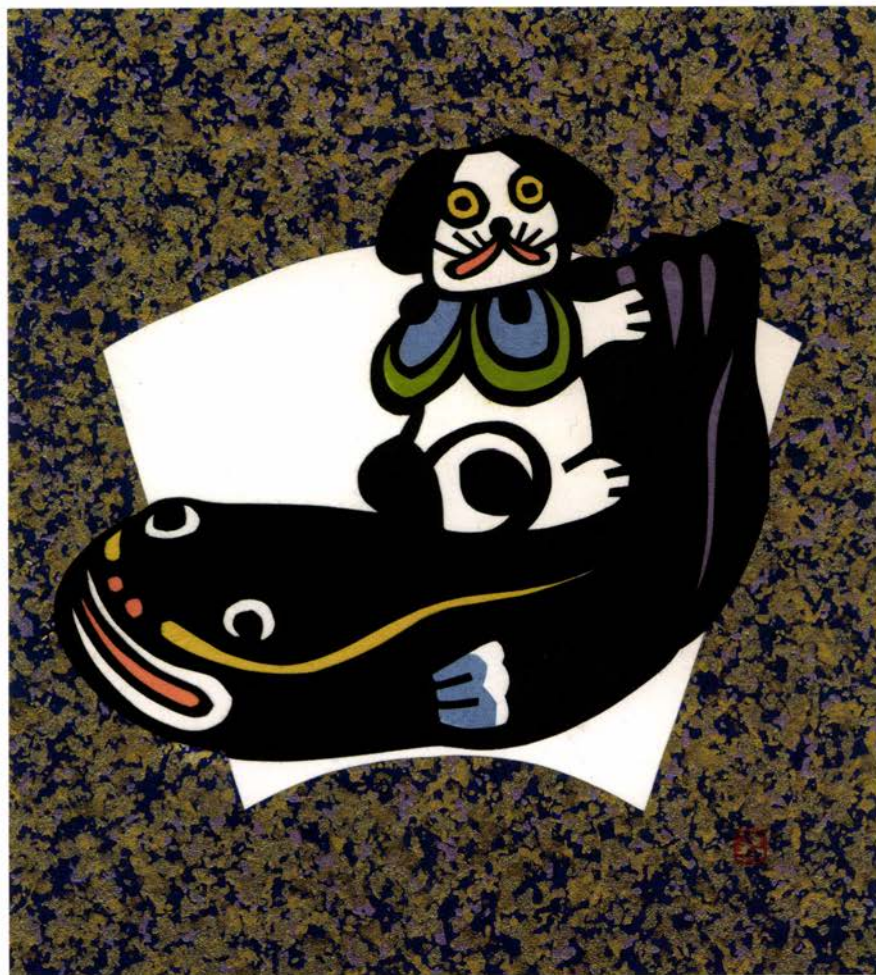


川柳塔

平成三十一年一月一日発行
創刊大正十三年 通卷一〇八八号



日川協加盟

同人特集・私の一句

No.1088

一月号

第六回 春の川柳塔まつり誌上大会募集

川柳塔社では、日頃句会などにお出掛けにならない方々を含め、結社を越えて広く川柳をお楽しみいただく機会として、第六回誌上大会を企画いたしました。参加要領は左記のとおりです。是非皆様のご参加をお待ち申し上げます。

川柳塔社

課題と選者(各題二句 共選)

課題吟

「つくる」

江畑 哲男(番傘川柳本社)
居谷 真理子(川柳塔社)

「力」

天根 夢草(川柳展望社)
古今堂 蕉子(川柳塔社)
矢沢 和女(時の川柳社)
小島 蘭幸(川柳塔社)

雑詠

投句要領

規定の用紙(コピー可)または、用紙の入手できない場合は便箋などご使用いただいても結構です。

投句料

一〇〇〇円(切手は不可)

投句締切

平成三十年二月二十日(火)消印有効

送付先

〒54310052

大阪市天王寺区大道一―四一―一七―二〇一

川柳塔社 誌上大会係 宛

TEL/FAX(〇六)六七七九―三四九〇

賞及び発表

各題特選に賞呈 発表は川柳塔誌五月号誌上
川柳塔誌を購読されていない方には発表誌呈

心を尽くし 思いを尽くし 知性を尽くし
力を尽くして全人的に仕える医療と福祉

医療法人社団 湯川胃腸病院



消化器科 放射線科 脳神経外科
緩和ケア(ホスピス)
デイサービスセンター併設



大阪市天王寺区堂ヶ芝2-10-2 TEL 06-6771-4861

<http://www.yukawa.or.jp>

戌年に思う

小島 蘭 幸

謹んで新年のお慶びを申し上げます。本年が皆さまにとって穏やかな年でありますように心から願っています。

さて、今年は戌年、愛犬チョコのことを少しだけ書きたいと思います。チョコが我が家に来たのは生後三ヶ月頃だったでしょうか、コロコロとても可愛かったのを覚えています。散歩デビューをした時は、小学生に囲まれたりして大人気でした。ある夜、いつものように散歩していると、大きくて長い影がぞっとする程、狼に似ていたのです。

愛犬チョコ狼に似た影をもつ

蘭 幸

犬種は、シェパードシープドッグ、家の中で飼っていました。昼は誰もいません。ある日、帰宅すると部屋中墨汁だらけ、さては空巢？、よく見ると罨られた筆ペンが机の下に転がっていました。くいしんぼうのワンちゃんでした。私と妻にこっぴどく叱られたチョコは以後その部屋には近付かなくなり

ました。

犬の歯を磨く厳しい妻である

蘭 幸

11歳になった頃でした。元氣だったチョコが突然血尿をしたのです。暫くして食事もしなくなりました。11月、川柳塔鹿野みか月大会が日一日と迫って来ます。次女が「私一人の時に亡くなったらどうしよう」と心配していました。みか月大会の二日前の早朝、妻に抱かれて静かに息を引き取りました。

犬と僕静かに本を読んでいる

蘭 幸

「チョコちゃんはいいい子だから、皆がいる時にきつと天国に行くと思うよ」これは、チョコの母犬を飼っていた奥さんの言葉です。

平成30年6月10日、震災から復興途上の熊本で一般社団法人全日本川柳大会が開催されます。私が理事長になって初めての全日本川柳大会です。川柳塔同人、誌友の皆様、また、友好吟社の皆様のご応募、ご出席を心から願っています。一般社団法人全日本川柳協会理事長賞は、私がお渡しいたします。

おとなしい犬だが牙を研いでいる
高杉鬼遊
びつたりと犬と歩幅があっている
小出智子

座右の句

あきらめたとき美しくなるこの世

(完司)

私の句

それぞれに不幸を持って笑い合う 坂本加代

川柳塔 一月号目次

題字・中島生々庵／表紙きり絵・前田 尋「なまず乗り犬」

■巻頭言 戌年に思う

小島 蘭 幸……(1)

四馬鹿大将奮戦記

新家 完 司……(2)

川柳塔(同人吟)

小島 蘭 幸 選……(4)

川柳塔の川柳讃歌^⑤

木津 川 計……(44)

橘高薫風句抄

……(45)

自選集

……(46)

句集の森

……(49)

温故知新

……(49)

水煙抄

川上大輪選……(50)

英語 de Senryu^⑦

吉村 侑 久 代……(69)

誹風柳多留一二篇研究⁵⁵

……(70)

愛染帖

新家 完 司 選……(72)

四馬鹿大将奮戦記

新家 完 司

近所に同年輩の飲み仲間が三人いる。家内が私を入れて「四馬鹿大将」と呼んでいる。まあ、あまり賢いことはしていないので反論の余地はない。

その四馬鹿の中で一番若いKが突然、「町会議員選挙に出る!」と言い出したので大騒ぎ。「ええ歳して、アホなこと止めとけ」と忠告したが、言いだしたら聞かない頑固な男で、猛反対していた奥さんも遂にギブアップ。「好きなようにしなさい」となってしまう。

かくなる上は「仲間としても応援してやらんといかんな……」と思っていたら、四馬鹿の中で最年長のTが「頼まれて事務局を引き受けた。あんた後援会長をやってくれんか」と言ってきた。

とんでもない話に「俺は川柳で精いっぱい。何もできん。堪忍してくれ!」と断ったが、「何もせんではない。名前だけ貸してくれたらいい」と、Kもやって来て

檸檬抄「シャープ」……………	山口光久・斉尾くにこ共選……………	(76)
せんりゆう飛行船 ⁸⁵ ……………	新家完司……………	(79)
一路集（「クラシック」……………	中村金祥選……………	(80)
「どっしり」……………	関よしみ選……………	(81)
初歩教室「自然」……………	居谷真理子……………	(82)
川柳塔鑑賞……………	安土理恵……………	(84)
水煙抄鑑賞……………	藤井宏造……………	(86)
川柳塔WEB句会「だんだん」……………	真島久美子・森山盛桜共選……………	(87)
同人特集 私の一句……………	大西泰世……………	(96)
インスピレーション・ナビ 印象吟……………	弘津秋の子……………	(102)
十二月本社句会……………	各地柳壇（佳句地十選／高瀬霜石・倉益一瑤）……………	(103)
句会燦燦……………	一月各地句会案内……………	(116)
柳界展望……………	■編集後記（ひとこと／川崎ひかり）……………	(148)
	朱夏・眞澄……………	(118)

座右の句

気づかれぬように弾ける椿の実

（むねお）

私の句

いちどだけ切ない恋に泣きました 上田ひとみ

頑として引き下らない。根負けをして、「選挙カーには乗らない」「応援演説もしない」という約束で引き受けた。

私がやったことは、事務所開きの挨拶と出陣式の「エイエイオー」だけ。

「選挙カーには絶対に乗らない」と決めていたが、寒い中を頑張っている馬鹿大将仲間を見ていたら申し訳ない気がして、投票日の前日になってからようやく半日だけ乗車。「お願いしましう」と、ぎこちない愛想笑いをして手を振った。

開票結果、「当落すれすれ。うまく行って滑り込みセーフか？」という大方の予想を裏切り、得票数第2位で見事当選！これにはK本人はもちろん、ご家族も四馬鹿のメンバーもビックリ仰天！

それが四年前のこと。今年は改選期。Kは「前回と同じメンバーで闘う！」と張り切っている。

今これを書いている時点での立候補予定は、「定数と同じぐらいか、多くても1名増か」というウワサ。

何もせぬ「名前だけの後援会長」としては「無投票になりますように！」と、八百万の神々に祈るのみである。



小 島 蘭 幸 選

青森県 松 山 芳 生

遮断機があがると虹からの便り
古本屋の棚に知りたい海がある

スローライフ無限の宇宙を光らせて
おくすりがとてもおいしくなりました
説得力のない野次馬のはなし
ラッピングしました解く日がいづつ来るか

榎原市 居 谷 真理子

知らんふりしようか身の内の地鳴り
欠片しか持たず欠片を研いでいる
沈黙の冷たさ強い人なのだ

雲ひとつない空本のカビ臭さ
小春日に眠るのも良し咲くも良し
篠笛は一重まぶたの音で鳴る

鳥取県 齊 尾 くにこ

シンプルで丈夫な服がなじみだす
鍵穴に鍵アイデアがひらめいた
二本足で立っているのに揺れている

パースデイクーキ九月の空を飛ぶ

伸びしてるブルーシートを脱いだ屋根
沈んでる街にカラフルなる服屋

大阪市 谷 口

義

ウインクをしながらお正月が来る

ええなあと思うまだ七十代やんか

無い物はない筋肉も無くなった

あばあさんになってからでも遅くない

面取りをしながら生きる生き上手

さらさらと水が流れてお元旦

三原市 鴨 田 昭 紀

贅沢に飽きたご馳走にも飽きた

透かしたらやつぱり舌が二枚ある

椅子になど座っておれぬ棒グラフ

生き下手な男に運もソツポ向く

何もかも許せる域にまだ遠い

夕焼けの空にトンビを描き足そう

弘前市 高瀬霜石

百態の風と契ったほくは風
建て前と本音どちらも罪がある

日出づる国に生まれて芽が出ない

ありますよ持病のふたつみつつなら

健診と検診どこが違う

男なら一度は挑む直下滑

倉吉市 牧野芳光

寄り道も迷いもしないけもの道

人生は短い盆栽に負ける

私を曲げて一族仲が良い

病院のハシゴができる歳になる

壊れそうになるたび水を飲みに行く

変てこに見える自然に嘘はない

篠山市 酒井真由

身にしみる話すすきの穂が揺れる

今にして思えばこちよい疼き

どのページ繰っても砂の城ばかり

思い出すたびに鴉が舞いおりる

曾祖母と呼ばれるまでの歳月よ

川柳の鬼と呼ばれてみたいもの

西宮市 緒方美津子

夫婦して同じところで笑いたい

夫もてなす松茸はカナダ産

嬉しさに悲しさに添う母の寿司

秋の蚊はにくい冬の蚊はいとしい

孤独死と香香の記事同じ面

時間配分うまくなり日向ぼこ

大阪市 田中ゆみ子

育っています貴方の大事なDNA

優しい言葉ひとつもないが父が好き

ファスナーの悲鳴新米が旨い

生活音ひとりではないという安堵

冬が来たミニスカートの足に来た

大楠黙し見守る君が好き

三田市 堀正和

上を向き歩くが虹と出合えない

カタカナに目眩ましなどされまいぞ

あるがまま素朴に生きて子が五人

年金に慣れてだんだんケチになる

いい便り来たのかカブの音がする

路地裏にぼつんと残る昭和の絵

河内長野市 山岡富美子

じつくりと育てたものは裏切らぬ

百歳の皺にたゆたう海がある

万能なスマホが使いこなせない

またなにか忘れていそう指の冷え

秋刀魚焼く炎の出ない調理器で

老い深むちよっと鏡に拗ねている

三田市 北野 哲男

和菓子屋が一番先に四季を売る

サムライの心でリハビリすると言う

神様はコインの音が子守唄

天国と地獄の真ん中あたりに居

不摂生サプリメントは忘れない

天敵に天敵が居て世が回る

三田市 久保田 千代

ながらえてまだまだやる気七十四

どちらが先に逝くかで今日もまたもめる

もうと言いまだとも思う七十四

地で行くと決めても迷いふっ切れぬ

ほっとしてくれる気配り出来る人

歌うたう五感全てを目覚めさせ

大阪市 古今堂 蕉子

鈍刀の仲間気軽でよく笑う

世界平和が迷路から出られない

若返りなどNOこのままフェードアウト

カシミアより木綿の君が好きだって

今はもう木綿ではなくドンゴロス

萩の道誘う人をまちがった

岡山県 高岡 茂子

掃きよせる神のアートの柿落葉

来年までお休み下さい風鈴

一言に傷つく心抱いて寝る

モヤモヤを友に分割してこぼす

音痴のせいにするリズムの悪い句

ヒザ小僧並ぶ茶会は幼稚園

唐津市 山口 高明

公共心の欠如を嘆く肥後守

古き佳き時代だったと幻灯機

胸を刺す凶器ともなる朱い唇

買う気など無い癖無茶な値切りよう

カストロを真似てのばした髷じゃない

迷子札首からさげた姑迷子

東かがわ市 川崎 ひかり

諦めてなるか飛ぶ日へスクワット

両の手を孫とつないで紅葉狩り

紙コップ愛しき君の紅のあと

連いて来る亡夫の化身か赤トンボ

大海を知らぬメダカの机上論

祭り果て風にコロコロ紙コップ

香芝市 大内 朝子

亡父母よわたし傘寿を迎えます

父さんの頑固を芯に生きのびる

笑顔と言う遣伝子母よありがとう

苦勞した友の言葉がよく響く

今日よりも明日へ弾む万華鏡

新年へ自分史つなぐ除夜の鐘

西予市 西田 美恵子

眩しくなったからあなたから去るのです

ボロリ転んでドミノ倒しが始まった

ジョークだと言って下さい花魁

泣いて笑って波乱の続く女偏

思い出を曳きずる湿っている時間

言うなればビタミンCの様な人

堺市 坂上 淳司

順調に病状進むのが不安

半分でテロップ消えるもどかしさ

段差分からず空足踏んでおととと

野線が見えず行間入り乱れ

失明に備え点字を読む稽古

川柳塔誌の音読テープ有ればなあ

羽曳野市 三好 専平

一人では生きられないと知りながら

続けるとすこしわかつてくる深さ

土佐犬も赤ん坊には噛みつかず

おしっこをしてから体重計にのり

吊り橋のむこうに平家物語

秋の日がビルをななめに切っている

奈良市 米田 恭昌

核を生み核に怯えているヒト科

口閉ざす子にも子なりの意地があり

作文を孫エッセイと誇らしげ

遠くから鴟尾を眺める文化の日

宮仕えの辛さいつの世も同じ(正倉院点2句)

犀角の盃でのむ風邪薬

米子市 吉田 陽子

抜け落ちる罪深い歯の順番に

褒められてかさぶたボロリ落つことす

終止符はまだアレグロにアンダンテ

あなたしかいないといざの時言おう

非常ベルどの方向に鳴らそうか

未練ある今日へ門灯消せずいる

米子市 中原 章子

紅葉の自然一番芸術家

日本文化海の向こうで響き合う

介護予防取り組む会に参加する

気兼ねなく早起きできるマイホーム

大根の淡くて飽きぬ味が好き

老いたなと思うどつしり重い腰

大阪市 津村 志華子

ボジティブに生きて寿ぐ初ひかり

恙無き年でありたし祝箸

富には富の貧には貧の幸せ度

柔らかな初日を浴びる夫の墓地

皺の手で心をこめて描く賀状

九十歳まだぬけぬけと神頼み

八尾市 宮崎 シマ子

雑用をしたがる母に趣味がない
降霜に母洪柿の皮を剥く
友の計が受け入れられぬ草もみじ
街灯から逃れるように居る二人
米櫃に米いっぱいのお元旦
素うどんと気軽に言える友といふ

大阪市 川端 一步

顧みていまだ犬かき泳ぎです
にこにこと笑って済ます手もあった
微温めの湯母のお腹にいるようだ
感動を夢の枕にして眠る
月一度妻とデートの約束を
十二月平次を読んで締めくくる

箕面市 酒井 紀華

ひとりでは何か寂しい月見酒
口下手に勇気をくれた赤いバラ
鳥逃げて鳥籠ゆれるひとりぼち
追憶を拾いあつめて母を恋う
成長する脳を鍛える類語辞典
くじけそうアンパンマンに会いに行く

大阪市 津守 なぎさ

盆栽展松竹梅を選ぶ師走
病窓にさえずり響く今日も無事
雨降りを楽しむ子等のランドセル

旅友の見舞血圧急上昇

介護4甘えることに馴らされる
寒暖を氣遣う身内いる至福

大阪市 小谷 集一

デパ地下の試食で亡母の味に会う
幸せかい妻の寝顔に聞いてみる
笑顔より闘志溢れる顔が好き
カーナビが欲しい人生迷い路
虚も実もみんな紛れもないわたし
昭和一桁愚直に生きて悔いはない

大阪市 田浦 實

子育てはシミュレーションが効きません
雑草でも名前を知れば愛おしい
悲しい時ちよつと花月で一笑い
持つて来いの気分転換家掃除
ライバルはもう要りません八十路です
一寸先闇だからこそ生きられる

豊中市 松尾 美智代

つい先置き場所変えて探してる
よれよれになつて馴染んできた木綿
柿の実がとれ過ぎジャムにトライする
やっとなつたりしたと思えばリバウンド
夕日見て心のゆとり取り戻す
とほけた顔で真面目な事を言う夫

京都府 清水英旺

薬にも毒にもなれぬ身がうれし

チヨコ一つ進駐軍を懐かしむ

大笑いしたのはいつの頃だっけ

関わりはごんせんよと冷めている

人生の節目付箋を貼っておく

京都府 藤井文代

百歳までたっぷりとあるはずだった

こんな苦いゴーヤは薬いや野菜

判をボン再度のボンで離婚届

久し振りに褒められました有頂天

心の迷いに示唆をくれたはピカソの絵

京都府 榎本宏子

ご近所にひとり二人のクレマー

はやく癖直つてからの青い空

コーヒの味知つたのは初デート

息子からいい事だけを聞く不安

お母ちゃんの気炎が上がる十二月

京都府 三宅満子

郷愁が募る空雲柿すだれ

紅葉狩り人人人をかき分けて

まだ少し恋の炎がチロチロと

こけぬようゆとりを持って二歩三歩

クレームをつけたら料理しない妻

長岡京市 山田葉子

それぞれの色でコスモス揺れている

化粧したから留守番としよげる犬

遠ざかる記憶は点と点になる

疲れなら一晩寝ればとれたのに

脳回路もうストックはないらしい

八幡市 今井万紗子

平凡な日毎朝一つ割る卵

やんわりと聞けばよかった母のこと

あなたの胸に届きましたねコウノトリ

介護食からや々と食欲小豆粥

捜し物今日一日が暮れてゆく

大阪府 米澤淑子

行ったねと世界遺産を見るテレビ

大人にも絵本は心安らげる

健康で長生きこれも大仕事

あつて無きに等しい優先座席

数にも言わせ高飛車許せない

大阪府 岩崎玲子

平和だなあ十七文字を考える

健康の貯金散歩で安上がり

疲れたら薬にしている郷の風

自分でもわからぬ今日をまた生きた

特別の拝観で会う仏様

大阪市 井丸昌紀

後ろ前家に帰つてから気付く

好きで嫌い枯葉の香り舞う小径

ネクタイの歪んだライバルに油断

痛み知らぬ人が操る政

エッセイストと名刺に書いてあるけれど

大阪市 内田志津子

仏壇の芒一本秋の暮れ

やと晴れ少し歩幅が広くなる

苦も楽も母は抱えて生き進む

バラの棘見えぬ形で皿に盛る

母の智慧くらし支えてそこかしこ

大阪市 宇都満知子

歳ごとに母の気持が見えてくる

あたらしい老いがひよっこ顔を出す

まだともう時々揺れる今の歳

返却日間に合うように読み終える

掃き集めた落葉を風が踊らせる

大阪市 江島谷勝弘

帰ろうかもう五時間も喋ったよ

もう次の偶数月が待ちどしい

飲み仲間みんなよう飲むウマが合う

よく食べてよく喋りますまだ元気

なんやねん十二ゲーム差あったのに

大阪市 榎本日の出

祝い膳一人の家へ集合だ

怒ったら血圧上がるのが怖い

太陽が七色にするシャボン玉

美人では無いと鏡に教えこむ

何ごととも許せばこの世天国だ

大阪市 榎本舞夢

台風選挙去つて爽やか秋気配

作品展今年最後と挑んでる

秋晴れに京都奈良へと足が向く

御互いに励まし合つてまた今度

御近所と付合い大事ボランティア

大阪市 大治重信

相手褒め自分を守る良い手口

休肝日おかず良いので明日にする

草叢を虫にゆずつて刈らぬまま

ペアカップ使わないから割れません

豊年を手で確かめて重さみる

大阪市 奥村五月

苦しくも心結んだ母子家庭

担任と母が揉めます志望校

神様も働きすぎと神無月

立飲みで美人の客と盛り上がる

注意する医者が煙草を止められず

大阪市 笠嶋 恵美

飛鳥Ⅱの旅娘婿からブレゼント
娘と二人豪華客船ご満喫
バルコニーから拝む満月海静か
なつかしむ露天風呂から桜島
感謝感謝旅のすべてが宝物

大阪市 近藤 正

ケイタイを忘れ一日棒にふる
アベもどき希望の党に風吹かず
頻尿に小便小僧ポーズいい
へりくだる哀れなビエロ安倍総理
身を削り未来見据えるリスベクト

大阪市 坂 裕之

新しい事が苦手になつてくる
あなたにも同じ弱みがありそうだ
難しい事には触れず笑つとく
あの長屋今マンションとハイカラに
痛み知る二人だからのまあいいか

大阪市 高杉 力

レコードを売ってなくてもレコード屋
アイドルも歳をとったと見るテレビ
美の基準変わらぬものかダイエット
趣味の数多いが図抜けたものはない
訳ありのワゴンをまずはチェックする

大阪市 寺井 弘子

酔うとすぐ昭和の歌が口をつく
妻と孫連れて晴れやか買物デー
塾カバン釣瓶落しの陽に追われ
冬の鍋温い話題を食べている
ママ友の視線が痛い参観日

大阪市 寺本 実

バスに乗り周囲に学ぶ中国語
蓄財に励みやがては国庫行き
ダイエット小鳥のような餌を食べ
デパートは試食おためし餌をまく
納税をしても戦に使われる

大阪市 栃尾 奏子

私のバイブルそれはあなたです
この手まだ離したくないのは私
森を出て迷う自由になり迷う
迷うとき光に風になる母よ
母さんを見つけた言の葉の森で

大阪市 原田 すみ子

前向きな考えだけが浮かぶ風呂
十六年癒やしてくれた犬介護
ばうっと過ごした有意義な一日
作ろうと溜めたレシピがそのまんま
モンタンもひばりも心沁みる秋

真つ新な朝が窓辺にやってくる
国旗掲揚 今日私の誕生日
大阪市 平井美智子

禁煙をしたタバコ屋のおじいさん
ばあちゃんの俳句が載ったミニコミ紙
むず痒いままスリッパの右左
大阪市 平賀国和

職退いて今が人生黄金期
なんとなく嫌いな余生なる言葉
句をひねる歓喜の歌を聴きながら
信貴山の戒壇巡り辛願う
太陽の恵みの稲穂お辞儀する
大阪市 藤田武人

一線を越えた夢見て深呼吸
袴を脱いで私になりました
虚と実の境界線で脱いだ下駄
あてもなく近くて遠い一人旅
帰省した子の懐が満たされる
大阪市 藤原千恵子

ほそほそと短い会話秋夜長
水分はビール飲むまで取らぬ人
鍛練を積んで舞台で飛翔の娘
嫌な話さらりと聞いてくれる人
人形遣い魂うつし一体化

日記帳明日と言う日を白で待つ
火と水の性の二人が一つ屋根
五分五分の線が引けない遺産分け
思い出が詰まって開かぬ小引出し
順番のない順番は不意に来る
大阪市 升成好

読経あげ今日も始まるキュンとなる
巳と酉とよう頑張ったありがとう
私泣き息子は空を見えています
怖くないいつか夫に逢えるから
挨拶も私も秋になっていく
大阪市 山本加お里

七回忌意気を燃やしてもう少し
四度目の種を蒔きつつ恩返し
秋晴れに感謝感謝で忙しい
足だけは怠けてならぬ日に一度
柿すだれ眺めて好きな一人旅
大阪市 吉内タカ子

陽だまりの中でわたしの棘を抜く
消しあとも嬉しい孫の初手紙
消しゴムの滓が迷いを知っている
四季バラの深い溜め息聞こえます
沸き上がるパワー貰った仏画展
大阪市 若本安代

陽だまりの中でわたしの棘を抜く
消しあとも嬉しい孫の初手紙
消しゴムの滓が迷いを知っている
四季バラの深い溜め息聞こえます
沸き上がるパワー貰った仏画展

堺市 柿花和夫

人柄が滲む敗者のインタビュー
同期会で名刺交わしてからの距離
手と足でしがみついてる齒科の椅子
指先の衰え知らずブルトップ
モナリザが微笑で隠してる涙

堺市 加島由一

独り飯うなぎスキヤキ上にぎり
ふる里に孫見せに行くクラス会
始発駅母が泣いてたこの柱
ふる里は肴がわりの団子汁
地藏さん毎日泣いてばかりです

堺市 源田八千代

謙虚さと民の幸せモットーに
改憲と護憲が対峙正念場
副作用が今の症状そのもので
弥陀の下納骨済ませ安堵する
インフルエンザ注射する前風邪引いた

堺市 齋藤さくら

朝御飯きのうの喧嘩忘れてる
散らしかけ読む新聞を取っている
ふる里の友の電話で元気出る
ふる里で遊んだ川が胸底に
身の丈にあった暮らしだ背伸びせぬ

堺市 澤井敏治

水平線真つ赤に燃えて去年今年
風を聴く古刹に刻む鹿おどし
アンチエイジング養毛剤と一万歩
一刀彫の円空仏に見るひかり
ペーソスを秘めたビエロの演技力

堺市 遠山唯教

錦秋の千曲旅情に照るもみじ
野沢菜に馬刺ほうとう秋をゆく
樽の湯がこぼれ華やぐおんなたち
掛流し湯船にゆらぎ合う親子
頼もしく苦にはならない子の軒

堺市 内藤憲彦

紅葉より君が目立っていたあの日
店員にマークをされている財布
赤赤赤ポインセチアが急かす暮
アメリカと種も仕掛けもある同志
酒二合陽気になれる安あがり

池田市 栗田久子

老いの身のあれやこれやがみなコント
一人居の食は好みに流れがち
知らぬ振り見て見ぬ振りしておこう
厳格と頑固の違い見抜いた目
考えの境界線でできたみぞ

和泉市 横山捷也

端数を切り捨て辻褄を合わす
金借りた方が上座で取り仕切る
全うに生きてきました足を撫で
口だけは達者老化が進まない
走っても妻の歩調に追いつけぬ

茨木市 島田誠一

湯気の立つ鍋が恋しい落葉焚き
もうひとつ手摺り増やした老いの暮れ
カッブルが無言でスマホ見つめ合う
目的も理想も無くて付くバッチ
大自然敵にまわせば牙をむく

貝塚市 石田ひろ子

大根の七つの顔で出る夕餉
それぞれの暮らしが醸すクラス会
まだ夢を画く余白はたとある
齢かなあ眼に付く葬儀社のちらし
忘れてた齢呼び起こすプレゼント

河内長野市 大島ともこ

生き残る最後の手段皮下脂肪
ノリの良さ鍛え関西人になる
この浮き世持ちつ持たれつ明日も晴れ
趣味三味手足も口もよう動く
胸チクリ無かった事に出来ぬ傷

河内長野市 梶原弘光

金婚へ先ず積み立てをしましょうか
ボク達の借金背負うスマホ族
張り込んで買ったドライブレコーダー
眠剤の効果トイレが遠くなる
無担保で貸すと言うから遠慮した

河内長野市 木見谷孝代

とびきりの笑顔で丸く納まった
炉開きの湯気にびりつとする点前
勇気出し溝飛び越えて仲直り
ママの本音孫からぼろり漏れて出る
伝統の舞を受け継ぐ郷土愛

河内長野市 黒岩靖博

命がけで庇うと言ってプロポーズ
どっしりと尻に敷かれた定年後
よく保った揃って後期高齢者
面白く生きて悔いない人生路
じっくりとお休みされて両陛下

河内長野市 谷久美子

生まれ持つ短気は亡父のDNA
好物を絶って百度の願い事
関白も外は優しい面構え
孫達の力を借りた模様替え
お早うと湯気で始まる朝御飯

河内長野市 辻村ヒロ

故郷が乾いた私抱きしめる
知らぬまに米粒ぼろりこぼす老い
古傷も磨いて光る人間味
百均でほとんど揃う面白さ
聞き上手心のカギも開けさせる

河内長野市 藤塚克三

スケジュール決めたら昼寝先送り
ゴールド免許己励まし車乗る
悪酔いから自分に戻るみじめさよ
悪友とは付かず離れず凭れ合い
反抗期の孫が帰ると偏頭痛

河内長野市 村上直樹

さんま焼く香りにふわり亡母の顔
いいよいいよ君ならあれもこれもチャラ
一浪の孫とげんまんしたハワイ
薄化粧妻を見直す宿の朝
自分史にもしもを重ね秋夜長

河内長野市 山室光弘

情熱を残したままできた八十路
一人鍋孤独を湯気が癒やす夜
財布の中小金しかない月半ば
小さな口大きな耳を持つ誇り
仲直りいつも夫の白い旗

岸和田市 岩佐ダン吉

話だけじっくり聞いてくれはった
距離を置き自分見詰めることにする
橋渡るもう振り返ることはない
核のない世界想像しませんが
裏切った方が辛いと今思う

岸和田市 宮野みつ江

弾むだけ弾んで老春楽しんで
楽しみを半分にする手足マヒ
麻痺残る手足わたしの財産よ
美しい猫と知ってる猫という
私と猫順位ほとんど猫が上

岸和田市 雪本珠子

あちこちに老化のサイン出始める
野良猫と波長が合って困ってる
お薬がデザートなんて味気ない
日溜まりに睦まじくいる猫二匹
なんとなく貴方がいれば落ちつける

四條畷市 吉岡修

一番はスタコラサッサ消えること
札状が印刷だったエライ人
うす皮をはぐように出る過去もある
お笑いがニュース読んでる疑わし
見たいとこ神が伏せてるのが未来

吹田市 太田 昭

高石市 浅野 房子

自己暗示かけて坂道登りきる
アンダーライン引いた理由をもう忘れ

饒舌な生花が祝う誕生日

折れそうな軸足補強して登る

肩書きのとれて自由になる素足

吹田市 木下 敏子

高槻市 指宿 千枝子

姿見の今日の笑顔は素晴らしい
髪染めてまだゆく処のあるえくぼ

女ひとり自由に生きる万歩計

姑の思い出残る庭の石

若い子に任しのんびり湯につかる

吹田市 須磨 活恵

高槻市 片山 かずお

恙なく今年も聞けた除夜の鐘
松南天活けて白菊リンと冴え

つつましく脇役果たすかすみ草

新春の文字に希望も夢も湧く

断捨離をしたら普段着だけ残り

吹田市 野下 之男

高槻市 島田 千鶴子

好きな事言えてうれしい大統領
ずぶぬれの選手見ているかさの列

投票に大雨なんであつてくる

八十路来て今朝も鏡に笑われる

馬だつてどうだ顔する優勝だ

こりゃいかん体重減っているじゃない
選挙せんきょタクシー代は誰が持つ
テレビの音消せばシーンとしじまだな
アツアツのナポリタンなら食べますよ
論吉さん大事にしますから居てね

生かされる命にこにこよく食べる

食いしん坊百まで生きるつもりです

引き出しは婆の楽しい玩具箱

子や孫へ扉はいつも開けてある

広辞苑頼っています五七五

休刊日朝のペースを決めにくい

男ですいつも優しさ持っている

男ですつまらぬ見栄を張っている

男です昼は値段で決めている

男です妻に口答えはしない

時々流されてみるのいいね

秋寂し五百羅漢に会いに行く

パパママも畏まつて七五三

陽気な子ちよつと気になる泣きぼくろ

温暖化もみじの見頃十二月

高槻市 初代 正彦

綱引きの苦手旗振り買つてでる
百歳へオトナ世代の心意氣
懲りぬ脚だらだら坂にまた挑む
節くれた指もスマホとよく遊ぶ
週一のテニスと遊ぶ遊ばれる

高槻市 杉本 義昭

魚跳ねる地球平和の音がする
トレモロを奏でる女に一目惚れ
まだ元氣憎まれ口も絶好調
またやつて見たいリングの丸かじり
歌声は明日の扉をノックする

高槻市 富田 美義

ガン告知いのちを刻む音を聞く
喜怒哀楽刻みつセピア増す二人
残り日をどう刻もうか四字熟語
レシートに独り暮らしを刻まれる
大仏の手からお流れ受けたいな

高槻市 富田 保子

激痛に耐えた笑顔が誇らしい
新聞に四コマ漫画ある平和
楽しみは夫が出掛けほつとする
素っぴんじゃ鏡がこわい年となり
忘年会五輪景氣を待つ話題

高槻市 原 洋志

別れてもトースト二枚まだ焼いて
来たバスに行き先き合わすフリーター
大掃除過去の欠片を拾う書庫
再診で新病名をまたもらい
さよならの涙の味で玉子焼く

高槻市 松岡 篤

大変だ恋に恋する孫の守り
雨宿りする恰好の立ち飲み屋
ぎりぎりに亭主関白保つてる
褒められた言葉はずっと色褪せず
権力で天気予報は変えられず

高槻市 安田 忠子

香住まで車で飛んでカニ食す
目覚しの鳴る前いつも目を覚ます
暇なのに何故か氣持が落着かぬ
拉致家族トランプさんに夢託す
安倍さんの一強政治まだ続く

豊中市 池田 純子

闘病のあの子に送る里の味
ワッショイの響き実りの秋を呼ぶ
お迎えのママチャリ風を切つて行く
指先が割れて娘もお母ちゃん
素の私乗せて列車はふる里へ

豊中市 上 出 修

また事件記憶のキャバを溢れ出す
ルンルンで憧れの歌手ナマで見る
すき焼きに待ったをかける鍋奉行
沈む陽に染まる街並み四季映す
初セリのご祝儀弾むマグロ食う

豊中市 藤 井 則 彦

人知れぬ痛みをバネに日日生きる
蠟燭の吹けども消えぬ誕生日
さりげないとぼけた声に座も和み
まばゆい夕陽受けて明日へと湧く元氣
オルガンの眩しい音に総毛立つ

豊中市 水 野 黒 兎

外は雨二人に広い夜の居間
台風が過ぎて静かな路地の秋
寄り道も明日へ助走の屋台酒
薄味に慣れても浪花弁は下手
金平糖ガラスケースにある昭和

富田林市 片 岡 智恵子

老いてまだロマンを抱いて生きている
たればは要らぬ自分に流儀あり
窃盗犯髪の毛一本で逮捕
小皺増えても構わず今日も大笑い
百までも五欲は未だ胸を這う

富田林市 関 よしみ

欠片から復元琴の音色見る
感動の紅葉まつ赤に無人駅
天辺を奏でる琴の風よ
凍てついた脳にととのう熱い酒
天辺に僕の皿置く登り窯

富田林市 中 村 恵

関に不意に途絶えた祭り笛
泣きながら引かぬわたしに意地がある
一言も文句を言わぬ影法師
唐突な話否とは言わせない
秋味になって深さを増すわたし

富田林市 山 野 寿 之

北京語の社内放送奈良京都
墓洗う孫にも先祖への感謝
ロボットがロボット介護する未来
旨い水豊かな森のプレゼント
ずぶ濡れの心を青い空に干す

寝屋川市 籠 島 恵 子

満月を見上げもう一眠りする
カレンダーの無印うれし安息日
紅葉へ夫が予定組んでいる
切れ味はいまいちだけど研いである
カラスなぜ騒ぐ何かが起きている

寝屋川市 伊達郁夫

ドナーカードたった一つの誇りです
沈むだけ沈んで貝になりました
あれこれとサブリ試して生きのびる
お若いと言って欲しくて持つスマホ
健やかに癌と闘う母の笑み

寝屋川市 富山 ルイ子

母の最後ホームで世話になり逝った
おだやかに大事にされて母は近く
五年日記大丈夫かと思ひ買う
40キロ何時しか増えて50キロ
減り続ける年金誰も声あげぬ

寝屋川市 平松 かすみ

寝た切りと合唱できたテレフォンで
八十五歳ラジオ歌謡はまだ確か
健やかに毎日伸びる僕の髭
ベッドでも爪よく伸びて驚かす
授乳したあの膨らみはどこに

寝屋川市 森 茜

母だけがくすつとほくの冗談を
セーラー服駆けてく青い風となり
遠い日の感傷マロニエの散るよ
すすき野へのこのこ風を聞くばかり
獺に夢預けてぐっすりと眠る

羽曳野市 安芸田 泰子

一駅を歩いて秋の彩拾う
残された余命は問わず初詣
遺族年金あの世の夫に守られる
若作りすれば鏡が首を振る
遺言を書く氣にさせた内輪もめ

羽曳野市 宇都宮 ちづる

百歳まで生きる設計たててみる
欠かさない検診医師が礼を言い
鯛雲バス停あとに四千歩
バブル期に育った娘等の捨て上手
彼岸過ぎ参った墓で草むしり

羽曳野市 徳山 みつこ

どんぐりの転がる小道歩く幸
台風禍だろかいつもの柿こない
鳥になり壁を越えたい拉致家族
尻尾ふるだけなら子犬でも出来る
想定外のこの世笑って生きのびる

羽曳野市 中川 ひろ介

紅葉狩寺社のほうじ茶あたたかい
ツアアウトフルカウントの十二月
朝カレージュームアップで始動する
詩仙堂若きダイアナ妃の写真
赤ちゃんパンダ体重増加百倍に

信用にあぐらをかいた社内の目
羽曳野市 永田 章 司

農耕の民が忘れた休耕田

寒気する早く帰って飲んで寝よ

温暖化天変地変待ったなし

腐れ縁切ったつもりが切れてない

羽曳野市 藤原 大子

記憶からはみ出したのか名が出ない

陽気さにつられ無口も輪の中に

外野席悔しい程に好きを言う

いつかきつと解ってくれるその日待つ

歳となり知る年金のありがたさ

羽曳野市 吉村 久仁雄

棚ぼたの未来を今も夢見てる

果たせない夢へ輝き増した古稀

孫に言えて妻には好きとなぜ言えぬ

そして鶴彬が今に凜と立つ

平行線の暮らしに心地いい夫婦

東大阪市 北村 賢子

初春へ今の命をリフレッシュ

きらめいて自分を生ききる喜寿の春

万物の命ワクワク弾む春

嬉しい記憶だけをしっかりとコビーする

粛粛と命がいて飛ぶつもり

千ピースパズル途中で挫折する
東大阪市 佐々木 満作

一強の党首に脆弱な野党

線引きの傲り裏目に出た都知事

リコールが多い企業の傲りかも

見上げれば蒼天高く雁の群れ

枚方市 海老池 洋

流感ワクチン打つていよいよ冬の陣

高級魚の端に昇格したサンマ

老いばれて前ほど伸びぬ爪や髪

ひとり飯一人の音で今日も暮れ

やがて春甘い時間を抱く蕾

枚方市 丹後屋 肇

引際に後任者の拳高く揚げ

引くてあまたスキルアップの二刀流

蟬螂が踏み潰されるパーキング

政治手腕児童と肩を組んでいる

晩餐会曲者同士睦み合い

枚方市 寺川 弘一

方程式を持てあます頃出る答え

これからは真面目になるとまた思う

ハヒフヘホどれ選んでもいい笑顔

メロスよ走れ読んで人間信じよう

補聴器を外しへつちやら四面楚歌

枚方市 二宮山久

ふる里へ帰りたくなる青い空
原点に戻る勇氣持つている
ポケットの小銭探してワンカップ
病む右手趣味の川柳作句する
我が人生宝は友の多いこと

枚方市 二宮紫鳳

傷ついた言葉に愛の深さ知る
乗り越えた苦勞の度が増えた友
夕焼けが二人を染める癒し旅
疲れない距離を保って嫁姑
愚痴一つお茶で流して立ち上がる

枚方市 藤村亜成

スケールの違い大局観の違い
各論になると対立が起きてくる
好奇心が失せ波風は立たず
ためらったとき手を染めてはならぬ
庇い合う蚤の夫婦がほほえまし

枚方市 山口弘委智

許された我儘あまた出す痛み
指先で挑む句箋が語りだす
孫一人大人六人七五三
コオロギのふと鳴きやんで妻帰る
空の青隅の隅まで嘘はない

藤井寺市 太田扶美代

二度三度包み直してあるもしも
雨は本降り引き分けにしませんか
お喋りだけどしゃべりたくない日が偶に
缶ビールこころ許してよさそうだ
約束はおおかた終えたカレンダー

藤井寺市 鴨谷瑠美子

投函をして落ち着きを取り戻す
向う岸にはきつと安らぐ場所がある
第一印象その後もずっと曇りがち
目的を持つ足小気味よい響き
ロマンチックに歩きたいのにざんざ降り

藤井寺市 鈴木いさお

子規とおなじ鐘を聞いている古都の秋
まほろばの里三山に見守られ
久米寺に残る巨岩のミステリー
山の辺の道人麻呂の息遣い
卑弥呼舞うまほろしを見る石舞台

藤井寺市 田付絹枝

杖頼りいざ出発のヤジロベエ
船頭の阿吽の呼吸竿捌き
何万年風雪耐えて亀の石
我一步子等びよんぴょんと岩畳
兩岸の紅葉匂と風靡く

藤井寺市 増井 ヨシ枝

淋しさの副作用ですよくしゃべる
菊花展亡兄の姿重ねみる
まだまだと生きる薬をのんでいる
デイサービス三回行って日々せわし
落葉掃く風がいじわるして困る

藤井寺市 吉田 喜代子

去年の布団今年は何故か重くなり
介護ホーム友を訪ねて寝付かれず
北斎の八十五歳に挑戦
戦後生まれと楽し廻れた壺阪寺
雨降りの自転車止めにした句会

藤井寺市 若松 雅枝

長雨のあと快晴で主婦多忙
決潰を案じた河の水も澄み
廃刊の報に寂しく頁閉ず
廃刊や此所にもあった高齢化
ダイエット効いたかズボン皆穿ける

松原市 森松 まつお

辻地蔵花活けてある月曜日
十二月十四日あの名作を観る
酒チビリ時代小説秋夜長
秋夜長八時に寝てる人もいる
インドアの私にアウトドアの妻

箕面市 大浦 初音

好調と不調はいつも紙一重
波の音心やすらぐ母の胎
もうそろそろ帰るころだと鍵を開け
あきらめない夢は追うもの叶うもの
見わたせばまわり年下多くなり

箕面市 出口 セツ子

跡刻む日記代わりにする句作
ストレスも愚痴も笑いに変え喋る
海外へ子を付きあわせ行く夫
用事ある時しか電話無い次男
口だけを出して周りが良く動く

箕面市 広島 巴子

北斎の波にのまれて酔い痴れる
宇宙への同化北斎すこすぎる
並ぶ価値十分にある北斎画
野菜高強い味方のもやしさま
子の夢で目覚め一日落ち着かず

八尾市 高杉 千歩

なんの間違いか悪者にされている
みんな可笑しい私もおかしいケアハウス
寝たきりの一歩手前で年新た
辞書のない暮らしに慣れて初春に
佛さんほこり被って戌のとし

八尾市 寺川 はじむ

人情が冷めた世間を温める
喜怒哀樂熟して丸くなる夫婦
明日への氣迫新たに仕舞風呂
小さい秋がでかい台風連れて来る
ぬるま湯に浸かり世間を読み切れず

八尾市 村上 ミツ子

人生の節目流行禪修行
おことわりしてもあしたはきつとくる
もったいないと溜め勿体無くも捨てる
一時の血圧下げる深呼吸
自分で掘った穴に落ち込んでいる

八尾市 山根 妙子

ラッシュ時の遅延電車は皆無口
憧れたスターベールのままが良い
昼の月しゃぶしゃぶにしてみたくなり
生きている小さなゴミ出す月曜日
ATM「お引き出し」しか使わない

神戸市 井上 じろう

煩惱がじゃまして頭空ならず
ちよい置きがそのあと探すはめになり
めでたくなる初夢みたく酒を酌む
歩ける唯それだけでお幸せ
長旅の最後になるか小笠原

神戸市 上田 和宏

草むしり道路工事と書いてある
木漏れ日が温いと思う秋の道
銀杏舞う冬が来るぞと触れながら
呑み会は月に三度と決めている
返却に特製葉挟んどく

神戸市 富永 恭子

泣かせたくない人泣かすグーチョキパー
土寄せの手抜き隠せぬ芋の出来
遠距離の子に届けたい里芋煮
ばらばらの夕食レンジフル稼働
渋柿むく母が浮かんで渋柿むく

神戸市 能勢 利子

女三人恐いものなし空の旅
オーストラリア地図を見てると声掛る
疲れたら和食を探す空の旅
あと何度出番あるかなバスポート
時差二時間二日で日常に戻る

神戸市 細川 花門

川柳で笑える日々のありがたさ
贅沢は敵だ お酒は別と言う
美辞麗句奥の虫歯が疼き出す
ガス欠は財布の中のことである
五十年に一度の雨が多すぎる

神戸市 山口 光久

胸骨の切断跡が生し

主婦業がちかごろ板についてきた

猫背だと注意されてる有難さ

よく悩みよく迷ってる生きている

毎日が楽しい今が旬だろう

神戸市 山口 美穂

うそ寒さ去年は何を着てたかな

秋刀魚不漁鮭も高値という噂

柚添えて自己満足の一品を

ご先祖さまお庭に菊が咲きました

鍋囲みお喋りやまぬ老姉妹

明石市 梶谷 和郎

千年の刻を肴に新酒酌む

リセットができたら君とやり直す

川柳に遊んでもらう寝れぬ夜

もう少し生きねば生かされる術後

巻を追うごとに三国誌の虜擒

芦屋市 黒田 能子

逃げ道があるからわたし大胆に

楽しまん四季折折の彩を着る

豊かさに慣れて平凡に暮らせない

玄関の靴をそろえている礼儀

とことん話すあなたはきつと開き出す

芦屋市 竹山 千賀子

帰りたい訛なつかし母の駅

音痴ではないが微妙にずれている

嬉しくて今日は黙っていられない

張り替えた障子に冬の陽が温い

切り口の甘さに土壇場で負ける

尼崎市 市坪 武臣

人間が好きでせっせと和歌を詠む

満月を揺らせて浸る露天風呂

シヨック死に誤算があつた余命表

ひよつとして口に出した言葉が採めに採め

何事もみなぎる志気で盛り上がる

尼崎市 加川 靖鬼

あるがまま愛燦燦と一〇五録

何がめでたい毒舌吹雪く一〇〇万部

赤ちゃんが家族一家の舵を取る

知らんぷりしていて動く猫の耳

毛虫からひらりと蝶になる魔法

尼崎市 藤井 宏造

眼鏡屋の店員さんは皆眼鏡

テレビからふる里の過疎知らされる

マイペースで生きていくにもいる勇氣

強がりはやめよう侘し過ぎるから

飽きたなど妻の前では禁句です

尼崎市 藤田雪菜

忘れそう娘に教える隠し場所
お帰りと魔法の言葉安らげる
新聞よりチラシに妻が目を通す
忘れよう明日へ進んで行くために
スーパールの秋をつぎつぎ買ってくる

尼崎市 山田耕治

宝かな闇の布団に句を想う
コラスで友の棺を送り出す
元氣かと亡き妻からの電話鳴る
母さんは紅葉マークの父の横
話してらうちに答えが見つかった

加西市 金川宣子

絵手紙のドジョウのような字がたのし
長身の孫からハグを受け止める
店先の親娘と知れる笑い声
好きな肉囁むだけかんで横に置く
補聴器の助けを借りた地獄耳

川西市 大坪一徳

金言も入れておきたい遺言書
温水便座ニホンブンカはスバラシイ
半額シール貼る店員を追いかける
没の句のてにをは変えただけで天
どれどれと僕のプラモを壊すパパ

川西市 岡一心

泣き笑い生きかた上手浪花節
年重ね幸せ重ね夫婦愛
ミサイルの答は北への嫌悪感
聖火待つ東京五輪期待感
大志抱き人生夢あり日日新た

川西市 山口不動

傘寿ですあの世への塾行く予定
睡眠は細切れですが足りてます
年賀状減らしはするが出すつもり
ねぎらつて通る人あり落葉掃き
暮れなずむ飛行機雲は赤い糸

篠山市 北澤稠民

いやなこと流してくれる時間あり
何年ぶりむかしのパジャマ出して着る
怒らない一日過ごす長かった
とき忘れ友と語りし露天風呂
仕分けされ私の居場所なくなった

篠山市 酒井健二

酒飲めば天下を愁う老春期
真っ直ぐに生きて来たとは言えません
AIに笑顔は勝るアルバイト
グウタラに生きてごめんね血糖値
ため息で自律神経整える

三田市 足立 つな子

遠慮ない空気になれた差し向い
ナニクソと闘志みなぎるコンディション
定年のない主婦に勤しみおばあさん
紅葉狩り拭いきれない垢落とす
下り坂こだわりのない日を送る

三田市 石原 歳子

独りぼっちの家にも来ますお正月
賑やかに部屋で咲いてるシクラメン
独りでも好きだからこそ鍋料理
食べたい物食べて元氣だ独り者
立冬を過ぎても暖房せずに居る

三田市 上垣 キヨミ

叱られて孫に習っているスマホ
痛み止め切ない胸に届かない
予報士が教えてくれる今日の服
川柳と犬の絵描いて出す賀状
落葉掃く私を試すつむじ風

三田市 上田 ひとみ

うつとりとしているヒマはないこの世
酔うほどに今宵のなんと愛おしい
つまらないジョークで君を引きとめる
切り取っておこうキラキラこの時間
堂々とほんものの顔して座る

三田市 尾崎 一子

食べて寝る順調なのも不安です
兄弟姉妹ふる里便が温かい
また会おうスマホ便ではもの足りぬ
家計簿のそばに百円募金猫
なるようになる淡々と平和の灯

三田市 多田 雅尚

ボージョレの解禁待つて買うワイン
スマホには何と不便な太い指
飲みながら話せば消える蟠り
マンホール開け閉めもするアライグマ
李下に冠両手を上げて乗る電車

三田市 谷口 修平

使う事無い多機能に買い換える
百均で離婚届の印を買う
デーサービス葉の数を自慢する
簡単に簡単スマホ使えない
定年後猫に教わる処世術

三田市 野口 真桜子

手の内を読まれ寒月独り酒
スマホも車も人格を持つ近未来
本音より時間をかけた嘘ばかり
あの世まで追って来ましたヤミ金融
マスコミが煽る不倫は平和惚け

三田市 福田好文

定めとは知れど寂しい兄の葬
正座出来ぬ喪主に遺影の苦笑い
取り巻きの陰忘れて有頂天
薄氷を何度踏むやら夫婦舟
ハイキング濡れた丸木の橋渡る

三田市 村田博

孫喧嘩口を出そうか見てようか
ケーブルカー紅葉乗せて夢乗せて
一〇〇万ドルしません六甲のデイナー
ト書きにはここで休みと書いてある
高齢者教習年寄りになる踏み絵

高砂市 松尾柳右子

三姉妹久しく会えている八十路
カンジキをはいた秋田の人思う
一人居にデイスービスの語り合い
病院も娘の世話になる行き帰り
年賀状年々減ってくる老化

宝塚市 田中章子

選挙日は台風だから前日に
明日あると思えば今をすぐさばる
締切りヘミューズお出まし願いたい
わたくしのアンテナ今は修理中
秋夜長積んでた本を読むつもり

宝塚市 丸山孔一

社交術妻に頼って友が有る
非常食賞味期限が二年過ぎ
老い先を思い物欲姿消し
躑する親の躑がなつてない
赤飯と粽ちまき蒸籠の湯気に酔う

西宮市 秋元てる

ひ孫と爺歩いただけで拍手され
孤独死と言うが生物皆独り
横文字が溢れて老いの居場所減る
がつちりと裏打ちされた父の小言
惜しい人と生きてるうちに言うて欲し

西宮市 亀岡哲子

小学生まではギュギュツと抱きしめた
おばあさんもお久し振りはハグをする
柿すだれ吊した頃の背の高さ
三分間待つとひよっこり出た名前
切れぬまま日付の変る長電話

西宮市 西口いわゑ

青信号振りむかぬのも情なり
秋の夜長林真理子に癒される
シチューぐつぐつ家族の揃う日曜日
あの人の言うことならばそれでいい
満月とおとぎ噺の中にいる

西宮市 福島弘子

奈良県 安福和夫

生命保険きつともらうぞ満期金
ベット保険三匹分は痛いなあ
歌舞伎まで外国人に教えられ
境内を黄の絨緞の大銀杏
雪の中大内宿の時止まる

西脇市 七友田順子

奈良県 谷川憲

一病と仲良く生きて一万歩
鴨が来た賑わう池に餌を撒く
秋明菊小春日和に羽根広げ
断捨離が頭に乗っかり偏頭痛
ポケットにどんぐりころろ福が舞う

姫路市 古川奮水

奈良県 中原比呂志

回数券大切保管期限切れ
折を見て尋ねてみたい友の里
体調がすぐれぬ予告爪荒れる
杖持てば歩く姿勢が歳になる
自転車は小型に変えて楽になり

南あわじ市 萩原狸月

奈良県 長谷川崇明

視聴率稼ぐスターのスキヤンダル
退院にお膳の猪口がおめでとう
久しぶり故郷訪ねた墓じまい
まつり寿司舌が覚えて居た故郷
縫針が絶滅をした核家族

今さらと思うが消えぬ旅心
タレントと共に英国巡る旅
リスクない画面の旅は素晴らしい
居ながらに外国訪問まるで夢
グーグルで世界どこでも降り立てる
異国語が飛び交い活気古都の路地
秋祭り活気もどった過疎の村
被災者の重い言葉に胸痛む
いたずらした恩師にお詫びクラス会
今年また断捨離できず暮れ迎え
空襲も地震も乗り越え九〇〇号
文芸は市民と育ち九〇〇号
伝統と歴史心に九〇〇号
九〇〇号支えた塔の仲間達
九〇〇号指差し確認発車よし
一杯のスープ母には近づけず
いたわりの一言かけて冬温し
妻の持つ紐の長さにある自由
張り詰めて緩んで締めて五十年
思い出も夫婦をつなぐ隠し味

奈良県 渡 辺 富 子

杖をつく夫へ風が強すぎる
淋しさと背中合せて聞く吹雪
母恋えばほんのり胸につく明かり
容赦なくずばずば言ってひとりきり
あれやこれささり忘れて生き延びる

奈良市 阿 部 紀 子

明治の亡父泳ぎ遊んだ道頓堀
谷町の坂自転車で駆けた亡父
心斎橋次々老舗減っていく
台風一過夫いるので怖くない
安倍首相敵の一言助けられ

奈良市 宇 賀 史 郎

生臭い話のあとの子の寝顔
憧れた町に未練のUターン
騒音と寺に苦情の鐘の音
手品師の嘘政治家の嘘飯の種
改憲派終戦古い過去と言う

奈良市 大 久 保 眞 澄

コーヒーに砂糖カッコ悪いですか
おばあさんです正直な写真です
耳で探す奈良公園の日本人
中国産だけど甘栗食べている
一面記事を突っ込んでおく濡れた靴

奈良市 高 橋 敬 子

退社の波譲られた席ゆずりたい
同じ道子の辿らねば不思議気に
紫式部揺らして鶴は空を飛ぶ
寒い夜のお鍋ほっこり箸はずむ
嫌ですと言ってられないスマホの世

奈良市 辻 内 げんえい

平均じゃとても満足しないママ
ほっこりとドラマ見てたら妻寝息
ノルマから解放されて臍抜け爺
縮むじいちゃん伸びる孫との背くらべ
イケメン度オレ パパジイの順と孫

生駒市 飛 永 ふりこ

戊年も健やかなれと弾む古稀
人波に吞まれ梅田のバイキング
いけずさもふっと同情さえ走る
頬張れる栗大福のこの至福
人恋し壺焼芋のほこほこさ

香芝市 山 下 純 子

太陽に向かって歩くスニーカー
ほめられた記憶はないが父の愛
草引きをしつつ心のトゲもぬく
消しゴムで消してしまった片想い
ライバルに勝つものないか捜して

桜井市 安土理恵

めんどりの躁ぐ辺りは避けていく
背骨きしんでいやでも老いを自覚する
告白のかわり焼きいも買うたるか
この指に止まれお酒の好きな人
銀色の楽園いつか誘いがくるだろう

和歌山市 磯部義雄

おさがりの服三代目七五三
世界観語り歩いてきた夫婦
入院の妻の枕を抱いて寝る
台風目の中に居る今朝の妻
凶器にもなるから怖い多数決

和歌山市 上田紀子

体力の低下子供も若者も
その内に日本の四季が崩れゆく
生きてゆく恥の上塗り重ねつつ
美しい錯覚でした喉渇く
毎朝のドラマを綴るマグカップ

和歌山市 喜田准一

体力と気力残して八十路坂
似たような事考えて恙ない
別姓に何の不思議もない時代
一人言一人相撲が増えて齢
お出掛けへ手抜きか握りめし2つ

和歌山市 楠見章子

道草の相手こおろぎしてくれる
パンチ一つくらって落ちた蟠り
すれ違う傘は斜めに城下町
行列のしっぽに旗があるまつり
残り火を抱いて女は軽やかに

和歌山市 坂部紀久子

何用で二階へ来たか外眺め
カーテンの隙間の明かり天気読む
右左と足がまだ出る有り難さ
朝に昼昼には夜の献立を
東大生のクイズ私も答えられ

和歌山市 武本碧

まだ若い若いと呪文かけておく
そのお世辞えんま様でも頼ゆるむ
愛されておすわりお手もしない猫
つないだら軽い命も生き延びる
弥陀の膝ナビはなくともたどり着く

和歌山市 土屋起世子

一年の計は断捨離するリスト
人並の暮し守った骨密度
髪白くなって人生いま佳境
たいていの事は許せる歳になる
檸檬の味今も変わらぬクラス会

和歌山市 福井 菜摘

うるわしき初日に思う自然体
リセットをかけて新年走り出す
さわやかにペンを走らす初日記
ひと言がやさしい風を呼び寄せる
身の丈に生きて心にもつゆとり

和歌山市 古久保 和子

いつ恋をしたのか落ち葉踏みながら
ふる里のルールのままに剥くみかん
ポディーツープよりも石鹸派の夫
不器用な手にもクリーム塗ってやる
なんとなく気分が晴れる抽象画

和歌山市 堀 富美子

熱中のいつときパワー全開す
年金日逆立ちにする化粧水
もう少し其方で居れと遺影云う
目が醒めて今日の予定を確かめる
ブライドを捨てると私が軽くなる

和歌山市 松原 寿子

一首に奏で伝えてみたい深い秋
口下手を誰かりフォームしてほしい
使うほど頭の冴える趣味がある
通過する列車に時刻知らされる
たった一枚でも寄り添えた日の写真

岩出市 藤原 ほのか

もう少し敵の出方を見てみよう
わたしの敵はわたしの中にある
引き際を悟って今を謳歌する
親子なら引くに引けないこともある
指文字で告白されて揺れた日々

海南市 小谷 小雪

揺れますが歩行に支障ありません
井戸水に大地の温さ知らされる
月末のバランスをとるメザシ焼く
目の前をひらりと着地柿一葉
先ず絵馬をミスなく掛けて受験生

海南市 堂上 泰女

デパ地下も閉店真実フル稼働
荒らしてる庭にも実る秋の幸
咽から手パソコンだけで見えるヴィトン
大好きなアダモとパソコンでデート
木枯しに追い返される万歩計

紀の川市 宇野 幹子

ふる里で昔のネガを巻きもどす
コミカルな足音残し秋がゆく
脳トレのページめくった窓の月
図書館の椅子で冬眠から覚める
咀嚼してみよう案外味がある

紀の川市 北山絹子

ほんとうは油断も隙もないあなた
秋の夜長を軽い布団がうろたえる
傘の中何を喋っているのやら
バーゲンへ誘われてゆく母の足
ぎりぎりに生きているのに美しい

紀の川市 楠原富香

残すもの無ければ子等の仲が良い
スタミナを配った母のにぎり飯
主義主張もたぬ男が昼寝する
秒針の音に命を削られる
何もかも話したくなる聞き上手

紀の川市 山東日出男

一点を見据えライオン風になる
人望の厚い名医が書くカルテ
夕焼けにとけこんで行く赤とんぼ
時々愛も充電しています
深海でジッと出番を待つ新種

紀の川市 辻内次根

風澄んでいます田舎の赤い柿
灯と香と経と私と雑念と
これまでの僕とこれから秋の雲
髭を剃る今日も抜かりのないように
その時が来たと桜の葉が言った

田辺市 岡本昇

四面楚歌素直に助け求めます
身の丈に合った歩幅の万歩計
聞き役に徹し知識を広めてる
好奇心若さを保つエネルギー
釣り上げた魚に餌をやっている

鳥取県 石谷美恵子

名画のような日没拝む浜育ち
姉のような師と七十年のお付き合い
貧富の差どうあがいても桁違い
傷口は小さいが辛い心傷
寝たきりへ明日を約束して帰る

鳥取県 坂本とも湖

菊一輪ああ友が逝く秋がゆく
風鈴が孤独なわたしだと見抜く
談合の一部始終を聞いたモカ
カラス鳴く喪服の準備しておこう
極楽へ行きたい遍路笠の鈴

鳥取県 竹信照彦

七人揃ってすき焼温い顔
孫の守済まして妻は呑気節
妻と付き合う締切りに追われぬ日
間引き菜をするので農業は撒けぬ
来た道は違うが一緒老人会

鳥取県 西谷悦子

台風豪雨あさの新聞ありがとう
お料理で家族支える心意気
この稲で命もらっている至福
仏壇にお礼を言つて今日終える
上中下わたしの価値を自問する

鳥取県 松川行男

椿事かい案内状に御がついて
紅葉狩り十一文の靴は白
髪染めて帽子被つて秋深く
服を買う紅葉狩りも出しにする
男つて酒と見えとでみやげ買い

鳥取県 山下節子

一生に先生と呼ぶ人あまた
過去のこと今さら知つてどうなるの
簡単に二者択一が決めれない
孫の嫁探す間もなくつれて来た
マグロの値獲れた港で桁違い

鳥取市 池澤大鯨

鋭利な刃物どこにでもあり凶器めく
「運命」をしきりに聴いた若い頃
クラシック上品ぶっている輩
修羅離れ今はどっしり構えてる
交通規制笛一本で指図する

鳥取市 奥田由美

太鼓判押されてからの受難みち
スヌーピーとポチがコラボの干支賀状
欠かさずに賀状いただく亡母の友
カート押す夫とドライブ道の駅
逝く日までの増判ないな広辞苑

鳥取市 加藤茶人

幸せのあの日に帰る肩車
オベツカも愛想笑いも飯の種
ドックから神の戒め聞く煙草
どの色の涙か虹に聞いてみる
味噌汁の味は女系の変遷史

鳥取市 岸本宏章

十月の台風雪も連れて来る
社保庁に内緒で食べる松葉蟹
タイブレークじゃんけんよりも良しとする
憲法の不備で困ったことはない
日本に二大政党育たない

鳥取市 岸本孝子

贅沢は人と比べるものでない
好き嫌いなくて元気が取柄です
家中がお花畑の新所帯
白髪に逆らうように赤を着る
風邪ひくと気遣う夫がいてくれる

鳥取市 倉 益 一 瑤

コスモスがおんなな心の色に咲く

恋愛を知らぬ卵を買って来る

言ったでしよバラには棘がある事を

世は無常突然波が牙をむく

青春の音符が埋めてある砂丘

鳥取市 田 中 天 翔

夕焼けが赤面カバーするデート

素うどんで下げますエンゲル係数

したたかに保護色になる雨蛙

お願いをちっとも聞かぬ流れ星

納豆の糸をなんとかして欲しい

鳥取市 棚 田 大

人生の着地場所を探して

富士山に着地の夢見元氣湧く

桁違い子ども時代を浮かべて

池の鯉エサ持つ孫見寄って来る

俺論す句に触れ気合い喝入れる

鳥取市 谷 口 回 春 子

愚痴もまた人生歩む羅針盤

戒めにどこか似ている妻の愚痴

分限者になれば世間も広くなる

選り好みするたび増える敵の数

昭和の子どこかやってた江戸しぐさ

鳥取市 永 原 昌 鼓

アスリート東京五輪待ちきれん

老い独り味覚音痴が進み出す

投げやりな暮しそのうちゴミ屋敷

川柳へきっかけくれた友も逝き

遠すぎて頼りにならぬ好きな人

鳥取市 中 村 金 祥

ぬけ殻とならないように趣味を持つ

千代川千代に八千代に水清く

鬱の字を覚えうつつから脱出だ

青春に触れる数え切れない愛

Jアラート突然鳴らぬよう願う

鳥取市 夏 目 一 粹

ほどほどの空気を出入りさす我が家

へソ練りが減ると心が沈みがち

死ぬときは貧乏神を連れてゆく

天国を目指して善を積んでいる

長く生きると言うことは辛いこと

鳥取市 平 尾 菜 美

欲はなれ望む私の趣味志向

老いかしら鈍る五感がもどかしい

晩学の気力高める秋が好き

真向きに走る未来の子等いいね

今日を食む勿体ないを秘めて食む

鳥取市 福西茶子

八万回食べて白飯まだ飽きず
無愛想と度胸は父母のDNA
バラの赤よりもワクワク夕茜
黒髪もファーも贗だが温かい
熊蜂に出合い咄嗟の死んだ振り

鳥取市 前田楓花

ピヨピヨと殻を破って出ておいで
幸せの種はころのど真ん中
前を向く別れの空は茜色
決心がつかぬまま雨降り続く
突然に道に出てきたおばあちゃん

鳥取市 山下凱柳

五七五と脳トレ励み指を折る
年金日位はビール飲みたいな
勝負分けたあの一言で自滅する
風を読む力試した総選挙
玉虫色で決着つける加計に森

鳥取市 吉田孔美子

住みたいね八重山の白い砂に猫
砂丘護れば沿岸に荒い波
浜消えて波は国道脅かす
洗濯で主が不明になっちゃった
舅の古着ゆつたりと利用する

倉吉市 猪川由美子

圧勝で総理の驕り恐いわな
物議を醸すトランプついに来日だ
刻々迫る皇后覚悟よろしいか
価値観の違う人とは暮らせない
一年経ても続く余震に疲れ果て

倉吉市 山中康子

大会が終わりやつと重荷下りた
琴の音にうっとり奮い立つ海馬
経験の涙を積んで得た誇り
これしきの悩みわたしには重大
胸の内晴らす川柳あればこそ

米子市 後藤宏之

店じまいしたくて出来ぬ三代目
しばらくはねむっていよう処世術
今日の客のどかをもつて来てくれた
タイマーの音がたよりの台所
触れあってみればどなたもお人好し

米子市 後藤美恵子

気は心酸欠防ぐ植樹する
汚染のない土に新種は植えましよう
満月が照らす手抜き草までも
物言うな古人の教え身に沁みる
見舞いの嘘閻魔に舌は抜かれまい

お目当ては句会のあとに待つお酒
米子市 竹村 紀の治

肝臓に事後承諾をさせて呑む

コンビニのおでんとチョッと雨宿り

気持ちではひらりと飛んだ水たまり

ハロウィンと張り合い僕は芋焼酎

米子市 成田 雨奇

もうこれで川柳やめた全ボツだ

全ボツの仲間を探しひと安心

全ボツに寄り添う酒の味気なさ

全ボツに寄り添い選者こそおろす

うまい洋酒全没なんかどうでもええ

島根県 伊藤 寿美

成人式の孫に奮発したパール

石路が手離す家に咲いている

鈴が鳴り熊は森から出られない

過疎に嫁嫁の来る日はお祭りだ

私の蔵狙う押し買い押し返す

島根県 川本 畔

許さぬと言われた姑の位牌拭く

ポケットにグーの握りを入れている

廃校の前に佇む元教師

こわれゆく記憶を指に覚えさせ

犯人は誰だピーマンもいでいる

わからへん分からへんけど許したる
松江 石橋 芳山

もどかしい手つきで作りだす虚像

醜さは隠せず膨れだす邪心

少しづつ鋭利にとがり出す自尊

掴めないところで憧れが光る

松江 藤井 寿代

はみ出したピース仲間を探してる

二等辺三角形の罪と罰

バスタブに明日の夢と後悔と

さらばえた私を包む赤い服

喪のハガキいつしか雨は紫に

松江 松本文子

鼻唄がある唄う場合ではないが

辛くても無事に済んだと鐘が鳴る

ひたすらに作った弁当箱仕舞う

ヘルプミイ繋いだ糸が皆切れた

さようなら大阪さよなら師友よ

出雲市 伊藤 玲子

檜皮茸きの反り美しく鳥渡る

木の葉髪人は言葉を力とす

金婚のお禮参りは吾一人

天高し地球はどこか病むらしき

孫も着る父の匂いの七五三

出雲市 岸 桂子

石橋を叩き過ぎてた夫の癖
限界という水溜りとんで見る
影法師亡母の形になりたがる
言葉から棘だけ抜いて聞いている
陽が沈む今日得たものは何だろう

出雲市 小白金 房子

財布から出れば万札花と散る
星月夜昔話が窓に降る
赤少し足して余生を丸く住む
赤飯も供へ勤労感謝の灯
残業の灯りへ月も味方する

雲南市 菅 田 かつ子

娘が誘うランチへ弾む青い空
三世帯いろんな意見居て揉める
格好はどうあれお洒落して出かけ
声だけを聞いてぶつんと切る電話
足接ぎに上って見てもとどかない

雲南市 松 本 昌

静寂の中に住んでる過疎地です
迂回路もなく人生に悔いばかり
簡単な事を議論の地域の和
限界に挑戦老軀に鞭を打つ
旅三日我が家の漬物欲しい朝

岡山県 池 田 たか子

くらげにもくじらにもなるくもにのる
真実が小さくなつていく噂
八十の夢セーラー服のハロウィン
いつのまに機械の音で済む稲田
押入れの昭和の苦楽捨てられず

岡山県 田 中 恵

庭木摘む脚立に命握られる
穏やかな時間流れる菊日和
組板が今朝も元気な音を出す
楽しそうに貧乏神が舞う我が家
あれこれと言うている間に陽が沈む

岡山県 紫 しめの

泣きやんでから来いという父の墓
笑ってはならぬ我が身も同じこと
何もしない休みあつてもいいじゃない
しがらみを捨てて心を軽くする
満月が呼んでいるので参ります

岡山県 山 縣 のぶ子

御先祖に勝る仏はないと言う
若かった希望に燃えた地鎮祭
世の風を足の裏にも潜らせる
ゆんべの句スッカラカンの朝が来た
原点のゼロに戻って夢を描く

岡山市 工藤 千代子

手のひらの残滓に棘が混じってる
それぞれの時計を持っていて夫婦
一部屋で事足る食べる寝る笑う
掃除されゴメンと言っているのだな
輪のなかでなんだかんだが揉めている

岡山市 丹下 凱夫

業を剥ぐ如く断捨離ひとつずつ
無住寺の鐘を思いつきり撞く
山の辺の道にドングリ拾っている
法隆寺郵便局のポスト レトロ
バツサリとやってくれました全没

岡山市 永見 心咲

初期化する様に参拝しています
書き初めの筆が讃辞を所望する
多国籍料理を詰めた三の重
門松の意気揚々と天を差す
おめでとうよろしくねとが交又する

岡山市 藤成 操江

うっかりと認め言い訳考える
群少し離れて見えてくる景色
自分史を心の中で書いている
七転びあってひとりの自由席
帰らざる日々のすべてが宝物

岡山市 前田 恵美子

台風よ曲がらないでと言ったのに
台風目の中にある静寂さ
迷っても私は私変わらない
時として必要になる曖昧さ
人好きの虫が蠢くお節介

笠岡市 藤井 智史

やる事が見つかりました酸素吸う
カッとするカッパにきゅうり差し上げる
わたくしの愛は七つの海を越え
強引なわたしに変える酒を呑む
タンタンタンタンタタ生きていく

広島市 岸本 清

ふっ切れて今日は心の洗濯日
一喝をしても効かない物忘れ
職人が消えてく日本の物作り
ナイスデーひとりカラオケひとり酒
メイド・イン・ジャパンを汚す大企業

竹原市 石原 淑子

地球危機平和祈願の鈴をふる
隣県にミサイル防衛配備とか
泪のあと明日の助走茜空
傷ついたシャイなハートの青林檎
もう知らん言葉の底にある情け

宇部市 平田実男

私を育ててくれた愛の鞭

川柳と俳句垣根が低くなる

本当の杖は愛妻かも知れぬ

三面鏡見たくないといこまで見せる

消しゴムと修正液は必需品

下松市 有海静枝

家事雑用ひとり分だが減つてない

生きている証に溜まるゴミ分ける

シンデレラ洗濯物が冷えて待つ

欲しいバカボンのパパほどの素直さ

矯正をされて出口が欲しい肉

防府市 坂本加代

わたくしに監視カメラが付いて来る

しばかれて強い男になる昭和

一仕事終えて第二の幕が開く

ごめんなさい猫が小声で通り過ぎ

娘の声が明るいトーン電話口

松山市 栗田忠士

等身大で生きると決めて荷が軽い

ひらがなのジョークで最期締め括る

父の齢越えても越せぬ父の塔

はらわたの芯まで沁みる津軽三味

傭兵を募って祭りやつとでき

松山市 古手川 光

山頂から秋が日毎に降りてくる

餅を搗く音を聞きたい年の暮れ

凜としてここに居ますと寒椿

無意識に出るどっこいしょよつこらしよ

今時のお年寄りはと言われそう

松山市 宮尾 みのり

身の程は弁えているはずなのに

シエルターから出たらだあれも居なかった

出来過ぎたお人女の輪に要らぬ

孫も子も私も同じ転び方

五十年前のことなら鮮明に

松山市 柳田 かおる

どんな実を付けるわたしの持ち時間

貧しかった頃がわたしを造つてる

豊かさの海で溺れているわたし

ライバルも薬の数かふえている

窓ぎわの椅子でジョークが届かない

大洲市 中居 善信

柙に鰯の頭吊つて冬

CTで覗く私の腹ん中

串刺しにするかトランプとか男

付度は上手に生きているこの世

曖昧な返事が妻の勘に触れ

友達の記事で決まる旅プラン

西予市 黒田茂代

気晴らしの旅思いきり派手を着て

二月堂昼は静かなたはずまい

近くから見ると眩しい阿修羅像

入魂の鐘の音に仏声を聞く

高知県 小澤幸泉

東京に戻る気はない帰れない

今どこに私の居場所分らない

ハンドルは他人任せの古い二人

神と妻両手で降りる重い坂

キリストの十字架とても重すぎる

北九州市 小松紀子

ティータイム友三人が終活を

体の声をきいた無理は厳禁

老いました探しものが見あたらず

起きてすぐ亡き子に庭の菊一輪

老犬に散歩行こうと誘われる

唐津市 坂本蜂朗

さあ来いと老いの表札肩を張る

老いの意地優先席を避けて立つ

地獄への順番長い列をなす

手話ニュースならよく判る遠い耳

笑い声電池が切れたように止む

室内の暖簾取り換え冬を待つ

二人して腹から笑う寄席の椅子

待合室ナンバー呼ばれ手を挙げる

クラス会話しているうち若くなる

治癒近し感謝しながら薬塗る

熊本市 杉野羅天

黄金色僕には秋の稲の色

教科書がない風になる莫迦になる

四天王寺歩き疲れた日のお寺

バラ三輪エディット・ピアフが聴こえそう

花好きでおとこ失格とも思い

沖縄県 森山文切

折れたクレヨン色を取り戻した塗り絵

凍死せぬ奇跡を売っている少女

モナリザの前で迷いは見せられぬ

唇を隠して泣いている檸檬

さよならが凍ったままの冷凍庫

札幌市 小沢淳

リサイクル店でブランド手に入れる

仲裁のいない地球に唾み合い

負けること覚えて世間広くなる

男です水を下さい萎えてくる

いのちからのいのちのえにし現在地

札幌市 三浦 強 一

底辺で暮らして高所恐怖症
正解のない幸せという尺度
そこまでを言ってしまった後始末
名前悪いがどぶ漬の美味さ
母の乳房形状記憶している手

黒石市 佐藤 古拙

真逆だなマイノリティーを軽んずる
雪おんな透き通るよに子守唄
賀状書くまだ生きている証しかく
葉がおちて隣がぐっと近くなり
夜が明ける驚馬も初夢ありがとう

弘前市 浅田 隆樹

妻知らぬうな重食べた一人旅
イベントはお天道様を先ず招待
老い二人時空を超えて会話する
用件が無いから長くなる電話
蟹だけじゃないと無言の栗の殻

弘前市 稲見 則彦

あの夏がどこへ行ったと曇降る
大地讃頌アリはまだまだ眠られぬ
につこりと笑って飲める酒がいい
縄のれん潜ると会える難破船
紅白の梅が咲いたと孫が告ぐ

弘前市 岡本 花匠

雑談も至福の笑顔老夫婦
たわいない話も至福ふれあい日
津軽富士へ今日の頑張り礼拝す
百歳へ淡ごころかも卒寿夢
年越しそば終えて清しい除夜の鐘

弘前市 今 愁女

テレビのネコに僻みはしない秋田犬
隣組空家二軒になりました
少子高齢ひとり暮らしも多くなり
日本近海サンマ遠のく訳は何
ミサイルが趣味なのですか北のドン

弘前市 須郷 井蛙

足代も食代もないボランティア
台風も熱中もなし冬の陣
腹八分口も八分で世に生きる
期限切れ直前集め主婦の知恵
民進党線香花火のように消え

弘前市 高橋 洋子

国交はさておき自由な食文化
さっと出ぬ言葉に詰まる喉仏
人間だから泣くも笑うも生きる糧
小細工はしない親父の一本気
廃家の雑草だって華の秋

弘前市 福士慕情

上尾市 中村伸子

ボロボロの辞書だが一句まだ出来ぬ

虫の音が弱い お山に雪が降る

八百万の神に願いが届かない

閻魔様二枚舌とは気付かない

石を積む水子地蔵の風車

男鹿市 伊藤のぶよし

一徹さ父に似たよな浮浪雲

生きていりゃ一難去つて亦も一難

面取りをされて素顔を晒せない

千羽目の鶴と一緒に夢紡ぐ

断捨離だろかピノキオの鼻すてである

塩竈市 木田比呂朗

意気込みで捲る陸月のカレンダー

目標はいつも大きいスニーカー

三箇日普段着のよさ噛みしめる

急ぐなと雑煮の餅へ黄信号

ケンキョけんきよと鶯の初音めく

さいたま市 星野育子

非正規で国会議員雇用する

不祥事のニュースの度に消化不良

物売りの声騒音で規制され

趣味の会一つ抜け肩の荷下ろす

洗濯をせずにおれない秋日和

紙漉きを伝える女の瞳の強さ

お日さまを浴びてクリステイ読む時間

放火魔のまだ捕まらぬ三の酉

サブリなど効きませんよとあしらわれ

アイボなら飼えそうとまた思つてる

東京都 川本真理子

くもりガラス老母にはちようどよい明かり

部屋からは己鼓舞する独り言

猫君と呼ばば振り向くまでになる

何かあるごとに失念する一つ

アナログにもどり人間にも戻る

東京都 まえでとよこ

あさがおの棚をたたむと空ばかり

投票日晴れまを待つておちつかず

雨あがり対岸のビル杭のよう

雨の音気のむくままに爪をきり

戦火のあと途方にくれているモスル

八王子市 川名洋子

やせた秋刀魚が気の毒になつてくる

愚痴を聞くホットココアを飲みながら

ふんわりと私を包むカスミ草

夢でしか会えなくなつた人恋し

薄味の煮っ転がしは母のため

横浜市 菊地政勝

言い負けた拳すぐには開けない

味方から敵に変わってゆく鏡

人間を意のまま使う電子音

終電を逃がしベンチで酔い醒ます

隠しごとあるのか話題変えてくる

富山市 島 ひかる

新年へ戌年の亡き兄想う

今年また白紙にどんな絵を描く

きらいな人出来ないように生きている

嫌いな人の氏名やさしく呼んでやる

読みすぎた風にチャンス奪われる

可児市 板山 まみ子

それぞれに違う輝きある命

誰も居ぬ今夜のミニードレミファソ

北風にマスクと帽子どなた様

まだできるいつまでできる草テニス

強くない横綱揃え国技なり

愛知県 早川 遡行

バトンを渡す相手が見つからない

一合を楽しむに待つ夕ご飯

私より長生きベットもう飼わぬ

日向ぼこ落葉の音を聴きながら

へべれけになる迄飲んで楽しいか

大山市 金子 美千代

口角を上げてせめても若づくり

雨しとど千に届かぬ万歩計

お手頃と言われて見張る桁違い

台風に耐えたくもの巣払えない

正月くらい奮発せよと言うチラシ

大山市 関本 かつ子

三面の明るい記事を探す朝

大慌て車のキーが見当らぬ

薬から始まる明日の旅支度

借金のリスクを背負う子の世代

ごつつんこ駐車場にもある鬼門

鈴鹿市 小河 柳女

常識もあやふやになる末世だな

椿が好き椿顔にもなってくる

プラス思考で海を越え山を越え

頭から泉が湧き出るのを待つ

悪口を言わぬと決めた人生だ

(前月分) 上尾市 中村 伸子

二十年後見に行きましよう えつまさか

今日は注射明日は検査とよく通う

今日わたし七四二番さん

お叱りは愛あればこそ受け止める

逆行をする自転車に教えない

(前月分 西口いわゑさん、石原淑子さん、成田雨奇さんの句は68頁にあります。)

川柳塔の

川柳讃歌

⑮

上方芸能評論家 木津川 計

切腹を思えば手術夢みたい

奥村 五月

小林正樹監督の撮った「切腹」は、欧米で「ハラキリ」と呼ばれ、評判になった。金を無心して、貰えなければ切腹するというと、どうぞそうしろ、といわれたばかりに、いうところの「タケミツ」、竹の刀で腹を切る悲惨な最期だった。音楽の担当は武満徹だったから宣伝部は「切腹はタケミツ、音楽もタケミツ」としやれたが不都合なCMといえた。五月さんは全身麻酔にメスで切腹、醒めるも手術は「夢みたい」。侍は生身を切ったのに。

肩書きは家長補佐です定年後

島田 誠 一

文楽三味線の間人国宝だった野沢喜左衛門さんは控え目で謙虚、洒落一つ言わない生真面目な方だった。東京公演に行ったある日、若手数人を夕食に誘い、連れていった所が三越新館の和食堂「喜左衛門」だったから若手

は驚いたのなんの。「ええー」「ちょっと副業にやってんねん」に二度びつくり。後にも先にも喜左衛門さんの冗談はこれ一度だった。が、誠一さんは会う人毎に「家長補佐でんねん」の冗談を毎日うれしそうに言う。

ボケ防止などと娘に使われる

石谷 美恵子

ボケ老人は差別語だから認知症といわれ、当節はもの忘れ外来やメモリークリニックへ行く。が、身内は別で、美恵子さんは娘さんに「ボケ防止」といわれて使われている。それでいいのです。今号菅田かつ子さんも「しっかりとした嫁さんの部下になり」で、嫁長補佐として働いているのです。使われ、働かされている内はまだ花なのです。「なんにもしなはん」と言われたら終末は近い。美恵子さん、どんどん使われ、働きまわろう。

食材と器が醸す和の文化

近藤 正

ある日、友人宅で夕食をよばれた山口瞳さんは驚いた。食卓に一枚の皿があるだけだった。お子様ランチ用の仕切りのあるプラスチック製の上に、ハンバーグに焼魚、煮物に野菜、漬物まで盛ってあった。「私は戦場にいるのではない」と「礼儀作法入門」でいう山口さんは食材に厳しく、器に凝って魯山人

の食器を六十点も持っていたから一財産だった。正さんの鑑賞眼は大したものだが、魯山人の食器を十点は持たねばといわれたら…。

煌めいていよう私は美しい

平井 美智子

字面から僕には「煌めく」は「生めく」としか読めなかった。燦めく星座のきらめきがかがえない。「鬱」という字を生み出した人の鬱を思い、「明日」を編み出した人の明るい日の希いを察するように「私は美しい」と言い切れるひとの美しさを僕は想像する。なべて女性に燦めく星のようであらまほし。だから僕はその美しい星座を忘れまいと夜空の端を折っておくのです。美智子さんはむろん、川柳塔女性群像の輝き続かんことを。

喪の家を静かに御興通り過ぎ

宮尾 みのり

菊池寛の「屋上の狂人」は狐が悪いと思われ、「青松葉で燻べろ」と金比羅宮の巫女と称する怪しげな女に言われた。狂人の母は「神様がそんなむごいこと言うもんか」と疑う。そうです。神様はいつくしみ深いのです。おみこしワッショイに喜んでいた神様も、喪の家に気づくと担ぎの衆に「静かに行けい」と命じられたのです。みのりさん、よく観察しておいでです。いい神様でしたね。

橘高薫風句抄

〔橘高薫風川柳句集〕平成十三年発刊

富士見えていよいよ華麗食堂車

草の芽が出たぞおしっこをさせながら
子を抱けば必ず花と向い合い

大国主命の国春の雲

嘘をつく人間ばかり しゃれこうべ

消防車 火よりも赤く胴ぶるい

波のしぶき逃れて小雨降っている

灯台は灯の入る瞬時差らいぬ

おしゃれな子のてるてる坊主までおしゃれ

水郷の微風から雨に移る候

水郷の鯉のぼりこそ泣かまほし

柳 ポプラ 柳 ポプラ 水郷よ

水郷の胸の高さに続く水

音のみの世界またよし 水の上

天国に節穴一つ 豆秋忌

路郎忌に炸裂したるカンナの朱

蓮の花は一茎一花 恩師の忌

路郎忌や むかし僧俊寛の霊

路郎忌のビールの泡はあふれしめ

路郎忌に言葉を飾る人ばかり

鐘の音 さらに身のおきどころなし

恩師の忌 血脈豊かなる蓮花

かんと鳴るもののあるなり 恩師の忌

石の階 童話を読むにうってつけ

秋風の天神さまの細道じゃ

横向きの女ばかりへ秋の風

金ペンにふさわしき秋灯となる

絲瓜のおおほどの青なし 祖父の愛

栄光のマントの裏は血の色だ

兎の目ほどのしずかな恋ごころ

自選集

小島蘭幸

天守見上げると涙になつてくる
両手ひろげて男は的になるのです
一輛二輛三輛夢を走らせる
一對として狛犬にある威厳
諦めることも大事になつて古稀

仁部四郎

正月や今更に読む一茶の句
正月や早く来い来い誕生日
正月や成るか八十路の同期会
正月や総理の名前たしかめる
正月やカンパを憲法守る会

前 ともつ

五輪より塔百年へ生きる欲
主治医には元氣元氣と言うている
銃よりも重い力を持つ言葉
孫四人代り番こに来てくれる
夜のやみ神のつくったプレゼント

雪景色に赤のワインがよく映える
マラソンを自転車の子が追いかける
いつからか雪の降らない三が日
帰らない子のも並べる雑煮餅
純白の雪に嫉妬をしてしまう

三宅保州

人間の渇きにやさしひと雫
都知事百合子の気構えはまずファッション
ふり出しに戻る人生という居場所
石段に一つずつある幸不幸
人の世に笑いと涙ある物語

宮西弥生

世の中を尖らせている不寛容
自己中が増えて蔓延る不寛容
あおり運転じつと我慢でやり過ごす
早速にドラレコの値を問い合わす
ブランドを纏って偽装する女性

村上玄也

希望ならマトリョーシカのように湧く
マドラーのようにはんり生きてみる
こんな生き方もあるよと下足札
気が付けば排水溝にまっしぐら
居心地が良さそう猫と冬の鉢

森山盛桜

無季

八木千代

友だちは居るまわりにも遠くにも
それでも寒い日はひたむきに掌を擦る
眼は軽く閉じる肩から力抜く
ややあつて 椿の精と眼を合わず
人間に咲いてくださる 季を問わず

山本希久子

折りの深さ折り目正しく鶴を折る
てにをはを整えてからお元日
目標の八十点へ年明け
粘り強く前進八十路のきつい坂
傘寿には傘寿ファション人目ひく

故両川洋々

イスラムのオブジェ生首かも知れぬ
好きやねんと魔女が耳元から叫ぶ
平和ボケすると赤紙きつと来る
アベノミクス過疎の暮らしにいつ届く
相思相愛だから貧乏神と住む

板尾岳人

元旦の花は何故だかよく笑う
元旦の母はなぜだか嫁を誉め
空海サマ御節料理を召し上げられ
元旦の嫁は炬燵に入らない
やさしさを思い出そうと初日の出

川上大輪

浮動票ですがゴミではありません
ワープする事も覚えて母達者
留守電に今日のお数を入れておく
紅葉が始まっている後頭部
そこまでの話なんです今はまだ

木本朱夏

自画像の耳たぶ薄き年の暮れ
あつこんなところで出逢うお月さま
送信キー押すためらいと ときめきと
星のない街に大人の忘れもの
人生の午後を楽しむ自由席

小西雄々

新年へ雨音までもリズム変え
消し炭になって暫く待機する
レールまで色気づいたなネオン照る
一度だけ空を飛びたくなる金魚
横顔を見て夜景より満足だ

斉藤 岳

今年また何度自分の名前書く
駅前で少年の毬跳ねたがる
恍惚の碑あり吹雪が止みませぬ
石一つ置いて流れを変えてみる
逆立ちの子から零れた白い種

新 家 完 司
カラオケのマイクが歌手にしてくれる
奥さまの生き甲斐五割引きを追う
百歳の皺うつくしくなるばかり
神さまがいるなら殺し合いはない
智恵の出ぬ頭許して晩酌だ

竹 治 ちかし

好奇心老いの余生を休ませぬ
たまに会う幸せ心開けて待つ
もう駄目だ言いつつ今もまだ元氣
想い出もあつて時々里を向く
里捨てた男も忘れない訛

津 守 柳 伸

取り扱い注意ギックリ腰多発
お見舞いに向かうタラップご老体
マイカーで来る断捨離の救世主
コスモスが笑う木枯らしにもめげず
かたくなに生あることの執着心

都 倉 求 芽

冷蔵庫の減り方がひとり分落ちた
片っぱの余生で早い年の暮れ
ひとり暮らしでないよ遺影と喋ってる
ゆるゆると歳よりあとをいくつもり
卒寿だが出せぬ戌歳年賀状

三原神明市 川柳大会

と き 平成30年2月10日(土)
開 場 9時30分 投句締切 11時30分
開 会 13時00分 閉会予定 16時00分
ところ 三原市市民福祉会館 5階・大会議室
三原駅から徒歩5分
参加費 1500円(作品発表誌・各三才に呈賞)
昼食は各自お済ませください
兼題と選者 (男女二人共選・席題なし)
「 城 」 牧野ねえね・濱邊 淳 選
「ざわざわ」 工藤千代子・恒弘 衛山 選
「踊 る」 三宅能婦子・高木 勇三 選
「ダルマ」 大森 昭恵・小島 蘭幸 選

欠席投句 平成30年1月15日必着
(各題2句・所定の投句用紙または便箋)
投句料 1000円(切手不可・作品発表誌呈)
欠席投句先 〒723-0044
広島県三原市宗郷2-7-27 鴨田 昭紀 宛
問合せ 鴨田 昭紀 (Tel. 0848-63-1096)
主 催 川柳奉行 三原川柳会

死ぬことは難しいから生きている
アツと言う間に九十歳になる
極楽を探して歩く月あかり
十五夜に唐変木が立っている
生と死は夢まぼろしの中にあり
時々は老いを味方につけている
情報の交錯何を信じよう
強がりも弱音も吐いて傘寿そこ
寂しさをまぎらす自分おちよくつて
継ぎ接ぎの堪忍袋丈夫です

西 出 楓 楽

土 橋 螢

森の句集



『甲吉川柳』

工藤 甲吉

流れ星我が薄給に似たるかな
十二月腕力もなし金もなし
我にみな欠けるは仁義礼智信
妻逝けば地球も落ちてゆく思い
霊柩車ああ燦然とグッドバイ
みちのくのさいはてここで石拾う
栄枯盛衰雑巾がそこにある
名月は出ずとも酒がございます
人生はよいしょこらしよにどっこいしょ
街行けば麻生路郎に似た人も
長生きをして哀しいという手紙
老愁というのだろうかああ淋し
新聞を斜めに読んで齢をとり
あの世への切符はとうに買つてある
妻が生きていたらと思うめでたい日

(平成6年10月23日 川柳塔社)

温故知新

『たかすぎきやう高杉鬼遊川柳句集』から

寒の冷え鬼がいたたく鬼ごろし
誕生日おなじ四月のお釈迦さま
水のあるうちはしばらく生きられる
しゃんとせい せめておんなの前だけは
征くことはないが戦はそこにある
来たわよと訪ねてくれる人があり
戦死者を弟にもつ老いの冬
西行とおなじ想いや花の下
先に来た料理をみなに眺められ
愚かさの程度がわかる核の数
友だちがたんといるので生きられる
北国の海をしばらく見ていない
お詫びから始まる便り筆不精
無花果を食う残酷に手を汚し
落合も野村も去りぬプロの秋
黄の花の不思議 黄色い蝶が来る
噫たばこやめるに何の志
禁煙をしたのにそうかとも言わぬ



川 上 大 輪 選

三原市 笹 重 耕 三

アとウンで暮れる倦怠期の夕日
父さんの脱皮禁煙日が続く

戯れたあとの脱力感が好き

身に付いた嘘がたつぷり汗をかく

雨脚が速い記憶を消すように

ふる里の訛りで降ってくる情け

伊丹市 延寿庵 野 鶴

ビードロがポピンポピンと人を呼ぶ

輝いた今日一日をラップする

やさしさを知ってやさしくなるヒト科

ぶつと息吐いて都会の立ち泳ぎ

朱を足して相手の出方ひそと見る

アンドロイドそっくりさんが会釈する

貝塚市 吉 道 あかね

耳も目も体型までが冬に入る

この際に断捨離もする冬支度

夕暮れが淋しくなった老いて来た

ストレスもスパイスになるボケ防止

新しい自分を探す入門書

大抵の事はこの世で片が付く

佐賀県 真 島 久美子

微動だにせぬ正論を吐いて冬

人の名を消して旅路はまだ続く

人間の弱さに気付く第二幕

途中から雨は哀しい音になる

ペン先に運良く降りてきた言葉

情念の深さと階段の白さ

池田市 上 山 堅 坊

欲に負けまたまたジャンボ買うつもり

夕闇が迫る赤提灯が呼ぶ

ばらばらのドングリ野党税の無駄

師走でも急ぐことない独り者

百歳の笑顔焦るないうている

亡き妻が柱だったと今気づく

池田市 太田省三

カロリーの計算苦手腹八分
お風呂より追い焚きしたい夫婦仲
自分史の要所に妻の朱が入る

終電車眠れる美女へ肩を貸す
シンブルに治療しました胃の切除

病室の匂いを消したさくら餅

寝屋川市 岡本 勲

ため息をつくのやめてよお医者さん
疲れても息吹きかえす縄ノレン

返答につまずく脳の春霞
言葉よりやっぱり金がありがたい

縄ノレン秘めた野心がついホロリ
妻と俺もつれたままで墓場まで

大阪市 小野雅美

笑えずに花も憎いと思える日
しあわせ芝居オチは見せずに幕を引く

口角を無理に押し上げありがとう
切り札を握って先に折れておく

褒められて伸びるタイプでまだ伸びず
できるはず私に呪文かけ続け

米子市 池田美穂

七十億の奇跡のうちの一人です
人生に好きな色だけのせている

心いま漂白剤につけてます

初孫に触れて割れたらどうしよう
犬と義母老いの厳しさ見せつける
呼名ない私は貝になつていく

和歌山市 西川千鶴

犬も食わぬ喧嘩を猫が買って出る
魂胆が有りそな妻のこの笑顔

目の前でチャンスはいつもUターン
後戻りしたその勇気買いましょう

ダイエツト挫折するのは六回目
ウォーキング今日は止めよう仏滅だ

河内長野市 穂口正子

嘘一つしつべ返しの痛いこと
泣いて泣いて痛み薄める手が有った

酔いに任せかわい毒もちよつと吐き
許したら癖になるから睨んでる

恨み捨て笑いとばせば腹も減る
まだ伸びる爪に元気を貰つてる

宇部市 高山清子

卒寿すぎマイナンバーは持ちぐざれ
締切りが無くて終活はかどらぬ

そのうちにばかりが溜まる小引出し
風向きに合わせ政界渡り鳥

ひな壇を並び変えても変わらない
答弁になると記憶が消えていく

大阪府 神 野 千恵子

匂い袋と時がゆつたり流れ行く
大声で内緒話をするカラス
姦しい人の寂しい影法師
だしぬけに角を曲がってきた老化
借金にどっぷり浸かる国に住む

大阪府 小 栢 こずえ

磨いたら光る間が華だった
用も無い体内時計起される
カメ虫の臭い匂いの一人部屋
のんびりと人目気にせず暮し
句読点打って明日を生き直す

大阪府 高 木 道 子

時として失言とした本音あり
目に見えぬ物は信じぬ前頭葉
苦労した事は黙して今日の汗
秋落暉山の辺の道染め上げて
わろてんか大阪弁がよう弾む

大阪市 磯 島 福貴子

カニフグクエ今季もきつと垂涎に
うそ泣きは誰の入れ智恵三歳児
健康体真逆の説に踊らされ
抽出しの形見の時計ネジを巻く
老い故か日がな一日探し物

大阪市 柴 本 ばつは

三児の母おしやれけつして忘れない
後戻り出来ない靴を履きました
働きました胃腸も口も超達者
着飾った過去大切にしておこう
贅沢はできないけれど食べてます

大阪市 長 高 俊 雄

花金と言うもわびしいひとり酒
何故破談それは聞かないことにして
灯明の向うに阿弥陀亡父の顔
寄り道が無駄でなかったこの出合い
立ち話ついで話に末期ガン

大阪市 横 山 里 子

気がつけば無口な方が勝っている
好きだった過去形にして会ってくる
つかの間の休息母はデイケアー
まどろんで夢みて笑うこともなく
婆さんのどこが悪いと紅を引く

河内長野市 中 島 一 彌

木枯しが喪家の張り紙をめくる
健康に時時泣くといひようだ
厭なこと忘れるたびにまた一つ
真夜中に耳鳴りを消す大欠伸
雨の中沈黙の傘急ぎ足

河内長野市 原 熊 知津子

箕面市 寺 井 柳 童

指先から都会の色へ染めあげる
群れ離れふだんの自分取り戻す
銀色の理性が揺らぐ昼の月
恋を知り少女無口になつていく
消臭剤と除菌で人が消えてゆく

高槻市 三 谷 白 黒

娘さん美貌と魅力別のもの
あの夫婦仲が良いのか悪いのか
自尊心だけが成長このごろは
親テレビ子供ゲームでダメになり
ハロウィンも日本の暦に仲間入り

豊中市 貝 塚 正 子

御墨付きあつて高価なアンティーク
マイパースデーこれ見よがしの二重丸
美味と聞きわざわざ出かけ並ぶ列
世話をやくたつた一歳上の姉
ガッチャンコ見知らぬ人と同じ服

豊中市 木 藤 こみつ

すれすれの海域にいる他国船
赤ちゃんの匂いはお日様の匂い
はやいてばかりそんな男と別れよう
利息だけで生活できる筈だった
消しゴムのカスにたまっているボヤキ

党選ぶそれとも人をまた迷う
パスポート手にして空路舞い上がる
手鏡に軽く手がいく解れ髪
エスカレーター友と偶然すれ違ふ
非常食見事変身スウィーツに

神戸市 田 本 古 鈴

片道の切符であなた訪ねたい
風船を飛ばそう夢をくくりつけ
話し下手忍耐力で聞いている
すぐに酔う人の話も聞かないで
やさしさは地獄の鬼に聞かない

三田市 九 村 義 徳

愚痴聞いてくれた仏に手を合わす
旅の宿お国訛りの温かさ
爺婆は昔話がお好きです
好きにせよ父の一言背を押す
ごめんなさい素直に言われ拍手抜け

三田市 幸 田 厚 子

台風とかみさん似てる一過性
忘れ傘三日たつても在る日本
家系短命百まで意地で生きてやる
あなたが好きへたな嘘なら許します
秋自慢三田へ一度いらっしやい

三田市 東内 美智子

政見放送聞いてよっしゃと決められぬ
独り居の祭り囃子はうるさくて
何があつた遠くを見つめ黙る君
割り箸の真つ直ぐ割れて別れた日
歩きスマホぶつかり合つた縁です

姫路市 中野 忠

世話かける友ほど旅に行きたがる
注意する迷惑駐車家の客
順調に生かされ生きて今日も過ぎ
法要に故人の逸話きく仏間
歴代の記録追ひ越す綱の意地

奈良市 尾畑 なを江

コツコツと仕事も趣味も自分流
あわてない諦めないで一人旅
一階と二階スマホで事はこび
来し方をたどれば私泣けて来る
無人駅コスモストンボ良く似合う

和歌山県 森下 よりこ

乱れ咲く菊たつぷりと秋深む
農作業私を素直にしてくれる
年に幾度か家の回りを片づける
うっかりとハガキの値段忘れかけ
傘寿来て何だか身体干涸びる

和歌山市 倉橋悦子

ふる里の新米先ずは神棚へ
ぶらり出て師走の風と走りだす
都合よく忘れることにして平和
新年へ期待も弾む三ケ日
輝いてほしいあなたの定年後

和歌山市 定松宏枝

一声を掛けて安否を確かめる
朝刊のインク匂つて目が覚める
おかわりが止まらないほど旨い米
一票に望みを託す雨の中
気負わずに今を楽しみ生きている

和歌山市 鍋嶋澄子

長い夜暇もてあまし長電話
ふじばかま七草らしくひそやかに
梅もどき一枝飾り笑みこぼれ
一〇〇キロを黙々と背に歩荷さん
髪切つて気持が空の青になる

岩出市 村中悦男

高齢者向きを買いますカナ辞典
投かんの際まで迷う投句便
躓いた小石に老いを知らされる
うまいもの食べよと娘電話くれ
楷書で書こうだんだん文字がみみず調

和歌山市 北原昭枝

雲晴れ間かくしごとなど見当らぬ

まだひとり戻らぬ家族鍋がまつ

冷え込んだ身体に温い燕蒸

皓々として望郷へ誘う月

戻れない水流されて暮れてゆく

和歌山市 福呂秀子

高齢に縁遠くなるバイキング

カルシウムシラス目玉で自己主張

健康へ二人三脚古い二人

ほっとして胸撫で下ろす今朝の夢

日帰り湯日頃に色を足す二人

鳥取県 門村幸子

はやばやと生きてびっくりじきに古稀

早食いは介護の名残り直さねば

ウォーキングふいに父母おもい出す

空元氣出して元氣を盛り返す

お似合いの目立たぬ場所ですと咲く

鳥取県 児玉規雄

神主の孫です無神論者です

弁当にその名を残す国の旗

日の丸も門松も無いおらが春

一年の計初風呂で練っている

初売りに縁無き僕の寝正月

鳥取県 下田茂登子

杖ついて歩けるだけで幸せだ

九十八歳いい往生と娘がほめる

薬よりビールのほうがよく効いた

嘘つきと知らず相槌打ってきた

望む物何もないけど医者に行く

鳥取県 橋本 整

幸せの笑顔心に歌がある

芯のある妻の遺影に支えられ

愚痴なんかもうこぼさない九十坂

朝毎に美味しいスープを飲む平和

目が覚めて生きてることにありがとう

鳥取県 上山一平

柏手と木履の音がここ地よい

もみじの手ひたいで拝む七五三

銀木犀くすぐるころ知っている

爪に火をあとお息のダイヤ婚

健康にいいと聞かされお薄のむ

倉吉市 岡崎 美知江

生きていく希望の幹は軋まない

公園のブランコ過去をゆらしける

薄化粧一寸まぶしい妻の顔

身づくろい女が埋まる試着室

美辞麗句わかっているが心地よい

鳥取市 山野 すみれ

返信の端っこ今を書き添える
お隣が詳しい事を知りたがり
へらへらと笑うゼンマイ故障中
諦めず消しては書いて貼る切手
秋空をキャンパスにして実る柿

倉吉市 田中 紀美恵

母がおるだけで心がぬくぬくに
湯タンポのほんのり感ほ母の愛
天国を一度巡って帰りたい
流れ星私の胸へ降りて来て
ごめんねと言えぬ心にぐちこぼす

米子市 生田 和之

のっそりとこの猫やらガン飛ばす
エンディングノートに駄句を書きなぐる
人生が情性に染まり行く老後
ポイントで払えるほどの浪費癖
年金で夢より米を買う暮らし

米子市 伊塚 美枝子

休日は何もしないで肩がこる
こんにはたまの化粧にあなただれ
ハイトーン犬にやさしい妻の声
十五夜に気遣い見せた雲間月
平和ボケ目先の事に不平言う

米子市 川本 美津子

古希すぎて我が身もつらい老介護
手探りで引きよせたいな若き頃
化粧して出かける予定雨になる
来年は一緒に居たい諭吉さん
散る紅葉哀れと我が身重ね見る

米子市 戸田 真理子

しのび寄る異にかかった自己過信
断れず飲んでしまった甘い汁
雷の機嫌伺う農作業
ブライバシーちよつぱり見える五七五
打ち水をしてムシヤクシヤ沈まらず

米子市 野川 宣子

洗濯日和追い剥ぎの様服脱がす
変り身の早い総理に呆れてる
早寝早起き今日のチャンスを予約する
背も足も孫に越されていいんです
バランスが崩れ出したな退職後

広島市 田桑 恵子

もやもやを残してカーブ来季こそ
奥方の機嫌いい日は肴増え
スマホ手にやる気の叔母は九十四
老いてなお手帳ビッシリ暇はなし
読む程に誌友の姿見えてくる

竹原市 若年幸子

古い恋断捨離をして蝶になる
デジカメへ祭り囃子も焼き付ける
滝巡り溢れるパワ―貫う秋
百年を語る銀杏の黄金色
娘へ孫へバタバタするも呆け防止

府中市 岸田武

イベントをおじゃんにさせて雨続く
軒下に陽を追いかけて吊るし柿
デジカメに紅葉を入れて持ち帰る
ジョークには毒舌でくる仲である
クロワッサンぼろぼろ笑う他はなし

三次市 伊藤寿子

姉上さまやつと来ました墓まいり
義兄さんと仲良く命日まで同じ
墓石をなでも返事ありません
まだ生きているよな姉の墓石みる
あの世って良いところかと言ってたね

山口市 青木隆子

モンシロチョウ音符描いて花の中
どの路地も賑やかだった昭和の日
カラオケの点数才は無いと言う
耳遠い母長生きと前向きに
虚しさよ秒針刻む音ばかり

山口市 中前幸子

騙し絵の中で反省しています
口惜しさいっぱい握り拳で拭く涙
別れ上手な風は握手を軽くする
再会の握手へ熱い脈が打つ
ひとり気楽に行けるギャラリーだから好き

松山市 郷田みや

足跡を見られてもいい歩き方
用意した言い訳未開封のまま
思い切り剪定をしたはずなのに
おくるみの中に置く私の時間
お誘いのメールに新米の香り

大洲市 花岡順子

正直で心の狭い腹の虫
隅っこの席が私の座る位置
リハビリの指に逆らうボタン穴
的狙う弓心眼を研ぎ澄ます
認知症かかえ安らぐ事がない

高知県 茨木昭夫

朝日射すやおら起きての感謝の日
父と呼び息子と呼んで血の縁
人間を新たに描く認知症
中年の傘を捧げてひと踊り
一億は火の玉と言う総理居た

福岡県 本田 さくら

さがし物見つけた夫は神のよう
今日こそと思えど手足あっち向く
夜明け前今日の私に月明かり
成長し孫のひとこと小憎らし
庭の隅わたしを見てと花が咲く

山鹿市 中山 好打

衣替え月日たつのも早いもの
初霜の寒さこらえて精を出す
耐えに耐えよくぞここまで生きてきた
山奥も住めば都と言うれど
稲刈りも終わりたんはもだまりけり

沖縄県 あら さくら

いるだけで支えになると励まされ
ティータイムおいしい話盛り上がる
愚痴ノート書いたら消えた胸の傷
読書好き手作りしおり持ち歩く
うんうんと釣られて笑う老姉妹

那覇市 前川 真

仕事欄無職と書いて草を刈る
手拍子を下さい僕の終章に
空耳か僕を褒めてる声を聞く
反省の胸の扉の錆び落とす
影埋めるすべは無いから連れ歩く

札幌市 斉藤 宏子

晩秋の空気を背負う交差点
紺碧の空切り裂いて飛行雲
雪ホタル舞って今年も山眠る
初雪は幼い頃の匂いする
ねむってる記憶を覚ます虎落笛

札幌市 富永 恵子

紅葉の鼓動をせかす低気圧
菌科の椅子見ごとな眺め額ぶちに
鈍色の壺にかくまう宝くじ
手間掛けて答えてくれた蕾たち
明日のため今日の歩幅はゆるやかに

白河市 鈴木 たけし

捨てられた雪が歩道を埋めている
寒風のレトロの駅舎ホット飲む
忘れかけた頃我が家の庭除染
除染終え庭の山茶花口ごもる
退院の患者へまたねとは言えぬ

横浜市 巖田 かず枝

迷惑はかけたくないが頼りたい
ライバルをかってに決めて励んでる
一夜潰け安易な癖は直らない
悪口は言っていないのに苦い口
横文字や動きについて行けません

横浜市 川島良子

ひと言の驕りがバランスを崩す
2020目指すわたしの骨密度
知りたいと思う知りたくないとも思う
投票箱わたしの一票は重い
トキメキは明日を生きる潤滑油

横浜市 長島亜希子

発車ベル聞くとやっぱり走り出す
運動のためにと頼むお買い物
コーヒーかお茶かで悩む温い午後
好きなこと好きにやらせてくれる幸
また墓地の売り込み歳がばれてるな

佐渡市 高野不二

折込みの一枚だけに用がある
杖ついてやつと歩けるポスト迄
持てない金は取られる筈がない
明日を待つ一日楽しい休肝日
話すだけ話し診察いい気分

名古屋市 富田末男

折り紙の中にもころも入れておく
正論が突然狂うことがある
丸くなる謎を持つてるイカを焼く
どうしても答えるべきか考える
経験が少しのことを見落さず

豊橋市 小松くみ子

あと五分値引タイムへうしろ髪
無造作にバナナをいじる主婦を見る
ナメクジも甘党だった蜜のワナ
語れない心をしゃべる伊達メガネ
定規あて描いた眉毛がズレている

豊橋市 西郷紀美代

写真からシヨックを受ける老い姿
腹式の呼吸がズボンずり下げる
立ち位置を後悔してる不整脈
もの忘れここまで来たか焦がす鍋
蜘蛛の巣を払って通る朝の庭

豊橋市 高柳閑雲

なる程と思うスッピン見てしまう
北風に吹かれ風邪ひく無人駅
何もしないことが正義と思わない
一線に並ぶと勝ちを意識する
優しさが過ぎて本音で口説けない

福井市 伊藤良一

見舞うたび母が遠くになる不安
留守中の新聞読んで旅終わる
介護して介護をされる日と思う
青空も風もスマホに吸い取られ
家よりも心の間口広くする

盲導犬も走りたい時がある

大阪市 中内 孚彦

待ってもやっては来ない民主主義

政治の話よく知らぬ妻でよし

秘境へは日に一本のバスで行く

大阪府 畑 中 節子

栗の毬^い空の青さに笑み落ちる

鈴虫の髭一心に振る夜更け

流れ星山郷の闇切り流す

虫の声秋の夜長の合唱団

大阪市 田 中 廣子

思い出の使い古した母の帯

引きあてた素敵な人は内の人

新米で義母にお供え彼岸餅

雑学は思わぬ事で役に立つ

大阪市 中 島 栄子

逝って一年あなたの許へ少しづつ

口紅もあなた此の世に居ればこそ

孫誕生日何が良いかとシャシャリ出る

余命大事に今を楽しく機嫌良く

大阪市 樋 口 眞

傘寿過ぎ年六回のクラス会

諍いは苦手はいはい言っておく

はっきりと恍けたように昼の月

あちこちに荒れたお墓が痛ましい

AIに負けてはならず棋士の知恵

大阪市 前 川 善之

夜空には元気に光る星を見る

年金で生活出来ぬと民の声

フラリーマン女房恐さに夜の星

大阪市 松 田 聡

罪深い現場任せの経営者

あれこれと考えだすと眠れない

一年のけじめつかぬが大晦日

黄昏れたけれどまだまだ夢がある

大阪市 森 廣子

雨の日も蟻はせっせと鎌を持つ

気弱になって雨の日の一心寺

沈黙の月を沙漠に貼りつける

散り際も笑みを浮かべて舞う落葉

大阪市 吉 田 知之

神社寺両方詣るお正月

街中で托鉢姿見かけない

此の頃は猫もしゃくしもウォーキング

ペンネーム格好つけが多過ぎる

堺市 梅 木 澄空

同窓会古希をさかいに元氣会

上機嫌カラオケ外に丸聞こえ

治療中歯抜きの顔を写メールで

辞退され又も香典持ち帰る

堺市 近藤 治子

泣きたいの我慢女の意地を張る
芝居して気を引いてみる倦怠期
村芝居馬の脚にも拍手わく
納得がいくまで頑固張るいちず

堺市 羽田野 洋介

もう一度立ち戻りたい曲がり角
今さらにノーと言えない世間体
お人柄心の痛み分かる方
手こずったあの孫に今ぶら下がる

堺市 松永 庄三

環状線ごとくぐる語る語る老
お前もかあつけらかんと癌談議
孫ができじいじばあばと皆が呼び
老うごとにチャリンコサドル下げて乗り

堺市 大和 峯二

この国を訓練場とオスブレイ
支持率が下がると上がるていねい語
儲ければ後は野となれ再稼働
この国は九条あつて美しい

泉大津市 磯野 不二夫

洪水の前の気分か今の世は
閻魔にはあわす顔ない根性なし
安倍政治真綿で首を締めてくる
「ありがとう」言われて続くボランティア

東京の緑の風が薙ぎ倒す

泉大津市 助川 和美

誉め言葉リップサービスだったとは

湯気の出る裸ぶつかる寒稽古

君に会いたい今朝のコーヒー美味しくて

河内長野市 森田 旅人

湯気立てて怒ってくれた恩師の日

貧乏が肥やしになったのは昭和

重い綱勝つことのみを求められ

消しゴムのちびた形に見た仕事

河内長野市 渡邊 修

お互いに非通知なので意志不通

サービス品すばやく取ってさつとカゴ

病院食誰もいぬまにかけ醤油

ナースには不向きな人が矢張りいる

吹田市 岩口 のぞみ

寿司食べて罪滅ぼしの折は梅

給料日回転寿司で威張るパパ

酔つても値段見ながら選ぶネタ

トランプだどの国ババを引き当てる

豊中市 荒木 郁子

はやばやと秋を蹴散らし鍋料理

スマホづけ手のつけられぬ患者さん

おしゃべりな母にマスクをプレゼント

抽斗を開き記憶に浸る日々

豊中市 荒巻 夢

いつのまにかと見かけぬ坐りだこ
なぜかしら隣りの読書気にかかる
絹もウールも知らずに育つ子ども達
現実が虚構を超えるおぞましき

豊中市 源田 啓生

酒ちびりちびりテレビのうるこ雲
ゼロ歩です空しく響く電子音
老夫婦互いの余白食べながら
飽食の世か卵御飯にもう飽きた

羽曳野市 磯本 洋一

松茸の売場を過ぎて湿地買う
マニフェスト横に消しゴム用意して
呼び出され酒の肴と知りつつも
風止まる凧という字の正直さ

枚方市 坂本 ミヨノ

朝夕に老いも仲良し活気づく
半額のおすし好物食べ過ぎる
歌レッスン脳細胞が冴えるうた
相槌を打つが妥協はしたくない

枚方市 佐藤 武紀

出ておいで土竜も偶に世を覗く
妻に効く柔軟剤がないものか
世話掛けぬと今はどちらも思ってる
病院にひとりで行けるままだましか

箕面市 中山 春代

あるはずの出口を探す秋のウツ
想いでの中を転がる毛糸玉
傷に塩夫婦の会話荒っぽい
図書館の本とリッチな冬ごもり

八尾市 田邊 浩三

介護の身ごめんスマンで過ごす日
サウナでは手術の痕の品評会
混浴に女性ばかりで後退り
ワンパクの孫がわが家の潤滑油

八尾市 前田 紀雄

政界も自然界でも軸ぶれる
選挙終えどんどん進む再稼働
トランプがアジアシャッフルして帰国
8対2我家の会話妻リード

神戸市 輿水 弘

人生を明るく人について今
会うたびに皆に奢るお人好し
ボケ具合競って笑い元気です
薄味を奨める妻はしょっぱい派

神戸市 近藤 勝正

年金で細細伸びる生命線
食欲は自慢できますこの年で
うっかりも愛嬌らしい二三度は
もの思う秋であるのに思ひなく

神戸市 山根弘華

負け犬が勝者のかげで吠えている
吠えられてあと一足がでてこない
聞きあきた噂話に出る欠伸

欠伸して心の迷い抜けました

尼崎市 清水久美子

張り切った後は齡がもろに出る
ダブっても迷わずに買う廉価品
歩くよりましな速度でペダル漕ぐ
急患の義兄虚勢を張っている

伊丹市 平井富夫

古希米寿想定外と孫さわぐ
いつの間にスマホ頼りの生活に
聞こえてる爺を動かす煽て方
一年の計画立てた秘密です

加西市 山端なつみ

椅子席でホッと一息古希の旅
コーラスに紛れ高音出たつもり
プレゼント愛か義理かは適当に
スランブと言えるレベルはまだ遠く

篠山市 長谷川善輔

共に一線越えた仲 先逝くな
さからえん人が多すぎいややなあ
さんま焼き庭のゆず取る老い楽し
秋晴れに日向の猫のまぶしげな

篠山市 藤井美智子

幸せを奪われたまま拉致家族
趣味楽しこの頃老いを忘れてる
しあわせ度計るものさし自分流
十五年亡夫に守られここへ来た

篠山市 永井かほる

神の国悪い人間多すぎる
賛成はしたが若者そっぽ向く
雨続き玉ネギ苗も伸びなやみ
ローソクを灯すと亡夫に会えそうで

三田市 宗福清司

感觸をどう伝えるかむつかしい
百均で買った言うても信じない
自慢話聞く耳無いがお付き合い
遅まきながらスマホにしたが手に負えぬ

三田市 辻開子

久しぶりでもない電話長くなる
野球見る夫の顔が潰れかけ
口角を上げて描いて若く見せ
月二回マッサージ師の腕借りる

三田市 松本ゆかり

百歳を悦ぶ娼理想です
滑舌の悪さスマホに指摘され
許される側に居る身と今気づく
裏表じつくりあぶり美味となる

宝塚市 太田 としお

雨のちくもり後快晴の我人生
バカにすな日本国民馬鹿じゃない
瀬戸の海人の数より島の数
平和とはみんな仲良くすることだ

宝塚市 岸 田 万 彩

ハンドルを握ってよいとボケテスト
ミサイルを撃つミサイルを信じかね
ガンジールの教えを守るタンゴ虫
新米にバターを乗せてアア至福

西宮市 福田 正 彦

まだともう二つの言葉トゲがある
いざこざが嫌いな君はイエスマン
温かい握手に氣持伝え合う
抑止力体のよい核保有国

三木市 山口 久 子

友よりの長文便りわれハガキ
九十路でも氣分青春杖だより
立秋に大雨ひがい多すぎる
頑張つて農機に油吾に酒

三木市 山口 ヨシエ

初日の出小さな幸を祈ります
初暦白紙の未来夢数多
研ぎ澄ます五感ひたすら前を向く
失敗も糧にしようと勇み足

和歌山市 上 野 寛

聴診器ついでに君の心診る
抜目なく隙を窺い先廻り
人間に戻して呉れる終電車
この歳も追分けに来て右顧左眄

和歌山市 佐 藤 ま き

枝豆を供えて愛でる十三夜
稲むらの火防災の日にまた思う
命がけお城の天守ビカビカに
むだ花と摘まれる冬の苺花

和歌山市 福 島 一 雄

畜生も呆れています人の業
旨いもの求める旅も趣味のうち
父と子は死で別れても胸に生き
老いたのか悲しくないが涙する

鳥取県 飯 野 菖 子

ぼとぼと夕日と帰る田舎道
老いて行く心の幅も狭くなり
過疎の村木陰うわさを聞いていた
長寿にも非正規雇用ありがたい

鳥取市 大 前 安 子

サラサラ落ち葉の語り聴くような
膝直し月夜の話つきずして
赤ワイン月の光へ揺らして
独り居て好きに暮らすのが難しい

鳥取市 田賀 八千代

砂丘からプロポーズした甘い夏
色と欲抱いて人間らしく生き
やさしさに触れて蛹が目を覚ます
学生のスマホ秘密の基地を持ち

倉吉市 大羽 雄大

電話口指図している声がする
形から気合いが入るヘルメット
一呼吸おかねば当たる自動ドア
駆け巡る妄想午前二時三時

倉吉市 田中 けいこ

温暖化想定外は通じない
料理するつもりでメモが増えて行く
何もかも普通がむつかしい歳に
すれ違い咳する人に息とめる

倉吉市 堀 かずこ

ダイエットしたい出来ない情ない
青春を思い出させるはやり歌
一人でもなべしようかな寒い夜
一口のビールの味が泣かせるね

倉吉市 宮田 風露

色褪せた鞆の中にある昔
嘘の色淡いピンクで棘がない
色いろと迷って見たが今のまま
こがらしが庭の紅葉を塵芥にする

境港市 中井 虎尾

出雲富士橋を渡れば伯耆富士
議題何カラス議会がかしましい
名月を浮かべ流るる無名川
任務終え土星にねむるカッシーニ

米子市 田村 周子

患って生きる喜び身にしてみた
年賀状思い出だんだん消えてくる
山茶花が忘れず咲いて庭明り
八十路坂憧れる趣味あるんです

米子市 見山 温子

菜食に不自由のない野良仕事
介護するかされるか道が見えてきた
小引出しの遺品整理もごみの山
富貧の差なく最後の灰は同じ色

松江市 相見 柳歩

独身はわたしだけではないけれど
ひとりだけ笑ってくれた母のしわ
前世から一緒に歩く君と僕
答案のウラで本領発揮する

松江市 中筋 弘充

百歳の義母手鏡を離さない
百歳の義母暗算の名手なり
喪の家の仏壇扉開けたまま
あの国の娘にライン届かない

松江市 山根 邦代

この出会い大事にすれば温い風
チヨットした漢字素直に出てこない
褒め言葉自分はげます心地良さ
自慢の花咲かせてみたい枯れススキ

出雲市 黒目 ひでお

良くしたい人権無視の世の中を
セクハラもパワハラもテレビが教え
病癒え夢実現へ歩き出す
一人ではなかなか出来ぬコタツ出し

雲南市 永見 安子

一息を入れよか後が続かない
飛び跳ねた時もあつたよ私にも
いつまでも眺めていたいうろこ雲
一人居て幼き頃の風に合い

瀬戸内市 宮宅 比佐恵

美しい嘘で主役が通せるか
つまりて小石に齡を教えられ
生きて来てよかつたと思う昨日今日
墓まいり孫は戦に出さぬよう

玉野市 片岡 富子

別腹がいくつもあつて止まらない
鴨の池お帰りなさいすぐに冬
唯のバラりっぱに咲いて笑顔出る
楽をして私だんだん退化する

広島市 松尾 信彦

ともすればあの笑みだつて反対派
宿題をすんなり果たし虚脱感
今ひとつ男料理に皆無口
五時からの男に指示の妻メール

尾道市 小畑 宣之

あの時の幸か不幸の別れ道
冷蔵庫閉めておくれとピーピーピー
秋耕や飛び出す蛙ごめんなさい
エンディングノートなかなか書けません

尾道市 日谷 寛

限りあるいのち紅葉と競い合う
夢を抱く日々感覚を研ぎすます
産声がひとの絆を太くする
新しい夢を紡いでいるやる気

竹原市 土井 輝恵

鉛筆を持つ楽しさよ五七五
戦争に絵筆折られて無言館(長野無言館 2句)
画家として半ば遺作が訴える
連休の中一日を豪華食

今治市 渡邊 伊津志

合鍵があればと嘆く籠の鳥
論争の渦で戸惑う風見鶏
老人ホームコツコツ溜めた銭と行く
糾える縄の如くに好不調

高知市 三谷 松太郎

建前も混ぜた本音で八〇点
鍵盤がああ昔へと引き戻す

いさぎよい年魚にくらべわが驕り
イワシ雲 風倒木をなでるよに

唐津市 岩崎 實

改憲論みんなの注視その平和
百年の人生峠どこですか

言われればしたくなくなるわが気性
台風禍三月過ぎれど傷のまま

山鹿市 前田 幸子

金木犀香り残してバツと散る
飛ぶ鳥になつてみたいな時もある

日記帳昨日のページ空白で

キャベツの葉食つてる虫も憎めない

沖縄県 禰 ももと

老夫婦ドライブスルーの朝食を
世渡りのプラマイ上手教えてね

秘密だよ聞いた私は不眠症

今以って祖母の味覚は真似出来ぬ

沖縄県 島村 つばき

反抗期構わないでとソッポ向き
老い盛り素直と頑固闘ぎ合い

胸の内化粧で隠しピエロ役

気合い入れ紅を引いたら孫が逃げ

沖縄県 宮 すみれ

私色自由に染めて八分咲き
雑草がここにいますと風にゆれ

赤とんぼ群れてススキにキスされて
リーダーが三人もいて困り果て

弘前市 高森 一吞

伝説の母はいつでも阿弥陀様
走馬灯伝説の父背中追う

黒塗りの自分史のぞく鍵の穴
初冠雪里は急いで冬仕度

松戸市 山下 明子

若夫婦と共にドックへ恥部さらす
急ぎ足政変願い一票を

上野の森運慶展へ鬼気迫る

ハックシヨン花粉抜けたら風邪ひいた

東京都 高岡 弥生

あと何度お節料理を作れるか
子の言動親の性格映してる

バーゲンで着ることのない服を買う

今月の決算終わる缶ビール

静岡県 渡辺 芳子

思うままならぬこの年当たり前
身体の子ビが毎年増えて行く

同窓会開けぬ年がついに来た

安らかに暮らせる日本祈ります

第164回 大阪川柳の会

日時 2月6日(火) 午後1時開場・午後2時締切
会場 大阪市立総合生涯学習センター 第一研修室
宿題と選者(各題2句・席題なし)
△「福」 赤井 花城 △「財」 久保田半蔵門
△「朝」 大内 朝子 △「三七モ」 森中恵美子
会費 1000円 欠席投句 2月5日まで 会員に限る
〒532-0025 大阪市淀川区新北野1-3-14-706
本田智彦宛

名古屋市 山本 三樹夫
ボランテア赤いボストの服洗い
蒔いた種尾鰭が付いて手に戻る
一票を投じ変らぬ総選挙
トランプが商い上手見せつける
江南市 脇田 雅美
喋り種良くも悪くも撒き散らす
雑草をかき分け抜けてかすり傷
福耳に縁起かついで触れてみる
優秀な頭脳もつてる町工場
(前月分) 札幌市 斉藤 宏子
きな臭い煙ばかりの世界地図
過去削除あらたに向かう高齡期
世渡りの隠しポケもからになる
軸足を未知の世界に変えてみる
(前月分) 大阪市 中島 栄子
補聴器から無くしてほしい雑音を
能力テスト回らぬ脳が焦りだす
古筆筒ガタガタさせな閉まらない
句に三とせ未だ全没止まらない



(つづき)

(前月分) 西宮市 西口 いわゑ
大夕日今日も平穩無事でした
初対面凄いいーラがあると見た
一寸お茶目な人気女優に似たナース
乾盃の理由ならすぐ思いつく
菊の香は日本人の心です
(前月分) 竹原市 石原 淑子
不審者へ名札はずして登下校
秋の風町の本屋の灯が消えた
キラキラと少女の渡る虹の橋
三十五年一発屋にもなれず
迎撃の石榴弾ける秋の天
(前月分) 米子市 成田 雨奇
何をしにここへ来たのか妻に訊く
日記帳昨日と違ったことを書く
蜘蛛の囀に頭が高いぞと叱られる
月一度薬いっぱいリッチだな
妻話す相手はメダカばくじやない

英語 de Senryu ⑦③

麻生路郎句集『旅 人』

英 訳 吉村 侑久代 Kim Horne

元日を 飲み友達と 出てしまひ

*even New Year's Day
he has gone drinking
with friends*

箸紙を書いた手でもう 父は呑み

*after writing names
on a chopstick wrapper of New Year
he is drinking*

even さえも *New Year's Day* 元旦 *go drinking* 飲みに行く *friend* 友達
after 後で *write* 書く *name* 名前 *chopstick* 箸 *wrapper* 包むもの

～リバーウィローのため息～世界の川柳・俳句⑬ ポーランドと日本の俳句の懸け橋

アグニエシカ梅田 (Agnieszka Zulawska-Umeda)

彼女はポーランドの著名な日本文学者であり、元ワルシャワ大学教授です。人生の多くの時間を俳句研究と教育に費やしています。同時にポーランドにおける俳句導入のきっかけを作りました。ポーランドハイクの成立について、彼女が2015年に纏めたポーランド・ハイク選集 *cherry trees and willows*『桜と柳』の序文に「私は1984年に芭蕉・蕪村・一茶・それらの門弟の俳句翻訳選集 *HAIKU* を出版しました。その後『ポーランド俳句アンソロジー 1905～2001』や個人句集が出版されるようになり、ハイクそのものがポーランド文学の詩形式として認められました。」とあるほど、ポーランドでは俳句（ハイク）が定着しています。彼女の俳句を『桜と柳』から引いてみましょう。作品はポーランド語、英語、日本語で書かれていて、英語は Adam Zulawski が協力しています。

a lake at daybreak/ time for me to go swimming/ into the blueness
(暁の湖の青さに泳ぎけり)

a quiet garden/ she sits among summer trees/ this clear bright Sunday
(静かなる庭の夏木の日曜日)

a chestnut falling?/ perhaps my husband's footsteps?/ I turn round and look
(胡桃落つ音を夫かとふり向きし)

誹風柳多留一二篇研究 55

小栗清吾・細井龍夫
伊吹和男・山田昭夫
石川道子
清 博美

461 大たぶさなのハむす子のおむく也

細井 登様客で髻を大きく結んでいるのは髪型から初心な男だとすぐわかつてしまう。道楽息子なら気障っぽく、本多髻にしているから。

いたゞいてさすがむすこの買はじめ 七 36

いたゞひてのむとけいせいわきへむき

拾六 29

もやうもの着る内御用御むくなり

安四條 4

清 賛。

462 うすべりのまどから見れハ衣なり

細井 「京四つ」とか「あんぼつ」という四つ手駕籠は左右に薄縁が垂らしてあるが、その窓から衣がチラと見える。あの坊主、又品川の遊里へ行くのだろう。

四ツ手かご衣のさがるにくい事

六 29

薄縁りに窓の明イてる四ツ手駕 一〇九 31

墨染の袖へ駕かきとりすがり

九 32

清 賛。

463 大ぐらい也と木曾をばさんをする

細井 猫間中納言光高は後白河法皇のお使いとして木曾義仲の館へ行つた時、信濃など山間部でもてなしであるてんこ盛りの飯をすすめられ、そうした風俗も知らないの、ただただ驚いてしまい、食べる真似をするだけ

で精一杯なのに、小食なのを勵られて、言うべき用件も忘れて這々の体で帰ってしまった。後日、義仲はとんだ大喰らいだと上奏したであらう、と。

九はいめの茶づけの所へ猫間来る 一四 30
高もりハ木曾このかたがはじめ也 一八 40
木曾の無礼に猫間背を立る 一三六 15

伊吹 賛。川柳の信濃者ハ大食漢も利かせているのだろう。

清 伊吹氏の説明は、少々腑に落さない。木曾義仲は信濃者で、まさに大喰らいは当然のことである。

464 ふみ使そら小べんを度くたれる

細井 女郎屋者の文使いは、遊女の手紙を本人にこつそりと渡さなければならないので、道端で小便をする振りなどをして先方の様子を伺う。

文使ひ道など聞いておびき出し

六 2

文使御用に一寸とよび出させ

九 24

文使むす子をはすにまねき出し

四 22

伊吹 賛。目的の家から人が出て来た時に、顔をそらせるといふこともあるだろう。

清 賛。

465 ぬかばぬけ跡で竹とハいわさぬぞ

細井 三侍と言われる身分の低い侍ともめ事が起き、「無礼者、手討ちにしてくれる。そこへ直れ」といわれ、職人だろうか、威勢のいい野郎が、「さあ、切れるものなら切ってみる。竹光だからなどと抜かすと承知しねえぞ」と相手の腰の物が竹光であることを先刻承知で息巻いている。

竹光ハ御代に目出度道具也

五四二九

小栗 賛。「手討ちにしてくれる」のストーリーは余分。「抜けるもんなら抜いて見ろ」と見下して喧嘩を売っている図。

清 同右。

466 子おろしの向ふつらだとげい子いひ

細井 留守居番に踊り子は語る。「うちの住んでいる所はさあ、あの子おろしの先生の向い側の家の裏だよ」と。薬研堀で的情景の一齣。

清 賛。

467 さねもりハはれ着を一ツねだる也

細井 寿永二年（二八三）斉藤別当実盛は、平維

盛・通盛に従い、北陸で木曾義仲と戦ったが、加賀の篠原で孤軍奮闘して終には手塚太郎光盛に討たれた。その時、実盛は、赤地の錦の直垂、萌葱の糸で織した鎧、鍬形のついた甲、黄金で飾った太刀、切斑の矢、滋籐の弓を持ち、前後を金で縁どった高級な鞍を置いた連銭輩毛の馬に乗っていた。

実盛は越前の出身なので、出陣前に討死覚悟で、内大臣宗盛に故郷へ錦を飾るのだと懇望して、本来は大將格が着用するものを特に許されたとか。又、老齢であることを隠すために髪を染めていたとか（『平家物語』巻第七「真盛」）。

実盛ハ死出のはれ着をねたり出シ 五七二四
大詰に実盛若く作ッてる 八八二五

白ラ髪を黒く染たのハ赤へ義理 一五九一八
清 賛。

468 切おとし札を見せるハ引ケのやう

細井 芝居小屋の仕切場で一定の金を払って木製の切落札を受取って入場するが、何回も枚数番に其札を改められるので、何となく侮蔑されているようで気が引ける。切落し札は寛政九年に木製から紙札に改められ、見物人が打出しまで持っていることになったとか。

仕切りの無い追い込みの場席だから大入りの時は大変だったろう。

切おとしあれかいやだと百ざい、

天五仁二

切り落シとじやうに酒をかけたやう

明三義4

小栗 不明。礎稿は「引け」を「気が引ける」と解釈しておられると思うが、そういう意味があるか。

清 小池章太郎氏も『考証江戸歌舞伎』に主題句を引用していない。とすると小池氏も句意不明だったか。

「引ける」には、退散する、その場を去る、という意味もあり、札を見せると、それは場所を移動させられるようなことではないかと思うのだが……。

細井（再考）吉原では八ツ（午前二時）の「大引け」の拍子木を合図に、内所の前に掛けてある名札を掛け替えさせていた。廻しの怠慢や駆落ち防止の無人点呼だったらしい。これを「時札」というが、芝居小屋の切落し席では札の改めがあるので、遊廓の時札にさも似たりで惨めだったようである。（参照・『川柳江戸吉原図絵』333頁、『江戸吉原図聚』53頁）。

愛染帖

新家 完司 選

(投句289名)

岡山県 紫 しめの
嫁さんが自分ファースト立ち上げる

(評)「アメリカファースト」に続いて「都民ファースト」そして遂に「自分ファースト」。分かりますか？ 言えば「利己主義」だろう。

京都府 都倉 求芽
スマホなしでも退屈はせぬ車中

(評)「車内をぐるりと見回せばスマホ依存症のような人ばかり。移り変わる景色も楽しいし、人間観察も興味深いのだが……」

倉吉市 山中 康子
修行だと思えば何もこわくない

(評)「ハードルを逃げていると、いつまでも『厄介だ！』と思ってしまう。修行だと思っただけでチャレンジするとだんだん楽になる。

笠岡市 藤井 智史
でたらめに生きてマワシがずれてくる

(評)「羅針盤さえしつかりしておれば、少々羽目を外しても構わないが、方向も見極めぬデタラメは駄目。マワシを締め直そう。」

大阪府 平賀 国和
縄文のビーナスまるでピカソ作

(評)「平成七年に国宝となった縄文中期の土偶。妊婦を象っているらしいが、そのデフォルメは大胆で、ピカソにも負けていない。」

防府市 坂本 加代
感動が空回りするひとり旅

(評)「美しい景色もおもしろい。馳走も酒も、その感動を喜び合う仲間がいなければ少し寂しい。人生の旅路も同じであろう。」

香南市 桑名 孝雄
古文書に似てきた僕のシミと皺

(評)「シミや皺を題材にした句もいろいろあるが『古文書に似てきた』とはユニーク且つ適切。もちろんご謙遜だが説得力あり。」

鳥取市 岸本 孝子
試供品使ったときはよく効いた

(評)「最初は肌も刺激を受けて効いたのだらう。だが、使っているうちに慣れてきて効果なし。ご馳走も慣れると何ともなくなる。」

豊橋市 高柳 閑雲
日が暮れて放射冷却して帰る

(評)「あちこちに元氣いっぱい熱量を発散して空っぽになって帰宅。酒飲んで飯食ってエネルギーを満タンにしてまた明日だ！」

唐津市 坂本 蜂明
連れ合いを亡くしてナビも乱れだす

(評)「二人三脚で仲良く歩んできた道。これからは一人で進んで行かなければならない。先立つた妻が見守ってくれるだろう。」

加西市 山端なつみ
ハロウィンがいつの間にやら市民権

上尾市 中村 伸子
ハロウィンの魔女にもなつてみたい秋

神戸市 上田 和宏
騙されない顔と詐欺師が誉めて来る

岡山市 永見 心咲
あたご梨一個分ほど腹がじやま

府中市 岸田 武
終活の一環として恋をする

大阪市 栃尾 奏子
銅鑼の音で始まる子沢山の朝

奈良県 安福 和夫
モカの香にボールモリーアよく馴染む

横浜市 川島 良子
ツンツンとバストは張って歩くべし

岡山市 丹下 凱夫
図書館へつづく花水木のもみじ

奈良市 阿部 紀子
大阪育ち京都で学び奈良に住む

羽曳野市 吉村久仁雄
傘持たぬ婦人とふたり雨宿り

豊中市 木藤こみつ
恋人岬に行くこともない一人きり

福井市 伊藤 良一
離婚より破門のような別れ方

松茸が回ってこないおつきあい
松茸が回ってこないおつきあい

塚本 章子

お隣の松茸ごはん嗅がされる

太田扶美代

味噌汁が粕汁になる冬ランチ

武人

今日も鍋なにも文句はありません

上田ひとみ

失恋の日はステーキと決めている

平井美智子

絶景のスポット弁当が美味い

紀雄

生姜食べ一分ほどで血が騒ぐ

楓花

よく食べてよく動く人よく笑う

尾畑なを江

「チンしてね」などと書きおく無礼者

霜石

古き良き時代よ雲よ裏帳簿

高瀬

カピバラの顔に似てくる露天風呂

石橋

よく吠える犬だが腰が引けている

芳山

鰓ばかり張ってる嘘を言っている

山縣のぶ子

黒ずんだ置物になるおとうさん

山縣のぶ子

ザクロの実花瓶に一つワッハッハ

山縣のぶ子

化け猫の顔で構えている鏡

山縣のぶ子

越える気のない一線を凝視する
百歳になったら好きなようにする

坂井市

ロボットが僕の仕事を引き継いだ

安土 理恵

失礼しましたと失礼なメール

内藤 憲彦

アンダンテ・カンタービレで老いたいな

山岡富美子

ごめんねとあつさり言ったほうが勝ち

山岡富美子

リコールをしたらどうですオスプレー

岸本 宏章

おいしいと言わねばならぬレポーター

北山まみどり

失敗をしない笑い笑われてみなさい

北山まみどり

のほほんとしていて注目を浴びる

北山まみどり

おばあさんも戦国時代に入る

北山まみどり

お正月丹前を着た父がいた

北山まみどり

老いてゆくスマホも使えないままに

北山まみどり

ガラケーをスマホに変えて甘かった

北山まみどり

鈍くさいとこがかわいパンダの子

北山まみどり

お試し価格ついで注文をしてみましょう

北山まみどり

ほんとよりうそがみんなを笑わせる

北山まみどり

娘が帰る送るバス停十三夜
ラッキーを疑う癖があるのです

岩出市

チベットに僕のそっくりさんがいる

村中 悦男

関心があります横へ座らせて

真島久美子

ストリートビューに母校が映らない

柴本ばつは

うれしそうに地球が回る秋の晴れ

森山 文切

面倒もみぬのに柿の実の律儀

堂上 泰女

瓜坊とも呼ばれ害獣とも呼ばれ

栗田 忠士

播り鉢ですり潰す愚痴ふたつ三つ

米澤 椒子

一冊の脳活ドリル持て余す

岸本 清

好き好きと歌ならすぐに言えるけど

倉益 一瑤

直立不動美女に胸かす赤い羽根

米田 恭昌

甘えたら直ぐ退化するふくらはぎ

楠原 富香

上向けば今日も確かに空がある

前川 真

寝屋川市

森

茜

遠足の子になり明日を待つ句会

島取市

田中

天翔

集配の時刻がせまる句ができぬ

大阪市

樋口

眞

天位とは遠いところで詠んでいる

島取市

山下

凱柳

南無阿弥陀仏唱え毎月投句する

大阪市

笠嶋

恵美

旅の思い出しばしニヤニヤ五七五

枚方市

丹後屋

肇

ばらばらと捲くつて句を見せる

島取市

谷口回春子

武者修行するたび増える没の山

米子市

成田

雨奇

全没をひととき忘れさす歯医者

尼崎市

山田

耕治

句会報嗚呼三行の計を見つめ

神戸市

能勢

利子

パスポート今年も出番きつとある

豊中市

池田

純子

主婦だつて途中下車して紅をさす

豊中市

水野

黒兔

和服着ていわくありげな砂かぶり

岡山県

田中

恵

同窓会一足飛びに着地する

堺市

加島

由一

不本意であるがひとりの聖なる夜

唐津市

仁部

四郎

野次ひとつ呑んで政治家育てられ

和歌山市

福井

葉摘

日向はこ小さく揺れる母の舟

沖繩県

あらさくら

背で見た母の一生忘れない

男鹿市

伊藤のぶよし

生きるってわからないから生きている

大阪市

古今堂蕉子

座つたら座る立つたら立つ仲間

藤井寺市

鈴木いさお

基敵は命預けている主治医

島取市

福西 茶子

Tシャツは赤もピンクもまだいける

貝塚市

石田ひろ子

一つづつハードル越えた飯茶碗

宝塚市

太田としお

五十年妻の家にになりました

香芝市

山下 純子

孫が来る老いの二人でふとん干す

倉吉市

牧野 芳光

線虫よ生きてることは楽しいか

山口市

青木 隆子

写真撮る斜に構えりやお腹出る

羽曳野市

永田 章司

校則のゆるさで伸びた個性の芽

沖繩県

宮 すみれ

いまどきの遅刻学生群れ歩き

長岡京市

山田

葉子

短い秋着られなかったお気に入り

米子市

中原

章子

着て脱いでクロゼットが忙しい

羽曳野市

中川ひろ介

再入院娑婆が背を向け去っていく

高槻市

片山かずお

床に臥せ家族の優しさに気づく

東大阪市

北村

賢子

猫ちゃんはゴロゴロしてもいい子だね

米子市

後藤

宏之

置き場所を決めているのに見つからぬ

海南市

小谷

小雪

たそがれは焼き芋の香にキュンとなる

紀の川市

山東日出男

どっふりと今宵はアガサクリステイ

西予市

黒田

茂代

日本のブランド神戸も横浜も

鳥取県

竹信

照彦

様子見に妻を行かせる敬老会

藤井寺市

鴨谷瑠美子

朝風呂の好きなわたしでいいですか

沖繩県

島村つばき

年金日カフェで贅沢ワンコイン

紀の川市

辻内

次根

楽しくてまだまだ死ぬる気がしない

寝屋川市

伊達

郁夫

もう少し浮世で馬鹿を演じます

鳥取県 門村 幸子
酒の棚ばかりキヨロキヨロ旅みやげ

倉吉市 大羽 雄大
触れ合いが好きで一本提げて行く

豊中市 貝塚 正子
父と夫和気あいあいと男酒

塩竈市 木田比呂朗
数値とは仲良く出来ぬ吟醸酒

高槻市 松岡 篤
常連が隅に陣取る立ち飲み屋

松原市 森松まつお
人並みに生中二杯酒二合

三原市 笹重 耕三
美味しい酒交わすと長くなる話

堺市 村上 玄也
酔いまわりだと時計の針が消え

池田市 上山 堅坊
愚痴はやく自慢話は酒の敵

三田市 堀 正和
百薬の長と言うから飲み過ぎる

玉野市 片岡 富子
一生分飲んだ酒でもまだ飲める

弘前市 福士 慕情
もう一軒寄らねばならぬ千鳥足

三田市 福田 好文
三次会辺りで浮かぶ妻の顔

三原市 鴨田 昭紀
カラオケはいつもひばりか裕次郎

弘前市 稲見 則彦
キャンパスが鈍色になり津軽冬

大阪市 小野 雅美
振り向かぬつれない君へ体当たり

河内長野市 森田 旅人
消しゴムを握りしめ読む日記帳

高槻市 富田 美義
一歩ずつ刻んで亀の定年日

沖繩県 禱 ももと
健康で定年が来た平社員

弘前市 高森 一吞
喜寿の顔水平線に舵を切る

吹田市 木下 敏子
八十路坂登る靴紐締め直す

松江市 中筋 弘充
胃カメラを上手に入れる女医に惚れ

寝屋川市 平松かすみ
老人もなんでこんなに忙しい

河内長野市 中島 一彌
蜘蛛の巣が領空権を主張する

西脇市 七反田順子
映像で百寺巡礼あらかしこ

堺市 大和 峯二
によきにょくと福祉尻目に軍拡費

河内長野市 大島ともこ
水不足と豪雨共存させる神

枚方市 海老池 洋
聞き漏らししてはならぬと耳二つ

高槻市 安田 忠子
親友と尿の出かたで笑い合う

米子市 生田 和之
できぬこと増えて夜遊び止めました

豊橋市 西郷紀美代
人間のいい味出せる年の功

奈良県 谷川 憲
新聞は紙で読みますアナログ派

京都市 三宅 満子
バーゲンへ暑さ寒さも厭わない

大阪市 若本 安代
マスクしてバザー商品値切るひと

京都市 清水 英旺
平成は昭和人には住みにくし

大阪市 榎本日の出
生かされてガン検診の誘いくる

鳥取県 橋本 整
ふる里の山に感謝のアイラブユー

和歌山市 坂部紀久子
台風の道くねくねと日本好き

米子市 池田 美穂
御歳暮に向けてサイフも覚悟する

八尾市 宮崎シマ子
お二人用のおせち料理を注文す

松江市 榎瀬 道夫
和やかな葬式だった天寿の死

芦屋市 竹山千賀子
歩数計24時には0になる

共選欄

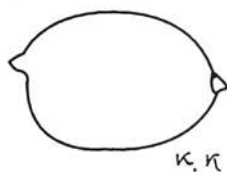
檸檬

檸檬

抄

(薫風書、カットとも)

(投句 352名)



「シャープ」 山口 光久 選

辛辣でシャープな頭脳持つてる
六感冴え未来図少し書き直す
限界に挑むシャープな面構え
笑わせるコツはシャープさ隠し味
半音だけ上げて優しい女になる
老い二人シャープなもの不必要
シャープにはなれぬ母性という形
シャープだね今日のアナタのあの台詞
いつまでもシャープでいたいのが男
切れすぎる頭が人を遠ざける
頭脳まだシャープな内と遺言書
言い訳をシャープに言えて嘘がばれ
何でだと鋭く楔打つコラム
ハートまで尖っていそうな般若面
大空で鷹はシャープな目で狙う

大洲市	中居	善信
奈良県	渡辺	富子
和歌山市	上田	紀子
三田市	北野	哲男
神戸市	富永	恭子
藤井寺市	太田扶美代	
豊中市	池田	純子
横浜市	川島	良子
鳥取県	竹信	照彦
大阪市	高杉	力
札幌市	三浦	強一
羽曳野市	吉村久仁雄	
男鹿市	伊藤のぶよし	
和歌山市	西川	千鶴
名古屋市	富田	末男

「シャープ」 斉 尾 くにこ 選

北アルプス天を突き刺す槍ヶ岳
サユリストだからテレビはシャープです
マドンナがシャープにNOと言う根拠
電卓も電子辞書かてシャープです
ノーベル賞の頭脳育てた町工場
三枚目シャープな演技垣間見せ
フラットやシャープは知らぬ演歌好き
切り出しと幼い頃を語りあう
おはようさん半音上げるわだかまり
つぶやきにシャープ記号を書いておく
覚えたい歌のシャープが手に余る
匿名になればシャープなペンの先
切れ味が見事落花の紙吹雪
まずい絵だシャープな線が濁ってる
シャープペンで書けば直せるラブレター

堺市	松永	庄三
松原市	森松まつお	
熊本市	杉野	羅天
三田市	堀	正和
松山市	宮尾みのり	
鳥取市	中村	金祥
川西市	大坪	一徳
唐津市	坂本	蜂朗
貝塚市	吉道あかね	
島根県	伊藤	寿美
可見市	板山まみ子	
三田市	谷口	修平
神戸市	細川	花門
札幌市	富永	恵子
寝屋川市	平松かすみ	

一言がシャープで仲間外される	和歌山市	古久保和子
胸を張れシャープな声に明日を向く	河内長野市	森田 旅人
世相きるコラムシャープなベンの冴え	和歌山市	福井 菜摘
手の内は見せずシャープに人を斬る	大阪市	若本 安代
シャープな眼で親を見ている反抗期	貝塚市	石田ひろ子
鋭角な愛マシユマロで受け止める	岡山県	永見 心咲
てっぺんの椅子に座れば鋭い眼	高槻市	杉本 義昭
曖昧な答えシャープにフラットに	佐賀県	真島久美子
真紅のバラシャープな棘に守られる	芦屋市	竹山千賀子
尖った石が孤独に耐えている	尼崎市	藤田 雪菜
残高がシャープな顔で攻めてくる	米子市	竹村紀の治
啖呵切るシャープなひとの思いやり	和歌山市	北原 昭枝
観衆の目が失言に突き刺さる	三原市	鴨田 昭紀
シャープさを競い合ってる青りんご	東京都	川本真理子
鋭角に核心突いてくる氣迫	大阪市	升成 好
キレ味はいいが人間味に欠ける	香南市	桑名 孝雄
切れ者と呼ばれ窓辺の椅子に居る	尾道市	大本 和子
北風はシャープの音で吹いている	岡山県	紫 しめの
容赦なく私を責める鎌の月	大阪市	森 廣子
勇氣ある鋭いペンが斬る世相	和泉市	横山 捷也
課長の座部下のシャープがおびやかす	南あわじ市	萩原 狸月
柔らかい舌でシャープにつく急所	枚方市	海老池 洋
魔訶般若シャープな心溶けてゆく	紀の川市	宇野 幹子

シャープフラット自由自在のジャズに酔う	西宮市	福島 弘子
意気あがる連呼おのずとシャープする	京都市	都倉 求芽
切れ味の鋭さ友は遠ざかり	札幌市	小沢 淳
正論吐くシャープペンシル折れぬ芯	羽曳野市	中川ひろ介
シャープとはおよそ縁なしお人好し	米子市	後藤 宏之
半音を上げて跳ねてるジャズの靴	那覇市	前川 真
日本の宝シャープも今外資	三田市	村田 博
東芝もシャープも花だった昭和	大阪市	原田すみ子
何でだと鋭く楔打つコラム	男鹿市	伊藤のぶよし
しまなみと加計の謎を記者が追う	河内長野市	渡邊 修
一段とシャープに睨む車の目	山口市	青木 隆子
腕を組む顔にピカソは斜に構え	和歌山市	楠見 章子
百舌一羽シャープに批判和の中で	大阪府	高木 道子
人が造ったA1人が追いつけぬ	弘前市	今 愁女
独断と偏見だけにあるシャープ	広島市	松尾 信彦
地球からシャープな顎を突き出して	海南市	小谷 小雪
シャープでは生き辛かった二重顎	下松市	有海 静枝
残高がシャープな顔で攻めてくる	米子市	竹村紀の治
シャープさを競い合ってる青りんご	東京都	川本真理子
尖ってる教師に耐えていた生徒	河内長野市	梶尾 弘光
カミソリと言われた人のリタイヤ後	八王子市	川名 洋子
どこまで尖るミサイルと禁輪措置	倉吉市	牧野 芳光
4Kと8Kの差が判らない	大阪市	江島谷勝弘

清閑な眉の男だ近よれぬ

得心のできるシャープな語り口

シャープだと言われた人も認知症

二年前まではシャープな顎だった

鋭いと恐れた人も好好爺

煙突の上で孤独な避雷針

満天の星へ心を研ぎ澄ます

まずい絵だシャープな線が濁ってる

台所凶器ばかりが置いてある

鋭敏なお脳も何れ黄昏る

とんがって生きてても一日二十四時

シャープなオトコ早く茹でなきゃすぐ萎える

シャープすぎ取り付く島のないお人

鋭角な男で切り口もシャープ

シャープな脳で愉快な嘘を考える

半音の違いが心 and 和らげる

シャープさが求心力の邪魔をする

あどけない顔で的射た一言言

ごめんねのねにシャープを付けて言う

秀句

オール五が世に馴染めずに抱く孤愁

円形の芯に潜んでいるシャープ

壇上でシャープフラットビブラート

大阪市 柴本ばつは

高槻市 初代 正彦

堺市 坂上 淳司

奈良市 大久保眞澄

神戸市 近藤 勝正

唐津市 山口 高明

鳥取市 中村 金祥

札幌市 富永 恵子

鳥取市 岸本 宏章

高槻市 富田 美義

大阪市 田中ゆみ子

八幡市 今井万紗子

香芝市 大内 朝子

桜井市 安土 理恵

鳥取市 倉益 一瑤

大阪市 藤田 武人

奈良県 安福 和夫

西予市 黒田 茂代

榎原市 居谷真理子

海南市 堂上 泰女

大阪市 平井美智子

下松市 有海 静枝

観衆の目が失言に突き刺さる

ふるさとがシャープになって枯れて行く 鳥取市 三原市 鴨田 昭紀

シャープでも井桁でもないハッシユタグ 岡山県 山野すみれ

シャープした声で吉報駈けてくる 和歌山市 紫 しめの

理不尽な風はシャープに切り返す 和歌山市 坂部紀久子

ランドセルから解き放たれたラの井 沖繩県 武本 碧

シャープペンご用ある時首を出す 大阪市 森山 文切

シャープなら山尾志桜里と辻元清美 枚方市 川端 一步

百歳を越した日本のシャープペン 三田市 寺川 弘一

こんなにも見事に切れた鼻っぱし 富田林市 北野 哲男

フラットとシャープ仲良く飲んでいる 鳥取県 関 よしみ

鋭角に地球を刻むビルディング 豊橋市 竹信 照彦

少年のナイフは時に残酷だ 大阪市 高柳 閑雲

感覚が自傷行為になっっている 佐賀県 栃尾 奏子

鋭敏なナイフ父をも傷つける 大阪市 真島久美子

シャープにはなれぬ母性という形 豊中市 小野 雅美

吹きかける息でシャープな夜にする 松江市 池田 純子

一生涯三角錐のまま生きる 弘前市 石橋 芳山

切れないと嘆くなここに砥石ある 弘前市 高瀬 霜石

秀句

半音上げたら革命する未来

シャープですマグロ一頭捌きます

円形の芯に潜んでいるシャープ

三原市 藤井 智史

鳥取市 太田としお

宝塚市 平井美智子

大阪市 平井美智子



ワンちゃんたち

平成三十年の干支は戌。十二支の中でもいちばん身近で親しみやすい動物です。最近では猫ブームで「猫カフェ」などというものも出来て、ワンちゃんたちは押され気味ですが、やはりペットの中では人気ナンバーワンでしよう。

叱られて犬小屋の犬寝ていない
押し売りに孤独な犬が尻尾ふる
お出かけの顔で老犬待っている
半眼で何か想っている仔犬
舐めて犬も日暮れの顔になる
食べたら眠る犬は哲学もっている

池見 静男
後藤美恵子
高木 道子
持田 倅子
時実 新子
小島 蘭幸

犬にも「嬉しい」や「哀しい」などの感情があるのは何となく解りますが、寂寥感や孤独感もあるのでしょうか。

「お出かけの顔」「何か想っている顔」「日暮れの顔」そして「哲学を持っている」など、そのような気分で見詰めるのでそのように見えるのでしょうか。が、嗅覚と同じように感性も人間以上のものを持っているかもしれません。

老人と犬で賑わう朝の道

せかせかと犬をひっぱる年の暮れ

年末はボチもせわしい顔してる

犬の世話して子育てを振り返る

少子化の公園犬が駆けまわる

寝けても吠えたい時に吠える犬

猫は気ままに歩いています。犬は飼いが散歩に連れ

竹村紀の治
岡田 史郎
川崎ひかり
山田 葉子
石谷ゆめこ
片山 忠

て行かなければなりません。それはワンちゃんのためでもあります。自分の運動不足解消や気分転換にもなります。また、子育てと犬の世話には共通点が多々あり。泣きたいときに遠慮せず泣くのは幼児も犬も同じです。

糞袋犬の散歩のアクセサリー

糞の始末申しわけなく見てる犬

犬の糞下げて見ている朝の虹

かなしみがぎゅつと詰まった犬の糞

ついには拾わぬよその犬の糞

飼いに持ってゆきたい犬の糞

生き物の世話でいちばん難儀なのが排泄物の始末です。最近

は飼い主のマナーも良くなって、「糞袋」を提げて散歩し

ている人を見かけるようになりましたが、まだまだあちこち

に転がっています。飼い犬のものなら仕方なく持ち帰る人

も、知らない犬のもので「ついでは拾わぬ」のは当然。

ご近所の犬もめつくり老けました

留守できぬ現在犬の介護中

豆まきの好きだった犬もつけない

七夕に竹輪の好きな犬が死に

犬が逝き庭の犬小屋朽ちていく

おとなりの犬の命日書きしるす

高齢になると体の自由が利かなくなってくるのは人間も

ペットも同じです。そして、ペットの死は親しい人を亡くし

たときと同じで、「豆まき」「竹輪」「犬小屋」を見るたびに思

出すワンちゃんがあります。お隣の犬の命日を書き記しておく

のは、一周忌に御線香でも手向けてあげるためでしょうか。

大橋 修造

北田のりこ

荻野 圭子

草地 豊子

勝部 宏子

こまつてるえ

太田としお

平木 公子

田中 章子

谷口 義

上田ひとみ

川本真理子

「クラシック」

中 村 金 祥 選

(投句 220名)



ダダダダーンまさに運命だと思ふ
クラシック聞くと五分で高軒
古民家に住んでみたいとイターン
クラシック静かに流れ人を待つ
よく耐えたばかりも車もクラシック
第九合唱ベートーベンの貌で聴く
おじいさんになっていい味出た夫
クラシック茶髪の彼と聞いている
尺八を吹く爺ちゃんのクラシック
衣食住足りて静かにクラシック
ぐい呑みの茶碗クラシックにのめる
古典にもあった不倫というジャンル
縄文の土器の欠片にあるロマン
クラシック聞くと掃除がしたくなる
侘び寂びの文化が生きている日本
胎児にも牛にも聴かすクラシック
置物のためき足元から古典
AKB百年経てばクラシック
クラシック聞いても猫に小判です
クラシックひとり静かな秋に酔う

松原市 森松まつお
河内長野市 藤塚 克三
日高市 根岸 方子
和歌山市 北原 昭枝
神戸市 近藤 勝正
札幌市 三浦 強一
鳥取市 田中 天翔
紀の川市 楠原 富香
枚方市 寺川 弘一
大阪市 榎本日の出
鳥取市 夏目 一粋
明石市 桃谷 和郎
堺市 澤井 敏治
米子市 池田 美穂
西予市 黒田 茂代
鳥取市 岸本 宏章
沖縄県 森山 文切
宝塚市 丸山 孔一
鳥取市 谷口回春子
和歌山市 上田 紀子

着メロがイメージ壊すクラシック
ビートルズよりもワインはクラシック
名曲とわかるだけですクラシック
身ごもった妻と静かにシユーベルト
瀬戸の花嫁流れると泣けてくる
骨董の趣味が高じて骨董屋
秋灯下孫コミックで読む古典
失恋の傷また疼くクラシック
ドレスより和服正座がよく似合う
百代の過客となつて句を残す
エンディング故人の好きなクラシック
酷使した回路を癒やすクラシック

佳 句

父さんはガラケー母さんはスマホ
浪花節で育ちショパンで子を育て
淋しさの隙間へ忍ぶクラシック
アナログが刻むクラシックな歩幅
孫が弾くおたまじゃくしはクラシック

奈良県 安福 和夫
富田林市 山野 寿之
豊橋市 小松くみ子
奈良県 渡辺 富子
倉吉市 山中 康子
堺市 坂上 淳司
奈良市 米田 恭昌
唐津市 坂本 蜂朗
鳥取市 福西 茶子
豊中市 水野 黒兎
八尾市 山根 妙子
大阪市 若本 安代

弘前市 高瀬 霜石
和歌山市 福井 菜摘
和歌山市 土屋起世子
三原市 鴨田 昭紀
河内長野市 渡邊 修

クラシックな料理で祝うお正月

地

天

廃線を睨むクラシックな駅舎

クラシック僕より牛が知っている

軸

大切な時間はいつもクラシック

河内長野市 谷 久美子
三原市 笹重 耕三
倉吉市 牧野 芳光

「どっしり」

(投句 222名)

関 よしみ 選



よくよなどしないデンと鏡餅
大岩のパワーを背負い建つ社
山門の構え思わず身を正す
墨を摺るころどっしり据えて摺る
二歳児は爺じの胡座一人占め
わが家には二升炊き釜現役だ
おでん鍋みなどっしりと煮えている
どっしりと国の借金民の背に
実印の存在感に触れている
どっしりが急所つかれて慌てだす
高層のビルの合間に天守閣
どっしりが苦手ちよろちよろ独楽鼠
どっしりと構え悲しみ覗かせぬ
どっしりと見えて心は脂汗
揺るがずにでんと構えて指揮を執る
やるのなら腰据えやれと励まされ
どっしりと構え人生四つに組む
座布団に父の重さの跡がある
何もかも包んでくれている無口
どっしりと深い根つこのある話

堺市 内藤 憲彦
防府市 坂本 加代
八尾市 山根 妙子
三原市 笹重 耕三
西宮市 福島 弘子
大阪市 柴本ばっは
樺原市 居谷真理子
高槻市 富田 美義
海南市 小谷 小雪
鳥取市 夏目 一粹
三田市 堀 正和
和歌山市 武本 碧
藤井寺市 太田扶美代
生駒市 飛永ふりこ
大阪市 坂 裕之
堺市 村上 玄也
枚方市 寺川 弘一
大阪市 森 廣子
大阪市 若本 安代
吹田市 木下 敏子

どっしりと空母の妻が帰着待つ
百歳がどっしり暮す家族仲
どっしりと構え土壇場切りぬける
地獄見てどっしり座る肝っ玉
床山と二人どっしり大銀杏
漬物の重石は亡母の黒光り
親の夢背負うでっかい塾かばん
どっしりと天秤棒をまだ担ぐ
楽しくて飲む悲しくて飲むメタボ
切り盛りも笑顔どっしり山の神
第二子の子育てでんと構えている
千年の重み威厳のご神木

佳 句

奈良県 安福 和夫
鳥取県 山下 節子
和歌山市 福井 菜摘
香芝市 大内 朝子
唐津市 仁部 四郎
富田林市 山野 寿之
紀の川市 楠原 富香
和歌山市 北原 昭枝
高槻市 高瀬 霜石
八王子市 初代 正彦
大阪府 川名 洋子
米澤 俣子
富田林市 中村 恵
川西市 大坪 一徳
唐津市 坂本 蜂朗
倉吉市 山中 康子
黒石市 北山まみどり
羽曳野市 中川ひろ介
三田市 上田ひとみ
奈良県 渡辺 富子

精一杯生きたお釣りの趣味の会
どっしりとあの日のままの古火鉢
しがらみを捨ててどっしり冬木立
軸

絆にはどっしり残る母の儀打

初歩教室

題一 自然

居谷 真理子

詩歌である川柳はリズムがとても大切で、と同時に目に訴える「句の姿」もおおろかにできません。例えば、女、おんな、オンナ。漢字で引き締めるか、ひらがなで柔らげるか、カタカナで協調するか等々。辞書を引くのが面倒だからひらがなにしておこう、なんて思わないで下さいね。

表記の個性的な次の三句をご参考までに。

恐山石石石死死死

川上三太郎

ままごとのいわしさんまはわびしいぞ

橘高 薫風

キレイたいくつキレイたいくつ万華鏡

新家 完司

(原は原句 参は参考句)

原 自然な動き出来ればゴルフスコア良し 清 司
ゴルフ場が舞台ですのでカタカナを多用し

てみました。

参 ナチュラルなスイング出来てこのスコア

原 大自然堪能せずに見るスマホ (小) 雅 美

参 大自然前に見入っているスマホ

原 貧乏ゆすり自然と出てる焦ってる 雄 大

参 焦ってるな貧乏ゆすりし始めた

原 あわてずに待てば信号青になる (畑) 節 子

参 慌てないつか信号青になる

原 実りの秋神が与えし野に山に (山) 明 子

参 野に山に神が与えしこの実り

原 台風が運ぶカメムシこれ自然 勝 治

嫌われ者のカメムシに思いを寄せて

参 台風に運ばれてきたカメムシよ 旅 人

原 気取らない友で自然なおつきあい

参 気取らない人と自然なお付き合い (田) 廣 子

原 懐かしい友と話して自然体

参 旧友といて取り戻す自然体 隆 子

原 生さる知恵みな独特の自然界 隆 子

参 生さる知恵それぞれ持って自然界

原 白髪にあらがい空し今茶髪 つばき

参 白髪にあらがってます茶に染めて

原 紅葉散る自然果てない風が舞う ミヨノ

参 紅葉散る風舞う果てしない自然

原 健脚がやはり一番老いを知る 崇 明

参 足腰がやはり一番老いを知る

原 雑草は自然の恵み受けて生え 開 子

参 雑草も自然の恵み受けて生え

原 家めぐり雑草力に挑んでる まさる

雑草力一面白い言葉です

参 家攻める雑草力を受けて立つ

原 静いも自然消滅長伴侶 勝 正

「長伴侶」はちよつと苦しい造語です。

参 静いも自然に消えてまだ夫婦

原 自然界誰が教える四季の色 美 枝 子

参 自然界誰の絵筆か四季の色

原 赤ちゃんの笑顔にひかれ手が伸びる 風 露

参 赤ちゃんの笑顔が両の腕の中

原 許すこと覚え自然に気が軽い (大) 安 子

参 許すこと覚えてからの自然体

原 天災が何時起るか寝不足で 英 也

参 天災を怖がりすぎて寝不足で

原 核のない地球の自然美しい 昭 枝

「自然」を抜いた方が句が大きくなります。

参 核のない地球はもつと美しい

原 顔の皺自然の老を見せている (見) 温 子

参 顔の皺自然の老を見せている

参顔の皺これが自然というものだ

原 着飾らず自然な笑顔ハイチーズ 三樹夫

参 飾らない笑顔をどうぞハイチーズ

原 盆栽の爺さん自然をまるのみだ 一平

自然まるのみという表現に感服しましたが、

爺さんがよく分かりません。盆栽の古木で

しょうか。盆栽を丹精してる人でしょうか。

参 大自然丸呑みにして盆の松

原 食育の自然の恵み感謝する ももと

参 食育は自然の恵みへの感謝

原 生き方も自然にまかせ今がある くみ子

参 生き方は自然にまかせでそして今

原 夫婦坂登れば自然と手をつなぐ 整

参 夫婦坂いつか自然に手をつなぐ

原 家庭菜園自然流儀で無農薬 こずえ

参 家庭菜園自然流です無農薬

原 紅葉に我を忘れて浸ってる ひでお

参 紅葉に染められて浸ってる

原 不自然な大阪弁はいけ好かん (高)道子

参 不自然な大阪弁のスカンタコ

原 海山の幸に恵まれ感謝大 一雄

参 海山の幸に恵まれ日本人

原 風まかせ今日の私の風吹かす こみつ

スカーレット・オハラを連想しました。

参 明日は明日今日の私の風吹かす

原 自然のめぐみ赤黄白と秋に居る (東)美智子

説明しすぎて句がくどくなりました。

参 めぐまれて秋の錦の中に居る

原 少少のキズ唾ひとぬりで自然治癒 厚子

参 こんなキズ唾ひとぬりで自然治癒

原 九〇才自然にまかせたのしんで (山)久子

ゆつたりした詠みぶりが素敵です。

参 九十を楽しんでいる自然体

原 人間の力小さきあばれ川 澄子

参 人間の卑小を前に暴れ川

原 間に合うか地球の自然破壊され (高)弥生

参 間に合うか地球を壊す音がする

原 塾よりも自然体験から着く 紀美代

参 塾よりも自然の中で付く力

原 少しづつ雪を運んで冬の雲 洋一

参 少しづつ雪を運んでゆか雲

原 彼が言う天然ほけの君が好き 紀美恵

参 言われたの天然ほけの君が好き

原 この自然護るも壊すも人間だ なつみ

余韻を残した方が読者の胸に響きます。

参 この自然壊すのですか人間よ

原 素っぴんは五十過ぎたら罪になる 美穂

爆笑！でも五十歳以上の女性全員を敵にま

わしそう……。こんな皮肉は自分自身に向け

た方が上質のユーモアになります。

参 素っぴんのワタクシこれは罪ですか

恵子さん、課題を勘違いなさいました。掲

載できませんが悪しからず。

【佳句】

夏と冬これが自然となりそうだ

北風が夕餉のメニュー鍋に変え

自然体意識する程不自然に

自然体元気な内はそう言える

知らぬ間になつてしまったおばあさん (門)幸子

風花は厳しい冬の贈り物

レンコンの穴の形に作爲なし

開発に取り残されてある自然

自然派のデモに恨みのある企業

稽古場でまずは教わる自然体

【今月の推せん句】

小太りが長生きすると自然体

自然治癒なんとうれいプレゼント

ばあちゃんを見てて覚えたなんまいだ

梅木 澄空

不二夫

亜希子

のぞみ

武紀

幸子

宏子

一彌

俊雄

和之

真

横山 里子

近藤 治子

梅木 澄空

川柳塔鑑賞

同人吟 安土理恵

— 12月号から

煌めいていよう私は美しい

平井 美智子

貴女の煌めきは貴女の周囲を輝かせます。その為に煌めいていようという貴女は美しさを越えて神神しく見えます。

それから平気な顔で生きてます

谷口 義

女性のしたたかさを見せつけてくれました。何があるかと平気の平左、子を生み育てる力はここにあるのですから。

懺悔ならあの世とやらでするつもり

伊藤 のぶよし

この世で懺悔をしてしまつたらあとが続きません。したい事何も出来ないではありませんか。反省その他、すべてあの世に任せましょ。

月を見る月に吠えてる俺を見る

石橋 芳山

凍てつく夜に鎌の月、犬の遠吠えとくれば、もうやり場のない哀しさの極み、人間とて吠えたくもなる、「んだで昼はコワモテのオラだども凍れる夜は哀しいサ、んだどもサ、オラは泣がねヨ。」

若者の一途もしもの文字がない

升成 好

こういう若い人もつともつといはし。もしもの文字で身動きのとれなかつた我が青春をふり返る度、口惜しい。

妥協癖時どき空に吠えてい

岩佐 ダン吉

ああ、ここにも吠える人がいました。心ならずも妥協してしまつた口惜しさは空に吠えるしかありません。ケンカの出来ない優しい作者ですもの。

揺れている方が明日へ渡る橋

鴨谷 瑠美子

楽な方を行きたがるのが人の常、けれど明日へ続くのは揺れる方の橋、苦勞も少ないということですね。

世の中がどう動こうが年金日

関本 かつ子

思わず膝打ち、こももはつきり言われと拍手するしかありません。年金様サマ。

一心に祈る人には言えぬこと

井丸 昌紀

思わせぶりな……と思いましたがいい

え、吐露できない苦しさを含んだ深い句と気がしました。大切な一句なのですね。

肩書き取れただのおつさんだから好き

岩崎 玲子

肩書きのない名刺なんて、という人、けつこう知っていますけど、これはお見事！ただのおつさんにただのおばさんが惚れて、世は平和なのデス。

梨と柿秋刀魚も食べたこれでよし

江島谷 勝弘

— 欲を申さば紅葉浮く盃—と、続けたらバチが当たりますか。これでよし—をどう考えるかが、微妙。

手紙一本書けばいいことした気持

川端 一歩

電話やメールで事足る時代だからこそ一本の手紙は特別なもの。おっしゃるとおり、いいことした気持になるのだと思います。誰方に掛かれたかなんて野暮は申しすまい。

いただきます ごちそうさまと箸を置く

指宿 千枝子

外国語にはこの二言は無いそうです。そういう習慣も少ないとか。私たち日本人は日常何気なく行っていることですが大切に続けていきたいですね。

月光という静けさを増す明り

水野 黒兎

ドビッシーの月の光を想っています。音のない蒼の空間を格調高い句に仕立て

られました。作者の鋭敏な五感を羨ましく思います。

肥料やり水やり大地ありがたい

富山 ルイ子

マンション暮らしから小さな庭のある田舎に引越した私には文字どおりの実感句。世話をすればちゃんと応えてくれる。土。って本当にありがたいです。

頑張れる気がして赤いバッグ買う

藤原 大子

赤は元気をくれる色、勝負に強い色といます。女性は大前、何かに縋りたいもの。新しいバッグの赤は更なる飛躍を約束してくれることでしょう。

名月の今宵は恋の詩を詠む

佐々木 満 作

作者はロマンチスト。八十になつたら恋をしてみよう。と詠まれたのは薫風先生、名月の宵ごとに恋を詠むなんて誰にでも出来ることではありません。すごいなあと思うのは私だけでしょうか。

ひっそりと私も生きる昼の月

海老池 洋

昼の月は余程目を凝らさないと見ることができません。ひっそりの表現がびつたりですね。作者の覚悟のようなものを感じる静かさにひかれました。

ピカソよりモディリアニより北斎だ

鈴木 いさお

世界のマニアの目は今北斎ブルー、ピ

カソもモディリアニも名だたる巨匠ですが日本が誇る北斎の作品に私たちはもっと親しんでもいいのではーと私も思っています。

欠伸する姿はありのままの君

穂谷 和郎

子猫のあくびも愛らしいものですが、偶然に見てしまった恋人の欠伸は最高に可愛かったことでした。おのろけの句。ごそうさまでした。

あつばれた反対の手を高くと

黒田 能子

多くの賛成派の中にあつて反対の意を表明するのは勇気のいること、高くとあげられた反対の手に大きな心意気を感じたのでしよう。思わず「あつばれ！」

男には出来ない長い立ち話

市坪 武臣

女性には耳の痛い句、ですが女性には大切な社交なのです。井戸端会議に至る一歩手前の一寸した打ち合わせのようなものと思つていただけませんか。

ふり返るむこうで秋もふり返る

山口 不動

诗情豊かに秋色を塗り込めながら人の別れを詩にされました。くり返し読んでいるうちに何かがこみ上げてきました。

若い日の言葉で話してみませんか

亀岡 哲子

いいですねえ、みんなにあつた青春時

代にこの辺で戻ってみようというのですね。うたごえ喫茶も復活しているらしいです。誰方が企画して下さい。

飯の世にしてはいろいろある試験

大内 朝子

飯の世だからと甘くみてたら大違い、次から次へと難題が寄せて何とかやりすごしているうちに気づけば八十歳。生きるって何なのでしょう。

譲られた席で老人らしくする

小沢 淳

何て心優しい方でしょう。ユーモアが下地にあつて老人らしくに思わず頬がゆるみました。因みに淳さんは札幌から一人で来阪されるお元気な白髪の紳士。

ささやかに生きた旨いライスカレー

松山 芳生

カレーライスがライスカレーであつた頃と言ってもピンと来ない人が多くなつた昨今ですが、昭和初期から戦後にかけての食糧難にライスカレーは大御馳走、ライスカレーほど旨いものはないと思つていました。その頃のカレーは、雑穀米に肉なしで芋と人参、あまりもの野菜がゴロゴロでカレー味とろみスूपといったものでした。この暖かい一句にご自身の幼少期を懐かしんだ方が多勢いらつしやると思います、勿論私もその一人です。芳生さん、思い出をありがとうございます。

水煙抄鑑賞

—12月号から

藤井宏造

ついでだと言われたことが気に入らぬ

花岡順子

腹立てて正解です。逆らいましう。

ボランテア手品のミスも拍手され

荒木郁子

うれしいですね。手品続けて下さい。

足の爪お腹つかえて長いまま

小野雅美

大変です。切りに行きましょうか？

ミサイルの避難訓練眉につば

樋口真

九条の国はミサイル仰ぐだけ

岸田万彩

アメリカを狙うミサイルです。アメリカ

こそ避難訓練すべきです。ミサイル横

断の時は、手でも振ってやりましょう。

屁理屈も理屈のひとつ言ってみる

田本古鈴

いいですね、頭の体操になります。た
だし、笑いながら言いましう。

ブラジルは地球の裏と言うなかれ

山端なつみ

ブラジルからは日本は裏、反対と言う

言葉もありますが、言葉はややこしい。

ロケットマン亡命先は宇宙園

井上風花

宇宙へ行く度胸も技術もないと見る。

一人分のおかずはいつも作り過ぎ

森下よりこ

よくわかります。食べ過ぎに要注意。

どの鏡見ても私は老けて来た

川本美津子

目を閉じて見るわけにもいかず、この

際老いを受け入れ、老いを謳歌しましう。

う。

突然のキス心臓が噴火する

高柳閑雲

うらやましい。これは、三歳孫の女の

子からですよ、きつと。

ごまかしがきつと効くさと化粧する

横山里子

その前向きさ大事だと思います。信じ

るものは救われます。

女子会も焼酎組とビール組

野川宣子

スゴイ飲酒系女子。いい時代です。

ユニークだが夫の料理は不経済

穂口正子

どんな料理か大いに興味あり、週に一

回ぐらいなら不経済も大目に願います。

虫の声ほめてあげたいほど上手い

尾畑なを江

拍手を待っているはずです。エサもた

くさんあげて下さい。

方言で話し掛けます夕焼けへ

大前安子

夕焼けもきつと、方言で応えてくれ

はす。

最後にはしつかり礼を言う積り

生田和之

間にあわない時もあります。思い立つ

たら、直ぐに言っておきましょう。

最新の口説き文句を開発だ

相見柳歩

もう開発したんですか？成功率はどう

ですか？私にもぜひとも、教えてほしい

ものです。もちろん秘密裏にです。



川柳塔WEB句会

兼題「だんだん」 *平抜きと佳作は到着順

11月例会入選句

投句数304句(153名)

真島久美子 森山盛桜 共選

真島久美子 選

だんだんと軍靴の音が近くなる
だんだんと君を嫌いになる予感
告白の語尾がだんだん弱くなる
だんだんとまあるくなって星になる
だんだんと減って一人のカゴメの輪
だんだんと大人になっていく石榴
突然に開かないから香る百合
だんだんがあって貴方に行き着けぬ
だんだんと無口になった指狐
だんだんと近づいていますお母さん
グラデーションに輝くわたし見えてね
すこしずつ命が瘦せてきたようだ
ふる里の段々坂は猫ばかり
にんげんという坂道の七合目
ではまたのまたがだんだん減ってゆく
だんだんと守りに入る冬囲
だんだんと話は雲になってくる
黙祷でまた始まった同期会
紅の色変えて女が強くなる
親子から親友になる娘たち
段々の屋上ごとに月の影
心音を聞いてだんだん母の顔
年々に縮む背中へのランドセル
僕という像がボールを脱いでゆく
未来図へ満ちる今今今この画素
だんだんと死ぬ気がなくなる長寿
歳を取るたびにヤンチャになってきた
母に添いながらわたしも老いてゆく
特徴の無さがだんだん好きになる
生きている証がひとつずつ消える
こいびとがだんだん雪になる聖夜
「俺サア」と孫は少年ばくになって
佳 空席を埋めゆく手荷物とコート
佳 手と手と手つないで森になってゆく
佳 息を吐くたびに深まる悩心事
佳 負けたかな声がだんだんでかくなる
佳 身を削り素数になってゆく安堵
人 だんだんと鮮明になる句説点
地 銭形とルパンになった恋の果て
天 傷口がだんだん広くなる日暮れ

莊子 隆
沙海 岬
やんちゃん
め ぐ
里山 水月
間瀬田紋章
青砥たかこ
米山明日歌
米山明日歌
大内せつ子
まろ 子
こみち
上原 稔
柴田比呂志
アズス安須
辻内 次根
岩根 彰子
竹中 正幸
真田 義子
たごまる子
西沢 葉火
船岡 五郎
由 美
加藤 当白
加藤 当白
竹中えはし
新家 完司
渡谷さくら
徳重美恵子
ちゃくし
月波 与生
柳田かおる
安藤 なみ
平井美智子
蕎麦 酔人
高浜 広川
白瀬 白洞
葱 坊 主
斉尾くにこ
内田志津子

森山 盛桜 選

車間距離だんだん狭くなる老後
輝きを減らし続ける朝となる
老いた目にだんだん物が見えてきた
挑戦の靴が熱気を帯びてくる
告白の語尾がだんだん弱くなる
だんだんと色褪せたから愛おしい
出来たはず言い訳だけが増えていく
老いるのも進化もあるく形変え
甘噛みのだんだん強くなる羽音
だんだんと育ち一本杉になる
突然に開かないから香る百合
熟成がすすむワインもワタクシも
虚を実に上手く仕立ててゆく詐欺師
スマホ握りだんだん空を見なくなる
だんだんと心が空に浮きたがる
にんげんという坂道の七合目
人生の盛りも過ぎた先を見る
ダイエットせぬのに痩せる一大事
老人にだんだん重くなる年貢
次々と老化を攻める病垂れ
だんだんと悪人になり生き易い
婚活のハードル少しづつ下がる
だんだんと薄れて楽になる日暮れ
息を吐くたびに深まる悩心事
昨日までスキップ2回出来たのに
身を削り素数になってゆく安堵
少年は鱈に少女は桜鯛
いつの間にやら恋も嫉妬も褪せている
歳を取るたびにヤンチャになってきた
臆を出しだんだんつまらない人に
わたくしの首まで迫る温暖化
孤独ですスマホますます離せない
佳 引き摺った影がだんだん枷になる
佳 グラデーションに輝くわたし見えてね
佳 日の丸を振るとだんだんハイになる
佳 黙祷でまた始まった同期会
佳 負けたかな声がだんだんでかくなる
人 毒食ってだんだん大人へととなった
地 目も耳も老いて無敵になってゆく
天 声高な祝意の順に胡蝶蘭

よもやま話
かきくけ子
かきくけ子
藤澤 霧堂
やんちゃん
な お
や っ こ
桃谷 和郎
間瀬田紋章
柴崎 幸風
青砥たかこ
勢藤 潤
白鳥 象堂
尾崎 良仁
川本真理子
柴田比呂志
駿 河
坂本 加代
光畑 勝弘
笹倉 良一
平尾 定昭
ま さ と
田村ひろ子
蕎麦 酔人
内田志津子
白瀬 白洞
斉尾くにこ
山本 昌乃
新家 完司
徳重美恵子
颯 爽
木田比呂朗
藤澤 霧堂
まろ 子
笹倉 良一
竹中 正幸
高浜 広川
うちだあつこ
平井美智子
美馬りゅうこ

応募方法 【川柳塔】を検索→【川柳塔 WEB 句会】をクリック

senryutou.net/html/index02.html (サイト管理 森山文切)

同人特集

私の一句

(順不同)

走らねばならぬバトンをいただいた
離婚せぬ辛抱強い友ばかり
人生はみんな主役で脇役で
新しい年号どんな風が吹く
椿ならどうするわたくしの迷路
惜しまれて影も残さず腹を切り
何を周章てる地球は今も動いてる
吹く風にふつと昔がよみがえる
みんな許して春の服でも買おうかな
自然光モノも私も生き返る
本音言えば大きな波が来るだろう
瑞運がたなびいている古稀の脳
結び目はうす汚れても固かった
冬瓜と鶏の煮物は祖母の味
天国に伸びる実のなる木を植える
優しさと錯覚された気の弱さ
ご先祖に感謝忘れぬ彼岸花

熊本県	大阪府	八幡市	高槻市	出雲市	橿原市	橋本市	豊中市	桜井市	高石市	大阪府	唐津市	米子市	大阪府	和歌山市	鳥取県	三原市
岩	井	今	指	伊	居	石	池	安	浅	前	仁	八	西	川	新	小
切	丸	井	宿	藤	谷	田	田	土	野	部	木	出	上	家	島	
康	昌	万	千	玲	真	隆	純	理	房	た	四	千	楓	大	完	蘭
子	紀	子	子	子	子	彦	子	恵	子	つ	郎	代	楽	輪	司	幸



ほほほは羅漢の顔だ日本人
見られてもいいことだけを書く日記
寂しくてこの指止まれ伝書鳩

子ら集う温い余韻が二三日

白い雲どんな色にも負けてない

玉砂利を踏んで平和を願ってる

人間を監視カメラは信じない

笑顔にはえがお心が響き合う

いい波に乗って羽ばたく年女

赤ちゃんのクシャミ牡丹の花揺れた

空っぽはつまらん夫のポケット

あの沖のつづき名もない血が流れ

きな臭さ歴史はやはり繰り返す

再利用布も私も生き返る

遺書代わりおとぎ話を書いている

滝水の落ちゆく先はみな知らず

エンディングノートを書いてジム通い

試行錯誤薔薇はアーチに咲かせます

百までも生きてひよっこり雲に乗る

今ここでやらねば夢は夢のまま

東かがわ市	西宮市	藤井寺市	犬山市	富田林市	堺市	大阪市	堺市	高知市	西宮市	藤井寺市	箕面市	香芝市	枚方市	大阪市	大阪市	大阪市	岩国市	神戸市	
川	亀	鴨	金	片	加	笠	柿	小	緒	太	大	大	海	榎	榎	宇	内	上	上
崎	岡	谷	子	岡	島	嶋	花	澤	方	田	浦	内	老	池	本	本	都	村	田
ひ	哲	瑠	美	智	由	恵	和	幸	美	扶	初	朝		舞	日	満	志	夢	和
かり	子	美	千	恵	一	美	夫	泉	子	代	音	子	洋	夢	出	子	津	香	宏



ユーモアを食べたらお腹ふくらんだ
 未来だけ見て三輪車走り出す
 一票の価値の差よりも貧富の差
 百歳が稀でなくなる近未来
 春の陽へすべての命発芽する
 お食い初め皿に盛られた親ごころ
 ゆったりと雲はいつでも聞き上手
 夜が明ける重い話はもうようそう
 現実を受け入れてから春うらら
 人間が好き人間は面白い
 追いかけていたのは只の風だった
 沈む陽へ今日の翼を折り畳む
 ヤバイマジ 私の口から出る嘆き
 ユーモアがまだあるうちに五七五
 曼殊沙華彼岸のころに好きな赤
 厭なこと消して記憶に余白でき
 回れ右しても幸せにはなれず
 髪切つて風の誘いに乗ってみる
 朝寝すれば半日減つて日が暮れる
 いいことも無いが長生きするつもり

堺市	弘前市	枚方市	鳥取県	米子市	米子市	大阪市	大阪市	明石市	松山市	鳥取市	芦屋市	西予市	三田市	河内長野市	東大阪市	鳥取市	鳥取市	東京都	大阪市
齋藤	今	小	小	後	後	小	古今	糀谷	栗田	倉益	黒田	黒田	久保田	木見谷	北村	岸本	岸本	川本	川端
さくら	愁女	わこ	雄々	美恵子	宏之	集一	蕉子	和郎	忠士	一瑤	能子	茂代	千代	孝代	賢子	孝子	宏章	真理子	一歩



雲追うている間に古稀がみえかくれ
 遠い日の記憶みどりの地平線
 断捨離の先ず一番は酒の量
 人に言う前に自分はどうだった
 足腰の痛み浄土の一里塚
 ほどほどの幸で感謝の喜寿半ば
 来し方をつくづく思う逆上がり
 平和とはこの川の音樹々の色
 あるがまま老いてはおれぬ髪を染め
 復興の空にはブルーインパルス
 愛妻弁当コンビニの味がする
 柏手を打って今年も健やかに
 日本の夜明け信じて待っている
 初日浴びヤンバルクイナ飛ぶ構え
 お節介の一つ手前で立ち止まる
 浮き上がるためにしっかりと沈みます
 一駅を蝶はわたしの肩に乗り
 生年月日が真っ直ぐに立っている
 一輛電車いつも陽気に走っている
 十二月八日を語らないメディア

箕面市	篠山市	堺市	大阪市	唐津市	東大阪市	堺市	茨木市	犬山市	熊本市	藤井寺市	吹田市	藤井寺市	鳥取県	和歌山市	寝屋川市	宝塚市	大阪市	岡山市	枚方市
酒井	酒井	坂上	坂本	坂本	佐々木	澤井	島田	関本	杉野	鈴木	須磨	高田	竹信	武本	伊達	田中	谷口	丹下	丹後屋
紀華	真由	淳司	裕之	蜂朗	満作	敏治	誠一	かつ子	羅天	いさお	活恵	美代子	照彦	郁夫	章子	凱義	肇		



靴下の穴で現在地がわかる
 勝手だがずっと元氣と決めていた
 プライドはいつか崩れる赤いバラ
 体重ががらり変わったOP前後
 太陽と月 若者はロマン追う
 泳ぐほど沖はだんだん遠くなる
 優しさが厳しさよりも身に沁みる
 一強の余波に年寄りアッブッブ
 元旦の空に飛行機雲いらぬ
 思い出の赤を見つけた美術館
 初日の出心にパッと花の芽が
 今までは美德の筈の付度が
 引き返す勇氣も欲しい曲がり角
 閉じている私を開けに行く書店
 ありがとう感謝の心忘れない
 淡々と生きて色なし一行詩
 群青の海に九条捨てないぞ
 開幕のベルにおたおたするばかり
 好きな人の言葉すんと落ちてくる
 わたくしの鱗は花びらのかたち

紀の川市	河内長野市	大阪市	大阪市	大阪市	枚方市	堺市	羽曳野市	京都市	大阪市	生駒市	高槻市	高槻市	神戸市	寝屋川市	羽曳野市	尼崎市	尼崎市	米子市	岡山市	
辻	辻	津	津	津	寺	遠	徳	都	栃	飛	富	富	富	富	富	中	永	長	中	永
内	村	村	志	志	守	守	山	山	倉	尾	永	美	保	恭	ル	川	田	浜	原	見
次	ヒ	志	な	柳	弘	唯	み	求	奏	ふ	美	美	保	恭	ル	川	田	浜	原	見
根	口	華	ぎ	伸	一	教	こ	芽	子	こ	義	子	子	子	子	子	子	子	子	子



鉄を打つ錆びないように鉄を打つ
 幸せの根っこに人の和が丸い
 いつもとは違う道行くこれも旅
 君は太陽わたしも月と言われない
 運なんてボタン一つのかげ違い
 年金日論吉が誘う旅支度
 自分色やっと見つけた古稀の春
 友ゆえに言えないことがひとつあり
 有難う夜も寝ないで扇風機
 長生きの老母はよく食べよくしゃべる
 出かければ友だちの居る有難さ
 人心はオセロと同じ裏返る
 桜餅葉っぱも食べて春の息
 安易には妥協しない背を伸ばし
 男にももてる男がほんまもん
 遺産よりもう一度ほしい母の膝
 お茶の間で世界のうねり見極める
 侘しさを凌いで茶漬けたっぷりと
 妻よごめん飲んで歌って酔っている
 戦争に行かねばならぬ孫産むな

鳥取市	富田林市	上尾市	西宮市	西予市	枚方市	枚方市	日高市	吹田市	神戸市	南あわじ市	愛知県	大阪市	鳥取市	宇部市	寝屋川市	箕面市	富田林市	弘前市	尼崎市
中	中	中	西	西	二	二	根	野	能	萩	早	原	平	平	平	平	肥	福	藤
村	村	村	口	田	宮	宮	岸	下	勢	原	川	田	尾	田	松	島	山	士	井
金	伸	い	美	山	紫	方	之	利	狸	遡	す	菜	実	か	巴	一	慕	宏	
祥	恵	ゑ	子	久	鳳	子	男	子	月	行	子	美	男	み	子	文	情	造	

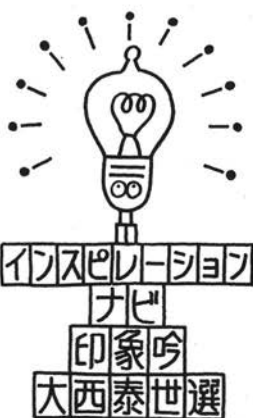


恋愛の若葉マークが消えません
 ユニークなヒントが浮かぶ風呂の中
 明日はあるそれでも今日は貴重な日
 少しぐらい天然ボケが愛される
 ひとりごと聞き逃さないパンの耳
 私に青い部分が少しある
 声嘎れて身振り手ぶりの応援歌
 井の中も大海もある既得権
 巻頭の七月号を抱いて寝る
 みささぎの道世界遺産になりますよう
 イライラは終わることない家事のせい
 嫁ぐ朝父の虚勢がぎこちなく
 ゴールまでのんびり行こう平泳ぎ
 楽しみの食事感謝の手を合わす
 らしい生き方探してみよう着地点
 日めくりを一気にはがす再起の日
 最後には雑炊となる冬の鍋
 引き出しの肩叩き券期限切れ
 骨そしょうあんまりきつく抱かないで
 喜寿傘寿兄妹四人揃い踏み
 幸せのリズムへタイミング合わせ

河内長野市	八尾市	京都府	豊中市	青森県	和歌山市	高砂市	豊中市	高槻市	京都府	東京都	神戸市	さいたま市	姫路市	大阪市	大阪市	尼崎市	京都府	豊中市	笠岡市
村	村	宮	三	水	松	松	松	松	松	榊	ま	細	星	古	藤	藤	藤	藤	藤
上	上	崎	宅	野	山	原	尾	尾	岡	本	え	川	野	川	原	田	岡	井	井
ミ	直	シ	満	黒	芳	寿	柳	美	宏	と	花	育	奮	千	武	り	文	則	智
ツ	マ	子	子	子	子	子	子	子	子	子	子	子	子	子	子	子	子	子	子
子	樹	子	子	子	子	子	子	子	子	子	子	子	子	子	子	子	子	子	子

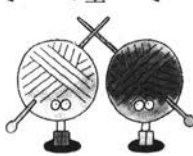
噫しか存在感のない私
 そりゃまあ遊びが好きならぬほど荒れる
 マカロンを食わねばならぬほど荒れる
 昔の事床に入ると考える
 ひと一人見送り菜種梅雨になる
 樹樹芽吹き百歳の夢捨てきれず
 暴走の君主へお灸据えとかな
 子育ての一幕にある糸電話
 レットイットビーふたりで歩けたらいいね
 み仏の情けにすがる昨日今日
 美しい嘘に抱かれてる臃
 五輪まで生きられますと医者が言う
 喝采を浴びて花火の消えてゆく
 お互いが掘出しものと笑い合う
 体力に勝てなくなったら好奇心
 もう少し生きようきつと面白い
 淡淡と明日を見ているケアハウス
 あと一歩で悪女になれるとこだった
 泣けばいい太陽はまた昇るから
 傘寿でも過ぎればまるくなるつもり
 黄昏にすこし間のある花のいろ

和歌山市	大阪市	堺市	奈良市	高槻市	奈良市	大阪府	羽曳野市	四条畷市	岸和田市	富田林市	倉吉市	長岡京市	鳥取県	唐津市	枚方市	河内長野市	高槻市	沖繩県	松原市	三田市
木本	江島谷	内藤	大久保	初代	米田	米澤	吉村	吉岡	雪本	山野	山中	山田	山下	山口	山口	山岡	山安	森山	森松	村田
朱夏	勝弘	憲彦	眞澄	正彦	恭昌	俣子	久仁雄	珠修	寿之	康子	葉子	節子	高明	弘委	富美子	忠子	文切	まつお		博



(投句219名)
新しい年がまた巡って
来ました。

内外の様子から、希望
に胸を膨らませながら、
とは行きません。



しかし、くよくよして
いても始まりませんよ、何かがそんな風
に囁いてくれているように思えます。

新しい年に新しいことを始める、また
以前から続いていることにはより一層の
進展を願って止みません。

では、ナビを。

大阪市 柴本ばつは
うちの猫こんな見たらうれしがる

(評) こんな、とはどんなかな。き
つとあるくてコロコロ転がるようなも
のでしょう。

横原市 居谷真理子
白い矢印黒い矢印さあどつち

(評) 白いから良い、黒いから悪い、と

は限りません。でも、だからこそ迷って
しまうのですよね。

黒石市 北山まみどり
告白をしたので毛糸買いに行く

(評) さあ、あとは毛糸を買ってきて、
セーターを編むか、それとも軽くマフラー
ぐらいから始めるか。

三田市 堀 正和
サヨナラと言わずまたねと言つ別れ

(評) 次への期待は大袈裟に言えば生き
る希望に繋がります。「またね」と約束を
装うのも優しさと言えましょう。

八尾市 山根 妙子
元号が遷る記憶を編み繋ぐ

(評) いよいよ現実のものとなった天皇
陛下のご退位、次は何という元号になる
のでしょうか、気になります。

和歌山市 楠見 章子
二等分してからぐつすり眠る

(評) 不公平の無いように、きつちりと
分けられたもの、それを確かめてからの
眠りの心地よさはたまりません。

篠山市 酒井 真由
私のコピーが文句ばかりいう

(評) 私のコピーとは影武者みたいなも
の、あるいは私にそっくりな子供かも。
文句はつきり言われるのはツライです。

横浜市 菊地 政勝
ひとまずは休戦をして話し合う

(評) 何にでも話し合うことが大事。そ

れによって分かり合えるものの大切さ。
とは言うものの、これがまた難しい。

弘前市 高森 一吞
昭和史の忘れられない黄い風呂

(評) むかし、ありましたねえ、こんな
情景、昭和史のひとつコマを思えば、あれも、
懐かしさは続きます。

上尾市 中村 伸子
緑の糸を探し続けているのです

(評) 緑という色彩からは、平和、安ら
ぎ、などを連想します。しかし、手に取
ってしっかりとソレを味わうのは大変。

大阪市 栃尾 奏子
好きだよと言ったばかりにベアルック

四条畷市 吉岡 修
ハッケヨイ正月場所じや負けられぬ

米子市 八木 千代
余所見せぬように目深の冬帽子

八王子市 川名 洋子
排除する排除されるも紙一重

鳥取市 山下 凱柳
カッカして言葉の刃突きつける

倉吉市 山中 康子
みんなみんな吐いて澄み切ったハート

枚方市 海老池 洋
光れない星もある筈星月夜

大洲市 中居 善信
串刺しの団子だんだん小さくなる

寝屋川市 簗島 恵子
男と女けしかけたのはさあどつち

羽曳野市 中川ひろ介
一人酒よりも寂しい一人めし

芦屋市 黒田 能子
接点のきつと見つかる話し合い

大阪市 奥村 五月
ミサイルが九条の国通りすぎ

西宮市 亀岡 哲子
風もないドームで落とす凡フライ

大阪市 田中ゆみ子
だんだんと君の手編みが重くなる

佐賀県 真島久美子
ケンカするほど仲良くはありません

枚方市 寺川 弘一
いつべんに二個もボールを投げないで

笠岡市 藤井 智史
通れない君の心にある関所

横浜市 川島 良子
とんでもないことが起こっているこの世

弘前市 福士 慕情
反旗振る妻と刃は交わさない

河内長野市 大島ともこ
ガキ大将チャンバラだけは強かった

大阪市 古今堂蕉子
体制も反体制もかの如し

弘前市 稲見 則彦
軸がずれ途方にくれる宇宙船

大阪市 平井美智子
籍抜いてあげる自由にしてあげる

藤井寺市 鴨谷瑠美子
返す気がないので二つとも貰う

大阪市 大治 重信
白旗をひらひらさせて蝶は逃げ

鳥取県 斉尾くにこ
震度6まるまっていたミケとタマ

弘前市 高瀬 霜石
愛しても愛しすぎてはならぬ酒

松江市 石橋 芳山
円卓の騎士が序列で揉めている

宝塚市 田中 章子
影武者も太っています北の国

青森県 松山 芳生
星とふれ合う味がするサクランボ

鳥取市 谷口回春子
糞糸足らないはずはありません

藤井寺市 太田扶美代
編み棒が時々喧嘩売ってくる

寝屋川市 森 茜
木枯らし一号つけもの樽を洗わねば

三田市 久保田千代
串刺しの刑とは何とおそろしい

和歌山市 土屋起世子
念押され共に怪しくなる記憶

尾道市 大本 和子
棘のある言葉で愛を確かめる

大山市 金子美千代
洗脳されてもうワタクシに戻れない

三田市 村田 博
三色団子ひとつ食べたのは誰だ

鳥取市 山野すみれ
指切りげんまん楽しい冬祭り

香芝市 山下 純子
この先は進入禁止火傷する

大阪市 小野 雅美
わだかまり残したままに巻き戻す

奈良県 長谷川崇明
寒いなか置き去りだけはもうごめん

堺市 内藤 憲彦
楽勝と読んだ油断が命取り

和歌山市 古久保和子
お互いに年取り過ぎた恋仇

河内長野市 山岡富美子
ウォームビズせめて自分のマフラーを

岸和田市 宮野みつ江
たこ焼の味ソース派か醤油派か

三次市 伊藤 寿子
肌の色違い気にせず競う技

大阪市 坂 裕之
失散はお互いさまと笑い合う

西宮市 福島 弘子
焼いもが楽しみだった落葉焚き

豊中市 上出 修
夫婦喧嘩負けるが勝ちでまた勝った

3月号発表 (1月15日締切)



(平本 勝彦 画)
柳箋に2句

本社 十二月句会

◇十二月七日(木) 午後一時
アウイーナ大阪

師走に入り、気忙しくなつた七日、十二月句会は百二十八名(内投句者五名)の参加で開催された。

今月のお話は水野黒兎さん。題は「時代と川柳」。「歌は世につれ世は歌につれ」とよく言われるが、「歌」を「川柳」に置き換えることができる。昭和天皇薨去の平成元年から阪神淡路大震災の平成七年まで、その年のできごとや出版物、流行歌などを背景に生まれた、塔誌の先人の句を紹介された。

・灯油値上げおしくらまんじゅうでもしよう
(湾岸戦争の平成三年) 小出智子

・一月十七日 晴 街がつぶれた
(阪神淡路大震災の平成七年) 小林一夫

大震災を思い出し、胸のつぶれる思いをかみしめながら「ベチカ」の合唱でお話は終わつた。

月間賞は山田葉子さん(長岡京市)

(司会)真理子・隆彦(協賛)扶美代・まつお

(受付)裕之・ひろ子(懸垂幕墨書)耕治

(清記)憲彦

席題「逸品」 井丸 昌紀 選

ガラス玉ダイヤの顔をしてひかる

逸品のメロン一口愚痴を聞く

逸品を寂しく食べる一人めし

保険でもスルメが噛めるこの入れ歯

ふたつないアツと驚く夫です

プロポーズされて貰つたガラス玉

逸品も5日食べれば飽きてくる

古伊万里に盛ればおでんもごちそうに

逸品の好きは貧乏人である

この浮世絶品やはり私です

5百万かけて作つた総入れ歯

減多に出ないと掴まされた欠けた彼

逸品のふりして床に鎮座する

困つたら売れとピカソの絵をくれる

逸品ならわたし育てたかえるの子

逸品のはずがなかなか嫁がない

さすが逸品五百億円した絵画

取り寄せたリンゴ逸品だと言えず

逸品を庭に積んでる陶芸家

逸品を前に口上まだ続く

汗かいて育てた小羊世界一

私の力作ですよ子供たち

逸品と信じて買ったのにピカソ

逸品を鑑定団でゴミにされ

お買得ですよ二つとないワタシ

ライトアップに太陽の塔吼えまくる

大内 朝子

山口弘委智

肥山 一文

居谷真理子

大久保真澄

澤井 敏治

清水久美子

永田 紀恵

山本 進

小野 雅美

坂上 淳司

中岡千代美

川上 大輪

森松まつお

榎本 宏子

今井万紗子

藤井 則彦

鴨谷瑠美子

坂上 淳司

岩佐ダン吉

新家 完司

上田ひとみ

鈴木いさお

油谷 克己

鈴木 栄子

前 たもつ

波の音が聞こえる塩辛とお酒

鑑定に出したらきつと笑われる

日の丸は国旗の中の国旗です

剃刀の切れ味やはりゾリインゲン

家にある逸品わたしぐらいです

新幹線必ず富士の見える席

うまかつた十萬円のマツバガニ

偽物がこの値で売れる流石だな

同窓会高嶺の花も同い歳

親爺から継いだ逸品僕の顔

北斎の波が無限の夢招く

あり合わせですが逸品の小鉢

住 モンゴルの逸品拳すら強い

愛してやまぬ逸品百年の孤独

その値では逸品であるはずがない

逸品より飲みなれた酒なによりも

薄い髪逸品にする美容室

人 逸品の河豚刺し消える五秒間

地 私の逸品チンすればできる

天 柿右衛門の壺より中の酒が好き

軸 逸品と言えども酔い方は同じ

兼題「土」 小谷 小雪 選

煩惱が汗で流れる土いじり

福田 好文

立蔵 信子

森松まつお

上田 玄也

村上 玄也

この土に惚れたと登り窯の前
春を待ついのち大地のゆりかごで
土いじりして故郷の母偲ぶ
土の香が消えてしまった街の冷え
双葉まです土にお辞儀し日を拝む
土の値はこのイノシシが知っていた
転んでも泥臭くまた立ちあがる
儲かりはせぬが潤う土に生き
土偶から学ぶ原始の女神論
泥んこのズボンしつかり裹めてやる
行き詰まり素足で土を踏みにゆく
里の土つけてジャガイモこんにちは
土掘って金魚のお墓土を盛る
ありがたい土壇場からの助け舟
お静かに青い命が土を割る
少しだけ無理をしるよと土踏まず
土をなめ土の機嫌を聞く農夫
球根は凍土の中で春を待つ
無人店で土の香りを買ってくる
逃げ道をたくさん持っている土竜
土こねる縄文人に負けまいと
背かれた胸に堰切る土石流
きれいな花が土へ嬉しい答えです
やわらかい土だ芋大根がよく喋る
泥だんご未来のシェフが陶芸家
夕映えのキミと語った春の土手
風に舞う落ち葉も土に還りたい
坪庭へ古里の土そとと混ぜ

矢倉 五月
栃尾 奏子
坂 裕之
山岡富美子
北野 哲男
青木 公輔
出口セツ子
三宅 保州
栃尾 奏子
池田 純子
荒川 純甲
新家 完司
鴨谷瑠美子
飛永ふりこ
伊達 郁夫
山田 葉子
鈴木 栄子
富永 恭子
藤井 宏造
太田扶美代
石田 隆彦
西出 楓彦
内藤 憲彦
山本希久子
水野 黒兎
初代 正彦
原田すみ子
前 たもつ

受賞した大輪土を褒められる
モリとカケいずれにしても土地がらみ
土と再会思わぬ恋が芽生えそう
野良に立ち裸足に土の息吹き聴く
泥つきの大根母が来たらしい
一坪の角地を守る立ち飲み屋
物忘れ私の中の土砂崩れ
嗅ぎ分ける土にまみれたもの同士
佳
晴耕雨読ミミズの声を聞く余生
私の領土を攻める草と虫
いい土になれそうもない飲んだくれ
土踏まずにお早うございますと言う
言い訳が過ぎて土鍋が焦げていく
人
土遊びできない子等の細い骨
地
涙拭く土の匂いのする拳
天
意のままになるまで土を握っている
軸
汚れても気の済むまでの泥遊び
兼題 「結ぶ」 原田すみ子 選

山田 耕治
江島谷勝弘
青木 公輔
長高 俊雄
久保田千代
澤井 敏治
山岡富美子
山田 葉子
澤井 敏治
関 よしみ
新家 完司
谷口 義
伊達 郁夫
村上 直樹
木本 朱夏
前 たもつ

神の結んだ糸です決してほどかない
愛なんて所詮蝶結びです
人と人むすぶ一言ありがとう
緩いめに結んで子は子親は親
結び目がほどこけてからの小宇宙
軽い気で結んだ紐がほどけない
大銀杏結べないまま幕の内
一帯一路世界を結ぶ帝国化
人と人結ぶと道が出来上がる
星と星結んでロマン掻き立てる
SNSで寂しがり屋が結ばれる
こつこつと積んだ努力が実を結ぶ
赤い糸結び直そう有馬の湯
丁寧に結ぶ仏様との縁
結んで開いてリハビリをしています
結んだのはわたしほどいたのも私
糸尻を結んでなくと素通りし
くに訛り心とところ結びつけ
百合子ちゃんと手を結んでから地獄
結んで開いてさてそれから分岐点
九条と平和を結ぶ太い綱
一文字に口を結んだ反抗期
正月に亡母の顔して結ぶ帯
結んでも結んでもなお遠くなり
手違いもあるさ出雲の縁結び
結ばれている気になっているメール
結び目はゆるく私を楽にする
手を結ぶ机の下のせめぎ合い

安土 理恵
川上 大輪
山岡富美子
大久保眞澄
山田 葉子
鴨谷瑠美子
村上 玄也
藤村 亜成
新家 完司
川上 大輪
西出 楓彦
大内 朝子
油谷 克己
山本希久子
中岡千代美
谷口 義
宮崎シマ子
水野 黒兎
井丸 昌紀
青木 公輔
佐々木満作
木本 朱夏
榎本 宏子
内田志津子
細川 花門
川端 六点
岩佐ダン吉
長高 俊雄

鬼と手をつないだ苦い酒だった友に会い結ぶ手ほどくランドセルほどほどを結び大きな輪をつくる仰ぎ見る印を結んだ阿弥陀さま胎内で神と結んだらし寿命

佳

ダイヤモンドで結ぶ指切りで結ぶかたくなに結んだ口が堰を切る結び目がほどけて愛が逃げました丁寧に結び直して明日の事結び目に執行猶予がついている

人

結び目のねじれを文春がねらうひとときの命朝露凜とする

地

簡単にLINEが結ぶ少女A

天

軸

結んで開いて心を遊ばせる

兼題「ふと」

松岡

篤選

親切もふとした事があだになるこんな事昨年はちゃんと出来たのにアイデアがふとひらめいたしまい風呂そういえば別の言葉だったのか妻の中にふと母親の顔を見るさよならはあの日ふとした誤解から昼寝からふと目覚めればあの世かも

田中ゆみ子	能勢 利子	澤井 敏治	初代 正彦	榊本 宏子	小島 蘭幸	島田 誠一	榎本 舞夢	今井万紗子	谷口 義	山岡富美子	岩佐ダン吉	平尾 定昭
-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	------	-------	-------	-------

亡き妻が呼んだ気がする台所
難破船スパイでないかふと思う
ふと見ると大口開けて寝てる妻
振り向くと他人の顔の妻が居る
名吟が湯舟の中でふと浮かぶ
まつり笛ふと思ひ出す肩車
ふと気づくセールで諭吉みんな消え
ふと思うスイッチ一つ地獄戦
ふと思う昔の日本北の国
真夜中にふと目をさます猫会議
本音中へと洩らしてからの向い風
ふと投げた言葉が風に乗っている
ふと思う睡眠負債かも私
ふと洩らす言葉に潜む下心
ふとくれた一瞥君の目がぬくい
気が付けばまさか私がおばあさん
ふと見ると一升瓶が瘦せている
覚えてるかたし千円貸してたな
駅名が気に入ったので途中下車
フードロスふと目に浮かぶ飢餓の子等
断言をした後にふと辞書を引く
何気なくついた嘘から四面楚歌
ふとした時に本音顔出す言葉尻
妻の顔ふと目に浮かぶ四軒目
ルミナリエふと断水の日日思う
ふと見ると孫のホクロが同じ場所
嵐かと妻の髪にふと目覚め
ちっほけな悩みに風がふと笑う

山田 耕治	石田 隆彦	森松まつお	居谷真理子	油谷 克己	池田 純子	出口セツ子	榎本 舞夢	平賀 国和	西井 紀華	山岡富美子	山口弘委智	初代 正彦	山岡富美子	升成 好	山岡富美子	宮崎シマ子	江島谷勝弘	居谷真理子	鈴木 栄子	鴨谷瑞美子	内田志津子	米澤 俣子	川端 六子	緒方美津子	安福 和夫	細川 花門	今井万紗子
-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------

ふと思うきようはサンタに会えそうと
ふと見るとわたしの影に角がある
使い切れるかふと心配になる預金
宿敵にシャッポを脱いで祝い酒
大笑いふと気にかかるシワの数
帳尻があわずふと抱く不自信感
気づいたら妻の家ににされていた
本音ボロリ溝を深めた酒二合
ふと主婦の仮面はずしてみなくなる
気がつくと勝手に尻尾振っていた
ふと浮かぶ佳句はトイレか風呂の中
祝杯を挙げよう生きていることに
主賓より招待客のフアッシュンショー
子や孫と正月祝う過疎の村
新所帯母のおせちと祝箸
年金がいよいよやしてる熨斗袋
祝い箸ひとつ増やして春を待つ
開店日我が物顔の胡蝶蘭
祝われぬ子でも愛しい私の子
下戸だけに祝酒なら頂こう
祝開通頑固な腸が笑い出す

兼題「祝」

大内

朝子選

澤井 敏治	石田ひろ子	富永 恭子	初代 正彦	小野 雅美	宇賀 史郎	片山かずお	小川賀世子	松尾美智代	三宅 保州	川上 大輪	矢倉 五月	奥村 五月	横山 里子	柿花 和夫	能勢 利子	木藤こみつ	井丸 昌紀	今井万紗子	安福 和夫
-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------

いまだきの喜寿も傘寿も忙しい
 定年祝い功労賞は妻である
 おめでとくともお若い喜寿です
 アリバイが成立したら祝杯だ
 そうですよこまで来ればおめでたい
 親友の祝意はハグでこと足りる
 短い祝辞多い祝儀がよろし
 乾杯のコップが重くなる祝辞
 百五歳の姉が逝つたらお祝だ
 許されてやつと舟出になる宴
 喜べぬ歳にハッピーバースデー
 てんこ盛りです祝辞の美辞麗句
 鰻食べるとお祝のようになる
 心から長寿社会を祝えるか
 ビンビンの論吉祝いに家を出る
 サプライズ付きの祝辞に湧く涙
 この平和白寿の祝まで続け
 誕生祝いして欲しくない妻と住み
 ひと言が足りず祝いが崩れかけ
 傘寿の祝いその後の歳は数えない
 戦争を知らずに古稀の誕生日
 あなたにもいいこときつとやつて来る
 祝日が増える子守りの日が増える
 金婚くらいでおめでとくと言わないで
 赤飯を炊く自分史の一頁
 長生きを祝う陰には泣く介護
 祝白寿小さく小さく座す母よ

山岡富美子
 川端 一步
 片山かずお
 平尾 定昭
 上田ひとみ
 西出 楓葉
 大久保眞澄
 山崎 武彦
 宮崎シマ子
 安土 理恵
 小山 紀乃
 川上 大輪
 谷口 義
 水野 黒兎
 米澤 俣子
 清水久美子
 榎本 舞夢
 井丸 昌紀
 青木 公輔
 荒川 鈍甲
 居谷真理子
 上田ひとみ
 澤井 敏治
 中岡千代美
 木本 朱夏
 伊達 郁夫
 小川賀世子

佳
 ライバルからお祝い負けたなと思う
 過疎の村長持ち唄が木霊する
 地球上最後の核が消えました
 お祝い返し百まで生きてみせましょう
 祝杯の影で敗者が臍を噬む
 人
 祝う日がないほどおめでたい暮らし
 地
 生命とはこうも輝く新生児
 天
 祝ご退位どうぞふたりのマイウエイ
 軸
 やつとこさ祝辞いたたく愛娘
 兼題「素顔」 小島 蘭幸 選
 柳友はみんな素顔で楽しいな
 向き合つて恥ずかしがつている素顔
 八十歳まだ素顔にはなり切れぬ
 僕と居るときは素顔でいいよ妻
 中学生みんな素顔で美しい
 契りましたので全てお見せする
 掘り炬燵の中で人間皆素顔
 阿修羅にも素顔があるのです家路
 金輪際素顔は見せぬ花の芯
 素顔見せない人が威張っているジャパン
 いいねがいっぱい貰えそうな素顔

鈴木 栄子
 油谷 克己
 岩佐ダン吉
 吉村久仁雄
 島田 誠一
 大久保眞澄
 柴本ばつは
 村上 直樹

温泉街に油断素顔のまま散歩
 素顔なら三つか四つ持つている
 もう一度素顔に戻りたい地球
 ああこれが素顔か朝のネオン街
 素顔で乗車降る時にはフルメイク
 ひきこもりやつと素顔になったボク
 ばくの素顔にはつと出会った水たまり
 三枚目の素顔に笑い皺がある
 メガネ帽子マスク隠せるだけ隠す
 戦いが済んで素顔の午前二時
 鬼コーチ素顔はシャイであどけない
 遺影には不向きな僕の素顔です
 素顔には殺気があつて近づけぬ
 指を折る素顔のまをを吐きたくて
 素顔という仮面で今朝も差し向かい
 素のわたしようやく好きになりました
 汗まみれの素顔輝くアスリート
 素つびんでいるとやつぱり惚けますか
 一番大事な人にずっと素顔
 素顔に戻り赤ちゃんになりました
 百歳の素顔に恐れ入りました
 インスタ映えよりも日焼けた素顔
 朝の妻化粧ないから新鮮だ
 素顔を褒めたいを今では悔いている
 素顔では生きていけない万華鏡
 時間かけ素顔に見える化粧する
 住
 木枯しは真剣わたくしも素顔

中川ひろ介
 西出 楓葉
 藤村 亜成
 北野 哲男
 柿花 和夫
 榎本 宏子
 前 たもつ
 三宅 保州
 富永 恭子
 長高 俊雄
 清水久美子
 前田 紀雄
 平尾 定昭
 松浦 英夫
 村上 直樹
 山田 葉子
 水野 黒兎
 久保田千代
 古今堂蕉子
 村田 博
 三宅 保州
 初代 正彦
 宮崎シマ子
 中岡千代美
 田中ゆみ子
 横山 里子
 居谷真理子

座み終えてまぶしい花になる素顔 木本 朱夏

僕にだけ素顔を見せる伎芸天 木嶋 盛隆

アンパンを黙々食べている素顔 田中ゆみ子

旅に出ると素顔になれる空と海 立蔵 信子

人 素顔にはひらがなのやさしさがある 谷口 義

地 吹雪も桜もふるさとの素顔 新家 完司

天 素顔でもわたしみつつけてくれますか 山田 葉子

軸 素顔のままです理事長になりました

平成29年本社句会皆出席者

(1月・12月)

(順不同)

油谷克己 石田隆彦 上田和宏 石田ひろ子

小野雅美 川端一步 木本朱夏 江島谷勝弘

小島蘭幸 酒井紀華 坂上淳司 居谷真理子

澤井敏治 島田誠一 初代正彦 指宿千枝子

新家完司 西出楓楽 能勢良子 太田扶美代

藤井宏造 藤井則彦 細川花門 片山かずお

升成 好 松岡 篤 前たもつ 木藤こみつ

村上玄也 村田 博 水野黒兎 鈴木いさお

山根妙子 山田耕治 渡辺富子 柴本ばつは

松尾美智代 山岡富美子 山口弘委智

山本希久子

(記載漏れの方はご連絡ください)

(40名)

句会 燦 燦

十一月句会を読む 弘 津 秋の子

一面に枯れ葉あの日の別れこの辺り
女子トーク恋をいっぱい敷き詰めて

安土 理恵
栃尾 奏子

十一月句会に加島由一さんのお話から始まる。チェーホフの「口説かれない女は早く色褪せる」という箴言の紹介にゾクリ。でもこの二句を見れば川柳塔の女性は大丈夫だと解ります。

五入れのほんに無邪気な敵味方 緒方美津子

人間も敵か味方かを一瞬に判断して生き延びようとする動物なのかもしれぬ。美津子さんの目は川柳の目だ。

割り勘の席に酒豪が二人いる 吉村久仁雄

こちらの「敵」は酒豪の柳友。男の人も私と同じ感覚を持っているんだなあと安堵。顔に出さない姿に一礼。

終わらせる意志がわたしのペール剥ぐ たむらあきこ

薄すぎるペールに過去は覆えない たむらあきこ

「私の本音を吐く」という川柳がある。自分の内面を掘り下げてゆくと凹んでいる自分が見えてくる。句に吐いて自分を救いたい。ヒリヒリ感が伝わってくる。

どんぐりはてんでバラバラ夢を追う 森 廣子

童女に戻った日の一句。人は二面を持っている。どちらの自分も愛してゆきたい。

水引きが際立つ孫の佳き日なり 長浜 美籠

美しい日の一句。一生に一度しか詠めない一句。

真理子さんから電話だと妻の笑み 内藤 憲彦

兼題「動揺」にピッタリの句である。川柳は男女を問わず雅号で呼び合う。家庭争議に発展することを知っている。一句に詠む内藤家は安泰である。

風船が弾けたほどのことでした 木本 朱夏

おおらかに楽しく生きたし。

おせわな

毎月24日締切・35句以内厳守
掲載は原稿到着順となります。
楷書で誤字のないようにお願い
いたします。
編集部

和歌山三幸川柳会

楠見 童子報

いじめにもルールがあった昔の子
アルバムの甘酸っぱさを嗅いでいる
昔のこと妻は忘れてないと言う
追憶を辿ると風は秋の彩
大家族授かる知恵も無限大
古の私を知っている鏡
一昔前は静かな嫁だった
想い出す昔通った恋の道
米一升炊いた昔がなつかしい
一ダース産んで表彰された祖母
音消して地球の鼓動聞くために
指揮台に立てば全身耳になる
友の愚痴受話器だんだん眠くなる
耳二つあっても聞けない小言
末席で聞けば善し悪し見分けられ

ひろ子
知香
よしこ
幹子
富香
千鶴
絹子
准一
起世子
昇
明子
日出男
宏枝
章子

消息を聞くと寂しい風の音

クラシック聞きながら歯の治療室

コマーシャル聞いてとびつく不用品

泣くという楽器奏でる赤ん坊

万葉のロマン楽しむ古代米

食欲の秋を楽しむ夫婦箸

何もかも承知気楽に生きている

水澄んで空気も澄んで誰も居ず

君と僕すつきりあかの他人です

断捨離を済ませすつきり身が弾む

どちらにもご恩があつて茶を濁す

秋風にあの人思う昭和の灯

外出へ先ずは鏡に見てもらおう

家同様わたしリフォームしたいもの

三年目石の上から逆噴射

行間に思い漂う母の文

てにをはを並べて橋が出来上がる

生きている証の灰汁を出している

用いはまだ終わらぬ彼岸花

いつまでも平行線の生欠伸

京都塔の会

山田 葉子報

子が果立ち妻のクレーム僕独り
クレームが続く企業で危ぶまれ
学校にクレームつけるモンスター
不具合にリコール宣言して詫びる

五月
ふりこ
朝子
肇

次根

美枝子

まき

保州

義泰

当代

美羽

純子

宏夫

義雄

菜摘

昭枝

みね

一雄

寛

敏照

智三

淑子

理恵

和子

脈脈と炎もやしてまだ女

マッチの炎ほどのときめき老いの恋

今日もまた犬を相手にばやいてる

クレームに損害賠償言うて来た

クレームの解決は昔も今も金次第

山の神に文句つけたらバチ当たる

ストレスを晴らす近道はやくこと

相棒とはやき肴にのれん酒

終点でもまだばやいてる独り言

炎ないオール電化の親孝行

お互いに車椅子でも恋は恋

陽炎に小躍りをするランドセル

自然の怒り地震台風ゲリラ雨

難壇は変わったけれどさあ勝負

70年平和憲法どこへ行く

心では炎えていました遠い日よ

死語になるはじめチヨロチヨロ中パッパ

何がめでたい卒寿の姫が切る啖呵

連合いはばやくかわりに酒を飲む

夕支度はやき聞くのも母の役

ひとりもの声も出さずにひとり言

民意など置き去りにして内輪もめ

お世話役クレームつけられる役目

葉がハラリ焚き火に焼けた絵本から

ばやいてないで月を一緒に見ませんか

夫婦円満妻のクレーム全て吞む

哲子
公子
弥生
ルイ子
円笑
英旺
保子
義昭
則彦
弘子
北舟
正彦
元一
文代
泰夫
篤子
満子
靖鬼
美津子
宏子
求芽
洋志
かずお
弘之
葉子
万紗子

炎にも水にもなる亡父だった

光久

川柳わかあゆ(鳥根) 松本はるみ報

どこまでを生きてゆくのか日が昏れる
あきもせず毎日一緒の老二人
針の穴あちこち逃げる糸の先
部屋の中にもないのによろよると
娘のような保健師さんが頼もしい
会えばすぐ小学生になる友と
良き人に出合う病院待合室

恵美子
昌

川柳ふうもん吟社(鳥取)夏目 一粹報

産声もひとり天国にもひとり
ライバル同士でつばりあって腕をあげ
着地する海があるから私飛ぶ
頂点を目指すアスリートの孤独
安理理とてつばる北は無頼漢
アスリート甲種合格特攻機
中国人お店を空にして帰る
丁寧な説明民は聞いてない
矢印の最後にあつた着地点
記録より記憶に残るアスリート
バーゲンで妻の駆け足アスリート
着地とはあの世だろうか父母が待つ
薬物を使うもすべて国のため
亡母の味努力するけど桁違い

洋々
凱柳
天翔
無限
回春子
野蒜
ふみか
金祥
彰夫
茶人
隆浩
幸子
龍彦
哲子

隣の子銀座に家を建てたとか
蟹漁師とゴマメ漁師は桁違い
金メダル教授になったアスリート

美穂
蟹郎
賢悟

着地ミスでした離婚の判をつく
てつばつてみても敵には金がある
北朝鮮でつばるばかり自滅する
甘酒の中で発酵するわたし
新発見月にモグラが居たのかな
アスリートに兎も亀もおりました
もう一度着地をしたい母の膝
桁違いの亡母の心は今気付く
赤札のゼロの数には気を付けよ
試着して気付く値札の桁違い
太陽の着地は今日も西の海
組板の上で男のする覚悟
小さい嘘ついて心に針残り
出し惜しみせずにつばれ底力
コーティング利きすぎ男近寄れぬ
核暴発こわれる地球みたくない
桁違いダイヤ私の夢のゆめ
一休みしようか着地できぬ恋

振作
昌子
真理子
節子
三千代
清信
高鷺
昌鼓
美恵子
八千代
善平
雅女
一粹

「てつばる」は張り合うの意

川柳塔みちのく(青森) 稻見 則彦報

満月がしんなりもたれかかる帰路
風説の酒一合に惑わされ

則彦
花匠

高瀬 霜石 選

僕は釘強く打たれて強くなる
千振りのような意見に出会えない
星の数たつた一人が見つからぬ
すぐ側にあった四つ葉のクローバー
マドンナが認知症だという噂
アンパンの臍のあたりにある内緒
百姓をやめてマンシヨン建てました
うっかりとご飯おかわりしてしまふ
平均寿命とつくと越えて魔女となる
台風も結婚式に駆け付ける

志華子
美穂

佳句地十選 (12月号から)

倉益一瑤 選

世の中を上手く泳いだベン先の
泳いでも泳いでもまだ霧の中
潮時が来たか火の粉は消しておく
ザワザワ沖縄の歌終わらない
真つ直ぐに生きて全身傷だらけ
生き様のドラマ火の章水の章
先生が赤と言ったら赤だった
その昔私も赤い渦だった
吠えたとして何も変らぬ身の回り
コスモスの迷路で人間に戻る

美枝子
幹子
八千代
安子
志華子
茶子
アキ
としお
まゆみ

沈黙に慣れて狂っていくリズム
夢一字のびのび走る筆の旅
神戸鋼・ニッサン揺らぐメードイン
野良着から羽はたく冬の湯治旅
慣れたのにも本番ドジを踏む
しんなりとトイレの紙のおもてなし
地球儀を回して思う空の旅
この人と生涯旅をする予感
津波だぞ上へ上へとてんでんこ
五楽庵調伝説になることだろう
子規に愚痴聞いてほしくて根岸まで
慣れたってどうせ逝く身の根無し草
一日の短かさに慣れそして冬
ドラマ始まったホームが遠去かる
旅まぐら浮き世の旅もあと少し
ダム底に眠る伝説掘り起こす
ソクラテスの妻でこのまま逝くつもり
鬼伝説守り伝えて日々暮らす
七輪で秋刀魚しんなりポーズとる
この禿！ようやく慣れた禿頭
薬より口が慣れてる酒二合
一人旅伝説ありそな道祖神
飽食の舌に優しい干菜汁
向日葵の回りで蝶のフラダンス
堂々とおやじ座りの猫のひげ
カタカナはいらぬとろろめしでよし

芳生 一 吞 ひとし 小とみ 吹喜 冬道 龍馬 京子 重虎 規子 洋子 黙人 慕情 美鈴 柳子 初枝 風来坊 きよし 隆樹 英子 ふさゑ 花峯 氏加子 井蛙

沖縄でヘリコプターが又落ちる 一花
ラヴレターがわりに焼き芋を渡す 霜石
薄墨の海でもがいてバラバラの手と足 和香子

川柳塔唐津(佐賀) 仁部 四郎報

亡妻も防災訓練位牌所持
初産は見事男児の名に応え
鯊釣りは正月用の雑煮出汁
タラレバの話はしないお元日

川柳塔なら 大久保眞澄報

友寿退社ちよつとだけ焦る
まだ少し残る頭の髪を撫で
いっぺんに二つも指示を出さないで
本心をつかみきれずに焦る恋
焦る程的がふたつに見えてくる
終活がいまだできぬと焦る俺
あの世へはあせらず行くよ待たないで
余命表が急ぎ立てている拉致家族
焦る程に貧乏神が離れない
免許替え認知テストに四苦八苦
欠席の仮病に見舞来たという
焦るほど時の女神はイケズする
弱点を隠すあこ髭なでている
靴だけを光らせているボクの見栄
ブランドに凝ってローンに追われてる

恭昌 崇明 眞澄 惠美子 甚之市 優 美代子 貫一 辰雄 倫 よう子 薫 比呂志 勝弘 萌子

孤独死は避けたい引き際の美学
程々の見栄が可愛い彼氏です
外交は見栄と本音の探り合い
捨てられない五欲ボーイと捨てた見栄
せめてもの見栄だ立派に負けてやる
見栄張って生きた老後の細い影
今も尚見栄張るクセが抜けきれず
秋の音がゴシゴシ借家の窓ゆする
ゴシゴシと消しあと残る子の葉書
ゴシゴシとコツコツ磨き運が向く
ごしごしと洗えど落ちぬ過去の澱
結跏趺坐ゴシゴシ洗う身の芥
黄昏が酒や酒やと呼びに来る
黄昏の背なを輪廻がそつと押す
黄昏れて寄り添う者は妻ひとり
残照がひとときわ深くする折り
黄昏の光の中にある孤独
黄昏の選手に光るいぶし銀
たそがれの海へのちをきらめかす
刻は黄昏ひたすら人の恋しがり

紀雄 すみれ 和夫 堅坊 ダン吉 美智子 おたか 弥生 敬子 ふりこ 将文 成子 和之 國治 俊雄 のぶよし 百合子 賛郎 富子 理恵

川柳花の輪(大阪) 岡本 薫報

掛布団引っぱり合って秋を知る
歌舞伎町引っぱりられない歳になり
一息でろうそく消せぬ喜寿傘寿
息あらくテープを切ってゴールイン

昭好 正太郎 みちる やすの

ため息をつくのやめてよお医者さん
大相撲息だけ拾うインタビュー
誉められて息絶え絶えで泳いでる
息とめてのぞかれてる胸の内
息が合い磁石のように隣居る
言い訳の言葉ゴメンに入れ替る
息苦しくて少し離れる通夜の席
日本語を引っぱり廻すカタカナ語
泰子

川柳塔すみよし(大阪) 森松まつお報

最下位は監督だけのせいでない
1人よりチームを組むと強くなる
頭数足らぬ時だけチーム入り
青空とチームになった紅葉見に
最強の妻が率いる家庭内
チームでは嫌われていた実力者
ライバルのチームに味方燃え尽きる
家計簿の雑費わたしのエトセトラ
雑学で今の立場を手に入れる
雑居ビル一人で仕事でも社長
アバウトな娘の婿は几帳面
晩節を汚さず雑に出来ぬ日々
気が急ぐが頭と体ついてこん
決着を焦る余りの大譲歩
眠れない季節はずれの風鈴で
俺の奢りやと出したカードは期限切れ
昌紀

城北川柳会(大阪)

近藤

正報

夜が明ける宿敵吉良が見つからぬ
知恵絞りとやつと一句を捻り出す
知恵盛り可愛い孫の得意顔
したたかに生きる女の黙秘権
とっさの知恵前頭葉がフル稼働
知恵のあるところを見せて憎まれる
もう齢で力はないが知恵はある
まつお
裕之
廣子
(矢)五月
満知子
重信
(奥)五月
博
榮子
杵香
肇
義昭
勝弘
野鶴
北舟
郁夫
洋志
一歩
志華子
捷二
たもつ
修
賢子
高志

竹原川柳会(広島)

古田

太虚報

アドリブで我武者羅生きてきた戦後
納骨の読経虚しい蟬しぐれ
折鶴に九条護持の祈りこめ
独裁より時には悪い多数決
寂しさで虚しさ同居仲が良い
安らかな微笑み醸す阿修羅像
友の輪に包まれ癒やす胸の傷
虚しさを埋める希望と言うひかり
おーいお茶妻の遺影へ独り言
法律で決めても六法裏がある
慰めの言葉虚しい被災の地
虚しさはサブリメントで補えず
ボクシング無理はあかんと親心
鉦太鼓虚しく散った子選落ち
決め所読み違えて勝ち逃がす
松茸を焼いたかおりがなつかしい
焼け跡に佇む孤児を忘れまい
鉄を焼く農にやさしい鍬を打つ
焼杉の下駄金婚のいいリズム
同業二人焼印を押す遍路杖
虫が好き子どもはみんな博士だな
秋の虫静かに歌い筆すすむ
虫の音もいつしか消えて秋深む
昆虫館孫はダツシュをして行った
寛昭
縣作
実
和夫
弘委智
武彦
満洲夫
朝子
星雨
克己
堅坊
あさ子
千恵子
俊雄
正
蘭幸

疳の虫下るすちりげのヤイト跡
弱虫に徹する芯の強い奴

親の恩子の恩受けて今日も生き

新米へ先祖の恩は温かい

丹精の紅葉まつ赤な恩返し

差し伸べてくれた師の恩道なれば

記念樹も招待をする謝恩会

にんげんが恩のかたち丸くなる

恩の名を貰い兵器を愛するか

曼珠沙華空の高みと黒揚羽

少しだけ気が強くなる母だもん

ちよつと来てすぐに帰った赤トンボ

広辞苑と拡大鏡も買いました

骨壺を抱いて秋の空高く高く

神様はお留守虫が鳴くばかり

新米がキラキラ今日もありがとう

南大阪川柳会

松岡

落書が真実語る奥深さ

落書の醍醐味覚え二度三度

振り向いた壁にきょうろすなと書いてある

国宝の落書だけは許さへん

自分より大きな餌を蟻運ぶ

景品が気に入る高い化粧品

夜の街疑似餌につられフーラフラ

食べ残しふと難民の子を思う

弘子

宣之

規代

笑子

幸子

栄香

昭紀

寛

輝恵

比呂子

歩美

栄恵

初音

厚子

貞子

史子

篤報

晴美

弘委智

克己

栄子

ルイ子

ひさ乃

恭昌

一步

還付詐欺疑似餌の針が見えないか

諭吉さん一番旨い餌だろう

いいところで沈む夕日待つ二人

一発の嘘に沈んだ快男児

紅葉の中にどっぷり露天風呂

泳げない大小問わず船嫌い

おでん鍋好きな大根鍋の底

浮き上がるためにしつかり沈みます

ほんとうに日本沈没しそうだな

同想句一枚上手また沈む

気の沈む時はユーモア句がくすり

腹痛を沈黙させた陀羅尼助

冷蔵庫空エッセイもはかどらぬ

エッセーにこめ晩秋の相聞歌

ペン先でエッセイストの立ち泳ぎ

素晴らしいエッセイ集だ日記帳

その日の事エッセイほどに書く日記

アレンジでがらり軍歌になる国歌

婆ちゃんをがらりと変えた赤い紅

借り猫が飲めばがらりと虎になる

体重ががらり変わったOP前後

クラス会がらり経年劣化して

恋をしてがらりと変わる句を捻り

遺産分け兄弟姉妹鬼の顔

ジキルからハイドに変える酒五合

俊雄

楓楽

修

益子

直子

和雄

忠昭

郁夫

勝弘

秀子

あや子

ばつは

柳右子

直樹

柳伸

篤

シマ子

真佐子

あさ子

いさお

なぎさ

東風

弘子

実

国和

人を見てがらりと変わる二枚舌

川柳ささやま(兵庫)

北澤 稠民報

好きな趣味刻を忘れる秋夜長

老人にマイナンバーは長過ぎる

見逃すな平凡にある幸せを

打つ手なし困ったときの神頼み

雨続き部屋の洗濯威張ってる

目を閉じて日記へ漸く動くペン

人生は喜怒哀楽の物語り

寒くなり着る物選び困る朝

人生の台風もはや通りすぎ

ストレスは心のホコリ掃除する

川柳茶ばしら(愛知)

関本かつ子報

クラシックいつも流れている牛舎

クラシック聴かせて赤子寝かしつけ

割り込んだ狭い座席の面の顔

ぬるま湯に浸っていたと知るひとり

ブランドの服飾について使う

初乗りの新車も親のすねかじり

川柳同友会みらい(鳥取)吉田 陽子報

同総会昔の顔の探し合い

空っぽな私器でこまかして

中国に捕られ小さな秋刀魚焼く

志華子

かほる

哲男

稠民

眞由

開子

幸子

照代

美智子

善輔

さゆ子

遡行

三樹夫

まみ子

美千代

雅美

かつ子

みどり

真帆

澄子

奔放に繁つていいぞ記念樹よ
喧しい夕立だけどホッとする
背丈越す子の成長を認めよう
腹立てるうちはまだまだ負けと知る
青空へ遠出しようか秋の地図
無農薬雑草ばかり背伸びする
人間に戻れないほど毒浴びる
雑草が繁ると私ふさぎ込む
偏差値で人の器は量らない
どんぶりの包容力に温まる
吉報にさほど嬉しくない二度目
生きるコツ時々歩く向き変える
大切なもの確かめてギアチェンジ
水際を信じて繁る葦であれ

八尾市民川柳会(大阪) 中園

人間が掟を破る温暖化
盲目に相思相愛する傾斜
片時も腕が離さぬ亡父の数珠
使うより人はスマホに使われる
掟など無いよと笑う猫が居る
四六時中妻の目光る休肝日
傾いて凭れ合うてる杖と杖
問われても計り知れない愛の高
わずかの間目も離せない老介護
連れ立って行こうよ冥土までの旅

三郎 和之 安子 七絵 和郎 葵 華蓮 和代 美恵子 菜美 章子 陽子 游子 公弘 清報 紀雄 高鷺 朋子 両文 華 常男 寿之 慶子 壽峰 惠

掟をちよつとはみ出すほどの恋がいい
西陽またぐらりと冬に傾いて
振りかざす掟に背中向けている
まだ温いうちに夕陽を折り畳む
人生かし人を殺していく掟
長柳会(大阪) 辻村 ヒロ報
老いの坂飲んでないのに千鳥足
両腕に家族の幸せぶら下がり
二日酔いもう飲まないはその日だけ
わだかまりを捨てて抱き合う仲直り
人生は愛憎和睦のつづら折り
だんじりの男晴れやか屋根に舞う
アラートの音忌まわしい過去が舞う
草茂る空き家を持って眠れない
嫌みなどどこ吹く風か勝手耳
ごめんねはお酒の力借りてから
終焉を目差す残り火あとわずか
親友だから境界線を死守してる
隠さずに言えていっしょに泣ける友
救いの手そつと差し出す無二の友
親友が妻争奪の恋敵
乾杯のビールに酔って恥をかく
やけ酒で二合で酔える苦い夜
二合では足りぬ五合は多すぎる
名優の余韻にひたり席立てぬ
あつち湯気のたつ芋孫と吹く

耀一 あかり ダン吉 かこ 欣之 ヒロ 美子 もこ たけし 敬二 登美子 光弘 和子 洋二 ふみ 靖博 孝代 隆彦 淳司 ゆき 由夏 直樹 和代 弘美

赤飯の湯気漂つて祝いの日
熱かんとおでんの湯気で屋台酒
湯気もうもう温泉卵が人を呼び
混浴の湯気の向うに目を凝らす
混浴は身体に良くない出られない
湯上りのうなじに惚れた旅の宿
方言が飛び交う宿の湯気の中
銭湯の湯気に溶け込む外国語
湯めぐりの下駄音たてて踊る恋
岩美川柳会(鳥取) 山下 節子報
御日様を拜んで決める農作業
拝むけど聞いてくれない山の神
もみじの手額で拝む七五三
どん底の暮らしに笑い失せてゆく
心配をプラス思考にするお酒
美人です薄命かなと心配だ
白寿まで生きると決めて煮干食う
満足のいくまで夢を追う覚悟
嫌な顔ひとつ見せずにいい覚悟
撲るとアワビすなおに剥けてくれ
心配が消えて眠りが深くなる
人生は覚悟覚悟の道だった
拝まれて貸したお金は還らない
跡取りと言われて育ち覚悟きめ
神無月神は留守でも拝みます
度が過ぎた心配性もうとましい

幸子 英美 明孝 純風 正博 三和子 正美 旅人 重忠 清信 一平 一瑤 一翔 茶子 公子 美恵子 蟹郎 たぬ 菖子 幸安 敏子 振作 真理子

つまずいた石にも感謝手を合わす
声たてて笑うことなし独り住む

彰夫
節子

ブラザ川柳(大阪)

梶原

弘光報

大凶を引いて胸張る空元氣
酔うほどに妻の仕草が色っぽく
酔うてるかいや酔うてないつまずいた
酔うほどにまた武勇伝語る癖
ブルグラス5弦楽器に酔いしれる
混合で湯あたりをする初な人
お凸から湯氣を立ててた鬼瓦
湯のしした毛糸で編んだ一帳羅
塾婦り豚まんかぶるあどけなさ
娘十八湯氣立ち昇る風呂上り
迷想を坐禅の杖が叱咤する
面だけで雑念払い仕止めたり
目に染みる残秋の赤白き峰

あかつき川柳会(大阪) 山本

昌代報

一志
たもつ
穩夫
冬のト
万作
篤
恵美子
シマ子

糞虫に言い分があり揺れ止まぬ
友が逝く呼べど返事のない浄土
人も柿も八年経てば熟す秋
睦まじく渋柿吊るす優しい手
街の灯がとてもし恋しい旅三日
逃げ道を隠した街灯のいけず
地に還るいのち儚い緋のもみじ
はいはいと応え儚い自尊心
青春の夢を奪った殺人鬼
日に映える紅葉の主張聴いている
テロ難民私の主張どこに言う
對話こそ世界平和へ続く道
人生の儚さ知った通夜の席
泣きをした男が二人いる
街の灯にダンスステップチャップリン
街灯で財布覗いて三代会
儚いネノが言えない核廃止
儚いはいかない一〇三歳の爺が言う
ドラフトの陰で指名の無い球児
眼を入れるだけの自画像父が逝く
人間も魚も流す血は赤い
侮れぬ三歳児にもある主張
ゴルフなら仕事済ましてからにして
人の恥部見ても街灯知らんぶり
全面降伏妻の言い分受け入れる
蟹ツアー松茸ツアーまた夢に
きのうまで共に飲んでた友の逝く

廣子
秀之
善子
和子
榮子
瑠美子
浩子
一文
清
紀乃
一歩
一行
壽峰
信二
ひろ介
堅坊
紀雄
鈍甲
久美子
ばつは
茶助
福貴子
和雄
高鷺
克己
英夫
朝子

翠洋会(大阪)

佐々木清作報

天皇さま口説かれたお目さすがです
能書きの説明読んでるルーベ
先代に説教されている和尚
認知疑惑説明不足で怒る民
説法をきいた帰りは縄のれん
説々と医師の説明覚悟する
家計調査ベットの食費多すぎる
浮気調査知らぬが花と止めにする
森友も加計も調査うやむやに
逃げたとてせいぜい母の掌
逃げ切れない居直つてから新天地
タッチの差スリと逃げる青い鳥
現地を逃げてスマホに潜り込む
妻の目ががんじがらめで逃げられぬ
大谷君二丁拳銃大リーガー
個人情報ここから先へ踏み込めぬ
痛いのは我慢我慢と担当医
視野少し変えると思える秋の空
母の煙まっすぐ父に逢いに行く
平均寿命越えれば後はおまけだよ
ゆず酒の甘さとりと疲れ取る
金婚の湯飲み茶碗にある絆
淋しいと句会に出てもなお淋し
ピアノ弾く男の指に惚れ直す
お隣の騒音でしかないピアノ

敬子
志華子
眞澄
善之
良子
紀子
楓楽
蕉子
公平
桃花
舞夢
弘子
すみ子
げんえい
和夫
希久子
千歩
昭
理恵
日の出
ふりこ
満作
みつ子
雅美
恭昌

名曲に耳が恋した喫茶店

捷也

川柳あまがさき(兵庫) 大浦

初音報

来年の花芽作って落葉舞う

菊江

野党名すつかり変わる掃除され

富夫

朝一番犬が散歩をせがんでる

柳明

貧乏性で庄助さんが続かない

公子

朝一杯健康願ひ白湯を飲む

初音

足痺れ立てず躓って躓り口

英坊

乾杯が発車の合図バスツアー

健二

茶飲み友達日々ゆれます恋ころ

紀華

ハワイから帰宅お茶漬け食べて早よ寝よう

こみつ

朝は白夜はピンクの葉飲む

花門

ゆつたりと心をいやす日本の茶

千賀子

後期になりすつかり無沙汰論吉はん

修平

朝食をたつぷり食べて元気です

章子

細胞が減って誤作動してる脳

りこ

また消えた昭和が灯るジャズ喫茶

紀恵

またかいな靴履いてからさがす鍵

雪菜

栗ごはん母の茶碗は栗少し

宏造

ナイターがないから秋の夜は長い

正和

終電車すつかり剥げた厚化粧

ひろ介

逃げ道に釘抜き持って立つ閻魔

歌留多

地球儀に乗った夜明けの観覧車

靖鬼

逃げ腰の息子にローンの音がする

真桜子

秋夜長茶のみ友達募集

ヨシエ

心労をほぐしてくれる秋桜

美籠

お布団でゴミの車の歌を聞く

耕治

惚けた百足次出す足がわからない

祐康

オハヨウと言えはそこから朝になる

ひとみ

妻は私に私は妻にある不満

かずお

ほたる川柳同好会(大阪)水野

黒兎報

逃げ口をつくって叱る名上司

則彦

出口など無理に探さぬこの浮き世

堅坊

何回も編み変え着せた古毛糸

順子

ユーモアを編みこむ話術さすがプロ

郁子

四苦八苦子のため夫がケーブ編む

正子

模様編みダメ今声を掛けないで

純子

いっばいの言葉紡ぎ辞書を編む

黒兎

ポケットに今年のゴミがかなりある

美佐子

百寿過ぎかなり小さくなった母

奈津子

戦中戦後かなりの道と今思う

桂子

二合あけかなり飲んだとおちよ伏せ

一弥

かなり良い俳句なのだが季語二つ

信男

物忘れ進みかなりのシヨック受け

柳童

老いかなり進みながらも自立の身

久子

鳴り止まぬ火災報知器午前二時

春代

富柳会(大阪) 関 よしみ報

海と指切り辛くても死にはしないと

慶子

情報的大海で溺れて四苦八苦

清子

情報的大海で命の立ち泳ぎ

朋子

胎動に感喜の極み母の海

壽峰

風化する手前で慕情抱きしめる

高鷺

風さえも他人行儀で吹く都会

常男

拉致された海は今でも鉛色

武人

秋の風バックミラーの朱夏を追う

恵

正論は妻にとつてはただのグチ

一文

先生の朱に一本で立ちあがる

あかり

細くなる影はもうひとりの私

かこ

泣き終えた女のなんと強いこと

奏子

逆光の漁船ロマンは海の宿

寿之

ストレスを貯めてスリムとは無縁

アキ

焼け具合朴葉を開ける秋の幸

よしみ

漁火になる父さんの手へ夜食

欣之

私という器でわたくしを生きる

森子

川柳塔さかい(大阪) 内藤 意彦報

月夜には池を巡って拾う秋

唯教

泣けばよい太陽はまた昇るから

憲彦

苦も薬も流れのままに長い道

志津子

入札を巡る疑惑も何処へやら

八千代

七坂を巡るひとりの命に触れる

敏治

悶死するひとつの命ききぶりも

みつこ

ぬるま湯に悶え苦しむ民主主義

ひろ子

蜘蛛の巣で蝶の悶えている哀れ

ひろ子

その病きつと悶えのしこりから
悶えさすあなたの愛で子沢山
死にかけて悶えだしたら酒を呉れ

世紀子
光雄

悶え苦しむ一夜明けたら嘘みたい
悶えから抜けて四五回深呼吸
見聞えて赤く染まった曼珠沙華

舞夢
清

テロに核きつと鯨も悶えてる
風任せそんな諦め方もある
任せると渡す老舗の破れ傘

和夫
扶美代

会計を任せてくれという男
若返り任せた途端採めだした
おまかせの寿司で目玉が飛び出した

玲子
恵

「幹事一任」発言役はいつも僕
抜擢の二文字が重い新任地
任せなさい財布の論吉声挙げる

誠一
蕉子

どの扉開けるか子供の意に任す
親が留守兄ちゃんらしい顔になり
壁ドンをされて悶える夢の中

五月
さくら

北斎の悶え仕上げた素適な絵
腰痛の悶えかき消すストレッツ
割り切つて暮らす悶える事もなく

澄空
廣子

トランプに悶えすがたラ致家族
きつちりと守り固める狎犬だ
几帳面真つ直ぐすぎて理屈っぽい

富夫
健吾

器用なお方マナイタのタコ料理する
としお
妙子

雅美

菊咲くもまだ傷癒えぬ罹災の地
気持ちだけマイナスされた領収書

雅美

倉吉川柳会(鳥取)

竹信 照彦報

川柳大阪

山崎 珠生報

戸は閉める心の窓は開けておく
独裁に社会の窓が狭められ
老いてなお心の窓は広々と

けいこ
次男

窓口は会社の顔々笑顔でね
窓明りあれが我が家と急ぐ足
夕立が窓をあわてて閉めさせる

智恵子
康子

ぬくぬくと母の形見のチャンチャンコ
陽をあびたぬくぬく夜具にくるまる夜
ぬくぬくと地球の涙雨に泣く

風露
日出子

ぬくぬくと鍋を囲んで火照り顔
老兵がシベリア想う掘り炬燵
ぬくぬくと冥に添えたサブライズ

恭子
萩江

削いで削いでどほとけがひとつ
趣味多忙嫌いな事は削ぎ落す
笑つて削ろうこの世の持ち時間

美知江
由紀子

削ぎ取ればマクロの骨は身沢山
愛犬と巡回町のゴミ拾う
悪知恵が良く巡るからくたばらぬ

萩江
野蒜

古くなり前進巡る血ものらしい
百円バス巡回すると遠まわり
地球儀を廻して巡る世界旅

萩江
野蒜

熱燗におでんでグツと至福時

萩江
野蒜

熱燗におでんでグツと至福時

萩江
野蒜

熱燗におでんでグツと至福時

萩江
野蒜

熱燗におでんでグツと至福時

萩江
野蒜

熱燗におでんでグツと至福時

萩江
野蒜

飛び魚の刺身大好き絶品だ
安部さんの言葉の海は謙虚だけ
海鳴りが復興急げと泣いている
希望の灯海を照らしてくれている
海だつてミサイル嫌い平和好き
ふたりして歩いた海辺今ひとり
先頭に並ぶ選手に見る闘志
言わせた口説き文句を書き並べ
焦つてもならぶしかない駅トイレ
長所短所ならべあなたと競い合う
人情のあつい古里思いだす
四十年賞罰なしで無事勤め
政界に平凡な人居るか
波瀾万丈そして余生は平凡に
平凡に生きて来れたのは奇跡かも
平凡な暮らしを捨てて原発禍
平凡の幸思い知る被災の地
平凡がいいとバブルの紳士達
朝メシが旨い側には妻がいる
野仏に託す小さな願い事
山風が鳴らす地蔵の風車
お地蔵さん今日も良き日とてをあわす

川柳藤井寺(大阪) 鴨谷瑠美子報

早起きし投票箱を点検す

勝弘
紀雄
かよこ
芳香
美世子
昌代
朝子
五月
わこ
一歩
和
福貴子
克己
俊雄
まつお
今万紗子
美籠
珠生

真

合区されおらが先生いなくなる
級長の選挙で館が配られる

選挙後は元にもどっている猫背

国会が彷徨う日本の行方

さすらいが始まる臍の緒が切れた

さすらいの旅の途中の現在地

さすらいの旅にギターを抱いて行く

さすらいの果ての老後をおもいやる

人生はさすらいの旅今が在る

九条を守ればさすらいの事はない

選挙なら今行きました電話口

嫁ぐ娘に母が伝える梅仕事

梅干しが今年も届き子は安堵

梅干しに昭和の悲喜が詰ってる

恙なく梅干しばばになりました

炎天下梅干す母の丸い背な

梅干湯に叱られている二日酔

西宮北口川柳会(兵庫) 藤井 宏造報

父の趣味七面鳥もチャボもいた

恩讐の彼方は来るか少女像

褒めもせずけなしもしない菊は菊

赤トンボ姿溶かした大落暉

ぶつぶつと言わぬ世話役皆が好き

もつれ糸ぶつぶつ切ってまた繋ぎ

ぶつぶつの訳はこれですシャツに紅

ぶつぶつと言いつつ家事を手伝って

信二

六点

光男

美代子

フジ子

扶美代

まつお

ヨシ枝

喜代子

紀雄

瑠美子

育代

キーキ

一文

みつこ

いさお

一步

ぶつぶつと妻の小言はエンドレス

リハビリが妻への感謝膨らます

生きざまを見せて養う親心

今さらと思うが使う養毛剤

母子手帳わたし一人で育てます

池の鯉客の撒き餌で養われ

沈黙は金ころ養う処生術

掌に鬼も養う仏さま

お出掛けに小さな傘とアメちゃん

年金と医療保険で持つ命

アンパンのヘソに野心がひとつある

逃げ道に言葉の保険かけている

賢いな火災保険で焼け太り

リハビリで流した汗は嘘つかぬ

修身の保険満期は子か孫か

百万弗の保険かけてるうちの猫

保険にも入れないけど生きている

嫌な奴三割負担自慢して

息子へは保険と思ひ貢ぐ金

生きている保険としたいこの笑顔

リハビリで笑う稽古もしています

リハビリより夫がさすると動く足

肉筆のメモに一億七千万

私を養う年金と言う絆

鍋だけは俺が奉行で妻家来

養老の気風薄れる高齢化

武彦

正彦

順子

わこ

千代

宣子

紀華

和宏

ひとみ

キヨミ

野鶴

敦子

光久

宏造

光子

いわゑ

一徳

勝弘

みよし

弘委智

哲子

利子

伯備

千津子

邦男

秋果

川柳塔まつえ吟社(鳥根)相見 柳歩報

柳歩

あきら

柳歩

ひふみ

邦代

紗季

美智子

哲子

輝山

ゆき

草庵

知恵子

俊人

瑞子

涼美

聡山

芳子

孝子

桂子

雪代

みちを

ひすい

朋子

徳利

弘充

とも子

赤い実を食べてしまった15歳

寿代

サークル檸檬(大阪) 松尾美智代報

このごろは夢にも出てはくれぬ母
宴会では寡黙な人もよく騒ぎ
寂しがり屋愛をあちこち撒き散らす
宴果て鬱を抱えて帰る途
にぎやかな宴のあとの静寂さ
祝宴の真ん中にいる果報者
五年もの日記を贈る喜寿の宴
ささやかな宴が絆を強くする
後悔の波に溺れる時がある
スマホから洩れる時代を嘆く声
多忙とは忘年会のことらしい

房子 智恵子 久仁雄 昌紀 光久 たもつ 加お里 美智代 蕉子 希久子 楓楽

豊中もくせい川柳会(大阪)

歌留多

老いの耳熱き心の糸電話
菊の香と線香で満つ秋の部屋
暗闇の行く末匍匐する余生
あれこれと出来もせぬのに気の多さ
自分にもたまにはうわさとんでくれ
泣きぐずり愛し我が子のアツピール
起き抜けの鏡の中に母の顔
蛾も我も火に飛びこむは誰のせい
とんで来た泣き顔両手で抱きしめる
冬の海だあれもない風の音
女はいつも翔びたい朝を持っている

歌留多 求芽 健二 健三 武彦 多美子 真理子 美佐子 ヨシエ さらり

保育園うるさいなんて言う世相
ひかえめと言うがいいわけはいいわけ
K点を越えて明日の夢開き
ほろ酔いで素直に聴けるお説教
人生はすべてに文化纏ってる

堅坊 久子 野鶴 武臣 玲子 耕治 正彦 美智代 見清 則彦 直樹 黒兎 雅美 千鶴子

むさくるしい髭を生やして文化人
寒さには勝てぬいじけた顔になる
小さい秋見つけた野菊咲いている
昔は夢今は過去だけ追っている
口笛を吹けばゆつたりする余生
平均寿命さあ楽しむぞロスタイム
雑魚だけどいつかはきつと海へ出る
白色に戻し私を再始動
騒ぐ子ら孫と思えば気にならず
とんではしいあなたのために羽根を織る(永玲)

異文化に触れてはじめて知るところ Tシャツの波打つ胸にある若さ

川柳さんだ(兵庫) 田中 童子報

葉子 宏子 玲子 千鶴子

うつむいては犬さえ見てくれぬ
人情のわからぬ犬に嘔みつかれ
ATMで犬を抱いている赤い爪
本当は夫に言いたいお手と待て
家族みな犬の命日なら言える
ここはワンワン父ちゃんのへそくり
うちの犬俺が家族と認めない
情熱をうまく包んだオムライス

堅坊 久子 野鶴 武臣 玲子 耕治 正彦 美智代 見清 則彦 直樹 黒兎 雅美 千鶴子

寒うおす息吹きかけてペン握る
大リーグ挑戦すると二刀流
生き方に情熱込めた禅を聞く
情熱を燃やし悔いなき鉄の先
つばを突くマッサージです効いてます
マッサージ代わり番この夫婦仲
朝ドラは「つづく」あるから明日も見ると
秋雨が続く値上がり鍋野菜
このまんま耐えて尽してくれ妻よ
八十年かかって出来た顔がこれ
紅葉狩り疲れ後日にじわじわと
じわじわと地球蝕む温暖化
じわじわと人工知能が職奪う
朝帰り真綿がニヤリお出迎え
あら私ほんのり酔って来たみたい
あわじわと家計に響く野菜高
善人の仮面外せず肩が凝る
秋冷の菊はしつかり咲いている
わたしたちナイフとフォークそんな仲
秋を焼く茄子と秋刀魚と夕焼けと
紅葉の裏から寒波尻尾出す
南無三宝前歯で蛸を噛み切れた
八十のわたし恋人募集
一万本バラを貰えばそりゃ好きよ
加速する刻止まれと天仰ぐ
父の背と母のひざとのありがたさ

美籠 正和 えい子 迪 恭子 隆彦 健彦 ひろ介 祐康 好文 つな子 真由 健二 義徳 ひとみ 俊昭 武彦 千津子 光久 野薫 哲夫 花門 厚子 ヨシエ 優子

父母に一目会いたい異国の地

雅尚

岸和田川柳会(大阪) 石田ひろ子報

パンデミック菌の家族が大はしやぎ 信二

また逢おね鼻唄が出る帰り道

ふさゑ

大家族仕切った母も今一人

隆昭

大家族にあこがれ一人娘嫁く

一子

葬終えて励ましあつてゐる家族

愿

終戦後社会を変えた核家族

喜代志

子が嫁ぎ夫婦二人のお正月

和美

もどかしさに苦惱苦悩の拉致家族

カズ子

四十年一刻も急ぐめぐみさん

康信

中一で初めて父に勝ちました

清

横綱に変化相撲は似合わない

忠太

大阪の街に春呼ぶふれ太鼓

みつ江

子の画布に親の折りをそつと足す

大輔

もつと汗流して折つたらどうか

ダン吉

正月と祭に揃う四世代

義泰

タイプでは無いのに何故か馬が合う

珠子

尻尿葛そんな貴方がタイプなの

白水

後悔を数えています十二月

信子

お祈りを済ませ湯豆腐浮いてくる

勝彦

当りあれバラ10枚を折る暮れ

心

華やかに生きてこつそり逝くつもり

ひろ子

六甲川柳会(兵庫)

市坪 武臣報

義理に耐え義理に頼つたこともある じろう

あの世まで消せない傷を二つ三つ

洋次郎

腕よりも優しい医者に通う妻

盛夫

常連に医院で会わず氣に掛かり

浩司

イケメンの担当医に脈乱れ

妙子

我が家には妻という名の名医いる

廣光

玉音のしみた畳の過去を消す

ひろし

振り向けば消せない過去が睨んでる

憲三

いざ秋刀魚大根おろしな不幸

邦子

山の色見ているだけで秋に酔う

としお

後期高齢グチはソフトに嫌われず

弘

早よう見に行かん火事が消えるがな

武彦

月となら悲しいことも話せそう

武臣

秋明菊月を間近に引き寄せる

和宏

晴れ渡る月の明かりが心澄み

礼子

りハビリへより添い歩く秋月夜

道子

お月さん二人の影を近づける

正彦

散歩道月はだまつてついて来る

美穂

月曜日になると早起きランドセル

利子

義理がたい友に救われ安堵する

芳江

昭和史を繰れば長屋の義理人情

美恵子

クラス会医者のまわりは人集う

敏夫

断捨離に義理はギリギリ取っておく

和郎

義理人情連名で書くのし袋

千賀子

成就するまでが楽しい爪を研ぐ

光久

川柳ねやがわ(大阪)

籠島 恵子報

歯車を一服させて歯を磨く

かすみ

運命が大きな音を立てて来る

秀夫

二兎を追う歯車途中から狂う

わこ

秋の日が軽い身ぶりで落ちてゆく

シマ子

歯車の合わぬ会話のほっかほか

秀雄

背に負う老母の軽さに泣く介護

壽峰

屋台酒軽い命を温める

郁夫

スミーズに動く歯車には遊び

かずお

それなりに歯車合つてゐる三代

信子

シーソーに貧乏神と福の神

弘一

苦勞した母の柩が軽すぎる

星雨

過不足の無い言い訳は難しい

弘委智

マスターキー俺に任せと胸を張る

高鷲

知新減り温故頼りの歳となる

和

母さんの歯車太陽まで回す

かこ

バランスをゆらりゆらゆら千鳥足

欣之

軽やかに人を動かす札の束

寿之

双方の言いふんとつくりと聞こう

恵

人間を学ぶきつかけ離乳食

朋子

運命はどうあろうとも日日笑顔

ルイ子

きつかけは傘一本の俄雨

清

世を渡る鍵父の背に母の背に

洋

句読点入れてバランスとるページ

仁

フェラーリの誘いに乗った軽い靴

壽子

いいことが次次あつて軽い足

高志

水一滴湧いて大海へと注ぐ

賢子

キーマンになってみせると法螺を吹く

武彦

八起き目の鍵を握っていた努力

朝子

きつかけを掴めばきつと立ち直る
 歯車は合わぬが古希の夫婦仲
 団栗の想いゆらゆらやしろべえ
 苦も楽も僕を生かしてくれた運
 運命線折れて曲ってまだ達者
 バランスのとれた蚤の夫婦です
 鍵穴から聞こえてきますエンディング

祥 昭
 麗
 武 人
 茜
 あさ子
 亜 成
 恵 子

第387回 ときせん賞

締切 平成30年1月25日(木) 消印有効

選者 大野風柳 森中恵美子 小島蘭幸

中居杏二 徳永政二 矢沢和女

作品 雑詠2句(未発表作品)

選句方法 無記名清記の上

選句1句ごとにその合計点で順位決定

発表 時の川柳誌 平成29年4月号

(ときせん賞1名)

準ときせん賞2名・佳作7名

応募方法 応募用紙または便箋に作品2句、

住所・氏名・電話・所属結社

時の川柳社の誌友、誌友外を記入

1000円(定額小為替・切手不可)

応募先 〒775-0001

加古川市野口町水足1160

岡田 篤 宛 時の川柳社

平成30年 業務分担表

平成29年11月現在

	常 任 理 事		
総 務 部	島田 誠一	久保田千代	
企画事業部	片山かずお	石田 隆彦 藤村 亜成	久保田千代
編 集 部	木本 朱夏	江島谷勝弘 内藤 憲彦	大久保眞澄
句 会 部	居谷真理子	石田 隆彦	内田志津子
同人誌友部	江島谷勝弘	鶴田 遠野	吉村久仁雄
渉 外 部	藤井 宏造	松原 寿子	
会 計 部	内藤 憲彦	鈴木いさお	
発 送 部	吉村久仁雄	江島谷勝弘 中川ひろ介	藤井 宏造
事 務 部	森松まつお		

◎ 太字は部長 (部長以外は50音順)

◎ アンダーラインは新任者

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
豊 中 もくせい 川 柳 会	15日(月) 13時50分締切 鍵・進む・軽い・自由吟	豊中市立中央公民館 3F 阪急宝塚線「曾根」駅 徒歩5分 〒569-0073 高槻市上本町5-26 初代正彦
川 柳 さ ん だ	16日(火) 13時30分締切 集団・数える・コメント・水の泡 自由吟	キッピーモール (JR三田駅前) 〒669-1545 三田市狭間が丘5-10-19 谷 祐康
川 柳 たちばな	17日(水) 13時45分締切 印象吟・宝(互選)・聞く・自由吟	立花公民館(尼崎市塚口町3-39-7) TEL06-6422-6741 〒661-0953 尼崎市東園田町3-49-5 藤井宏造
川 柳 塔 すみよし	20日(土) 14時15分締切 気合・予想外の事・あける	住吉区民ホール 〒580-0026 松原市天美我堂3-130-2-404 森松まつお
岸 和 田 川 柳 会	20日(土) 14時締切 戌(犬)・解す・穏やか・オープン	岸和田市立福祉総合センター 南海電鉄「岸和田」駅東へ5分 〒596-0076 岸和田市野田町2-13-19 中岡香代
川 柳 塔 みちのく	20日(土) 17時締切 スタート・響く・白	弘前市御幸町13-1「大成小学校地域交流室」 TEL0172-36-6614 〒036-8275 弘前市城西1-3-10 川柳塔みちのく事務局 稲見則彦 宛 TEL0172-36-8605
川 柳 ねやがわ	21日(日) 13時締切 走る・開運・おいしい	寝屋川市 市民会館 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
川 柳 藤 井 寺	21日(日) 14時締切 饅頭 共選	藤井寺市生涯学習センター・シュラホール 3F 近鉄南大阪線「藤井寺」駅下車南へ徒歩10分 〒583-0007 藤井寺市林5-8-20-303 鈴木いさお
南 大 阪 川 柳 会	22日(月) 18時30分締切 うきうき・よっしゃ・計画・挑む	大阪市立住まい情報センター 5F 研修室 地下鉄谷町線・堺筋線「天神橋6丁目」駅③号出口 〒540-0004 大阪市中央区玉造1-16-13-304 前たもつ
はびきの 市 民 会 川 柳 会	28日(日) 14時締切 哀・輪ゴム・スリッパ	陵南の森公民館 近鉄南大阪線「高鷲」駅下車 北東へ徒歩10分 〒583-0864 羽曳野市羽曳が丘1-11-8 徳山みつこ
川 柳 ふうもん 吟 社	28日(日) 13時30分開場 自由吟・付度・まさか・綻び	開発ビル 2F 〒689-0202 鳥取市美萩野2-171-3 中村金祥
京 都 塔 の 会	29日(月) 14時締切 スリム・声・わざわざ・席題	京都ハートピア 地下鉄「丸太町」駅⑤出口すぐ 〒607-8231 京都市山科区勤修寺堂田70-16 TEL 075-591-0424 榊本宏子
和 歌 山 三 幸 会 川 柳 会	29日(月) 13時15分締切 新しい・声・二人	和歌山商工会議所 4階 第3会議室 〒640-8570 ニュース和歌山編集部 「和歌山三幸川柳会」宛
川 柳 あまがさき	休 会	尼崎市女性センター・テレビエ 〒661-0953 尼崎市東園田町3-49-5 藤井宏造

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所 (06-6779-3490) へご連絡ください。

1 月 各 地 句 会 案 内

(開催日順)

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
城 北 川 柳 会	6 日(土) 10時50分締切 祈る・ほのぼの・覚悟・自由吟	錦城閣 (キャッスルホテル 3F) 地下鉄・京阪「天満」駅 〒536-0001 大阪市城東区古市1-8-14 江島谷勝弘
倉 吉 川 柳 会	6 日(土) 14時締切 鯛・始まる・見込み	倉吉市明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡北栄町由良宿2072-17 谷口次男
川 柳 塔 ま つ え 吟 社	6 日(土) 13時30分締切 天・地・人・新	松江雑賀公民館 〒690-1223 松江市美保関町笠浦222-1 相見柳歩
西宮北口 川 柳 会	8 日(月) 14時締切 常識・和む・しゃんしゃん 自由吟	西宮市立中央公民館 阪急「西宮北口」駅南出口徒歩3分「プレラにのみや」 〒663-8112 西宮市甲子園口北町27-4-602 梅澤盛夫
ほ たる 川 柳 同 好 会	9 日(火) 13時30分締切 声・決める・すっかり	豊中市立蛭池公民館 阪急・モノレール蛭池 蛭池駅南ビル 5F 〒561-0813 豊中市小曾根2-4-1 水野黒鬼
川 柳 塔 な ら	11日(木) 14時締切 福・にこにこ・企画	奈良市立中部公民館 4F 奈良市上三条町23-4 近鉄「奈良」駅④番出口徒歩5分 〒633-0054 桜井市阿部787 松本方 安土理恵
あかつき 川 柳 会	12日(金) 14時締切 満ちる・梅・昆布・時事吟	大阪保育運動センター (新谷町第1ビル2F) 地下鉄「谷町六丁目」駅③番出口南へ3分(道路向い側へ) 〒581-0014 八尾市中田2-312 前田紀雄
川 柳 塔 さ か い	12日(金) 14時締切(曜日ご注意) 肩書・生まれる・折り句:ミサワ	東洋ビルディング 4F 堺駅東北西改札口から2分 〒599-8103 堺市東区菩提町5-171 矢倉五月
川柳大阪	13日(土) 14時締切 続く・陽気・売る	地下鉄・長堀鶴見緑地線 京橋駅「研修室」 〒534-0021 大阪市都島区都島本通4-11-6 山崎珠生
川 柳 とんだばやし 富 柳 会	13日(土) 14時締切 先・くっきり・自由吟	富田林市立中央公民館 近鉄南大阪線「富田林」駅南口から西へ200m 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 池 森子 TEL:FM0721-25-0603
六 甲 川 柳 会	13日(土) 14時締切 福・寒い・はらはら・自由吟	六甲道勤労市民センター 5F E室 JR「六甲道」駅南隣 メイン六甲ビル 〒657-0011 神戸市灘区鶴甲4-11-11 上田和宏
川 柳 塔 打 吹	13日(土) 13時30分締切 空気・追う・深い	倉吉市上灘町9 上灘公民館 〒682-0034 倉吉市大原637-3 牧野芳光 方 川柳塔打吹 事務局
八尾市民 川 柳 会	14日(日) 14時締切 神仏・もたもた・貸す・雑詠	八尾市洪川町・安中町集会所 JR「八尾」駅から徒歩5分 〒581-0083 八尾市永畑町2-1-7 土田欣之
川 柳 塔 わかやま 吟 社	14日(土) 14時10分締切 兼 題 = 初心・案内・裏話 課題吟 = 上	和歌山ビッグ愛 〒640-8319 和歌山市手平2-1-2 兼 題 〒649-6253 岩出市紀泉台366 藤原ほのか 課題吟 〒592-8349 堺市西区浜寺諏訪森町東2-208-5 柴原道夫

柳界展望

★「第十五回川柳マガジン文学賞」

準賞 鴨田 昭紀

準賞 無法にはまだまだ燃える正義感 (他九句)

準賞 齊尾くにく晴れなのにトトロは傘をくれました (他九句)

★「第39回出雲市川柳大会」同人成績

天位 竹村紀の治

天位 生きている限り解けない謎が好き

天位 新家 完司

天位 パトカーがないハイウエー俺のもの

天位 政岡日枝子

天位 次の日がくるから髪を洗ってる

天位 シベリアの風と闘うゴング鳴る

天位 西川 無限

★川上三太郎没後五十年

記念「平成29年度川柳研究誌上大会」同人成績

特選 平凡がいい雨垂れは四拍子

特選 川名 洋子

特選 リベンジの石一つずつ捨てていく

★「第59回神戸川柳大会」同人成績

特選 谷口 修平

特選 別荘が有れば涙を捨てて行く

特選 尾崎 一子

特選 告知され折れた心に弥陀の慈悲

特選 上垣キヨミ

★「第41回鳥取県川柳大会」は、10月28日県立倉吉未来中心小ホールで開催。同人成績

倉吉市長賞 両川 無限

倉吉市長賞 釣糸もないのに浮いている地球

倉吉市議会議長賞 倉吉市議会議長賞

大会実行委員長賞 竹村紀の治

恋しがる舌の先には親不知歯

天位 新家 完司

天位 ごめんなさい摩文仁の丘にひざまずく

天位 神さまを捜して森の樹に触れる

★「第41回寝屋川市民川柳大会」は、11月19日寝屋川市民会館で開催。同人成績

秀句 大内 朝子

秀句 八起き目の鍵を握っていた努力

秀句 富山ルイ子

秀句 運命はどうあろうとも日日笑顔

秀句 中村 恵

秀句 双方の言いふんとつくりと聞こう

★「第59回豊中市市民川柳大会」は、11月23日豊中市立中央公民館で110名の参加者で開催。同人成績

秀句 西出 楓楽

秀句 愚かな人がなるわけでない認知症

★「第37回川柳塔鹿野みか川柳大会」は、11月26日鹿野町総合福祉センターで開催。同人成績

第1位 吉田 弘子

わらべ唄聞こえず庭の柿たわわ

第2位 森山 盛桜

第2位 恋文にされて嬉しい再生紙

第4位 木本 朱夏

第4位 仲間から離れて月に吠えてる

★「第69回大阪川柳大会」は、11月29日住まいの情報センターで175名の参加で開催。同人成績

秀句 平井美智子

秀句 すみませんそれは私の夫です

秀句 藤井 宏造

秀句 日本を任せるランドセル弾む

秀句 山岡富美子

秀句 多国籍行き交い街は多色刷り

★「兵庫県川柳祭in豊岡」は、11月30日豊岡市民プラザで開催。同人成績

兵庫県知事賞 兵庫県知事賞

名湯にじわり命が背伸びする

時の川柳社賞 両川 洋々

▽執筆△

○本末朱夏副理事長はNHK「川柳春秋」No.127号に「川柳初心の頃」を執筆した。

▽出版△

○平井美智子監修「時美新子の川柳と慟哭」A6判。98ページ。新葉館出版発行。1200円＋税。

○川柳さんだ二百号記念句集「メダカの詩」IV。B6判。P.167。川柳さんだ発行。

▽御芳志△

○参与都倉芽さんより高野山粗供養として金一封を拝受しました。

○訂正とお詫び△

○12月号、P.30下段2行目、塩満ちて→潮満ちて。P.53下段7行目、野露→野露。

▽新誌友紹介△

高知県 茨木 昭夫

鳥取市 西田美恵子

常任理事会 12月7日(木)

要検討②平成30・31年常任理事会・句会日程の確認③定例確認事項等。

次回常任理事会 11月9日(火) AM10時

明けましておめでとうございます

西宮北口川柳会

例 会 毎月第2月曜日 午後1時 西宮市立中央公民館

(阪急電鉄神戸線西宮北口下車 南出口徒歩3分)

プレラにしのみや6F

投句先 〒663-8112 西宮市甲子園口北町27-4-602 梅澤盛夫

川河亀片笥加奥大大長緒延江梅上上上井市石足秋奥西
人合岡山 川澤矢坪川方庵谷澤原田垣上坪原立元田口

良敏哲 靖靖洋 一哲美野勝盛 ひキじ武歳つてみい
種夫子忠夫鬼郎伸徳夫子靄弘夫翔みミう臣子子る子ゑ

長長難七長中富富都寺寺近田竹佐酒酒小黑蔵久北北北
野島波田浜西山永倉柚井兼中山藤田井林田田野島川
峰敏伯順美豊ル恭求富秋教章千健浩紀わ能光千哲邦美
明子備子籠子子子芽次果子子子彦司華こ子子代男男香

両山山山山山丸松松牧前山堀古藤藤藤藤福萩能野長

川田田田崎口山村井渕川内 川原本岡井島野勢口縄

無婦昭耕武光一輝文富千 正奮み り宏弘忠利晶嘉
限子朗治彦久之彦香子子迪和水し直こ造子彦子子子

明けましておめでとうございます

川柳塔すみよし

会長 古今堂 蕉子

甲田 吉川 北村 川端 加島 小野 奥村 大隅 大治 大内 榎本 榎本 江島 宇都 内田 井丸 磯島 石丸 石橋 荒川 浅井
靖子 哲矢 賢子 一步 由一 雅美 五月 克博 重信 朝子 舞夢 本日 勝弘 満知子 志津子 昌紀 福貴子 正太郎 直子 博行 公平

藤井 橋本 萩尾 西出 長高 長浜 中川 中島 中井 土井 飛永 鶴田 田中 田中 立石 鈴木 柴本 佐々 阪井 坂 古今堂
宏造 典子 紀子 楓楽 俊雄 美籠 ひろ介 栄子 萌 蹴 ふりこ 遠野 ゆみ子 廣子 郁子 いさお ばつは 木満作 美世子 裕之 蕉子

若本 横山 山本 山本 山根 山岡 矢倉 森松 森松 宮本 宮崎 三宅 松下 松崎 増田 増田 藤原 藤原 藤島
安代 里子 進 錢 妙子 美子 五月 芳香 おん マ子 保州 小枝子 大輔 隆昭 啓次 大子 昭 たかこ

あけましておめでとうございます

サークル 檸檬

吉村 山本 山本 山口 松尾 前村 西村 西出 西口 長浜 古今堂 久保田 片岡 奥田 太田 井丸 浅野
久仁雄 希久子 加お里 光久 美智代 たもつ 哲夫 楓楽 いわゑ 美籠 蕉子 千代 智恵子 みつ子 扶美代 昌紀 房子

新年明けましておめでとうございます

川柳あまがさき

会長 長浜美籠
副会長 藤井宏造

例会 毎月第二火曜日
場所 尼崎女性センター・テレビエ

足立つな子	渡辺柳明	山口ヨシエ	宮崎咲貴	前川千津子	古川奮水	永田紀恵	都倉求芽	谷祐康	坂本晴美	九鬼洋子	北川純	片山かずお	岡部美浪	大岸和子	江見清	上垣キヨミ	池野英坊	石川きよみ
加川靖鬼	長川哲夫	森たみえ	市坪武臣	新井つね湖	山本幸香	溝端利夫	松村里江	堀正和	藤田雪菜	鶴田紀華	酒井紀乃	小山紀乃	北野哲男	釜野公子	奥村五月	大浦初音	上田ひとみ	入江修平
		森菊江	竹山千賀子	細川花門	小山聖也	森松芳香	森松まつお	山田耕治	三好京江	藤岡りこ	平井富夫	野口晶子	中井楓花	玉村幸子	竹林千代子	酒井健二	木山歌留多	河津正治

謹賀新年

川柳塔唐津

岩崎 實

坂本 蜂朗

仁部 四郎

山口 高明

おめでとうございます

河内長野川柳協会

顧問 板尾 岳 人

長柳会・プラザ川柳

藤	大	辻	谷	梶	石	木	山	黒	坂	村	山	会 員 有 志
塚	島	村		原	田	見 谷	室	岩	上	上	岡	
克	と も こ	ヒ ロ	久 美 子	弘	隆	孝	光	靖	淳	直	富 美 子	
三				光	彦	代	弘	博	司	樹		

大 阪 川 柳 の 会

事務局 〒532-0025 大阪市淀川区新北野1-3-4-706 本田智彦 方
TEL 06 (6303) 7297

森	本	藤	内	伊	大	碓	池	井	足	世	代 表
口	田	井	藤	達	堀	氷	田	上	立	話	
美	智	満	光	郁	正	祥	武	か	淑	人	
羽	彦	洲	枝	夫	明	昭	彦	れ	子		磯 野 い さ む

◎会場 駅前第二ビル5階(大阪市北区梅田1-2-2-500) ※開場 午後1時

あけましておめでとうございます

翠 洋 会

浅井 公平 安土 理恵 安福 和夫 阿部 紀子 井上 照子 岩本 浩二 榎本 日の出 榎本 舞夢 大川 桃花 大久保 眞澄 太田 昭 奥田 みつ子 古今堂 蕉子 小谷 集一 佐々木 満作 高杉 千歩

高橋 敬子 谷口 義 辻内 げんえい 津村 志華子 寺井 弘子 飛永 ふりこ 西出 楓楽 能勢 良子 原田 すみ子 藤井 正雄 前川 善之 山本 希久子 横山 捷也 米田 恭昌 渡辺 富子

明けましておめでとうございます

川 柳 ふ う も ん 吟 社

会 長 両 川 洋 々

会 員 一 同

事務局：〒689-0202 鳥取市美萩野2丁目171-3

中 村 金 祥

TEL 0857-59-1056

月例会：毎月第4日曜日 13:00～

会 場：砂場隆浩事務所（鳥取市片原1丁目107）

明けましておめでとうございます

富 柳 会

森下 よりこ	林 澄子	藤田 武人	枋尾 奏子	中村 恵	関 よしみ	肥山 一文	山野 寿之	中井 アキ	池 森子
他 一同	都筑 文重	福元 田鶴子	岸本 慶子	松本 正治	沢田 和子	田嶋 伸雄	井澤 壽峰	久世 高鷺	石橋 未知

あけましておめでとうございます

き ゃ ら ぼ く 川 柳 会

会 員 一 同

事務局 〒683-0804 米子市米原5-1-3-304

竹 村 紀 の 治

謹賀新年

川柳塔さかい

会長 村上玄也
副会長 矢倉五月

綾田 清	出海素頼馬	梅本 澄空	榎本 舞夢	太田扶美代	小野 雅美	河内 月子	源田八千代	小森 大造	澤井 敏治	島田 誠一	田中 廣子	谷川 憲	遠山 唯教	内藤 憲彦	原 清晋	伏見 雅明	増井ヨシ枝	宮本かりん	山岡富美子
石田ひろ子	内田志津子	榎本日の出	太田としお	奥 時雄	柿花 和夫	河内 天笑	小林 若芽	齋藤さくら	柴本ばっは	高木世紀子	田中ゆみ子	津田シルク	徳山みつこ	中野 健吾	日野 愿	古川 光雄	升成 好	向井 清	山本 半錢

あけましておめでとうございます

竹原川柳会

会長
會計

小島 蘭 幸	岩 本 笑 子	古 田 太 虚	石 原 淑 子	土 井 輝 恵	若 年 幸 子
--------	---------	---------	---------	---------	---------

ほか会員一同

明けましておめでとうございます

豊中もくせい川柳会

会 員 一 同

あけましておめでとうございます

川 柳 さ ん だ

会 員 一 同

あけましておめでとうございます

事務局 〒633-0054 奈良県桜井市阿部 787 (松本方)

川
柳
塔
な
ら

中	江	渡	長	中	仲	高	高	加	大	飛	宇	安	安
原	島	辺	谷	堀	西	橋	畑	門	久	永	賀	福	土
(顧	(会				賛	敬	お	萌	眞	ふ	史	和	理
問)	計	勝	富	崇	優	郎	た	子	澄	り	郎	夫	恵
	監	弘	子	明			か			こ			
	査)												

あけましておめでとうございます

南大阪川柳会

会 員 一 同

住まいの情報センター（地下鉄谷町線・堺筋線 天神橋6丁目駅③出口）
原則として第4月曜日・6時から

あけましておめでとうございます

本年もよろしくお願い申し上げます

川柳塔わかやま吟社

同 人 一 同

事務局 〒640-8482 和歌山市六十谷1188-14 川上大輪方
電話・FAX 073-462-7229

あけましておめでとうございます

ほたる川柳同好会

水野黒兎	藤沢長一	小牧信男	高嶋勝	藤原桂子	栗田久子	寺井柳童	田中螢柳	中井春代	多田契子	荒木郁子	樋口順子	池田純子	貝塚正子	上田陽子	岡田守啓	上山堅坊	水森美佐子	斎藤奈津子	倉本一也	中内孚彦	藤井則彦	宮田輝
句会	第二火曜日	午後一時より																				
勉強会	第四火曜日	午後一時より																				
場所	豊中市蛸池公民館																					

あけましておめでとうございます

京 都 塔 の 会

会 員 一 同

おめでとうございます

祝 900号

川 柳 大 阪

会 長 山 崎 珠 生

会 員 一 同

井井桐田飯宮藤仲中次助小岸石松藤雪増岩
上岡島中田野井谷岡井川島井田崎原本田佐
益一カズ文忠みつ康弘香義和笑ふひろ大珠隆ダン
男子子時太江信子代泰美司ゑ子輔昭昭吉

西阪鈴梅三花三向松不西中中出立高新久柿
岡口木原宅篤宅井浦破田原里原藏橋海保田花
義た益白洋保英仁喜代宏は誠信律信益和
博かお子茂水二州清夫緑志之べ夫子雄二祥夫

岸和田川柳会

あけましておめでとうございます

謹賀新年

和歌山県川柳協会

会 長 三宅 保州

副 会 長 川 上 大 輪

[お問い合わせ先] 事務局 古久保 和子

〒640-8111 和歌山市新通7丁目17

TEL 073-423-8930

謹賀新年

和歌山三幸川柳会

主 幹 三宅 保州

事務局 〒640-8111 和歌山市新通七丁目17 古久保和子

TEL 073-423-8930

例 会 毎月第四土曜日 12時30分

和歌山商工会議所 4F (バス停 和歌山市役所前)

謹賀新年

川柳茶ばしら

関	脇	山	金	板	早
本	田	本	子	山	川
かつ	雅	三	美	ま	遡
子	美	樹	千	み	行
		夫	代	子	

謹賀新年

わかあゆ川柳会

会 長 松 本 昌

和 泉 ハル子

菅 田 かつ子

永 見 安子

奥 谷 澄子

河 原 恵美子

松 本 英子

渡 部 好栄

事務局 松 本 はるみ

TEL 〇八五四・四二・〇二四三

年 賀

川 柳 藤 井 寺

川 柳 み さ さ ぎ

代 表 高 田 美 代 子 会 員 一 同

新年おめでとうございます

はびきの市民川柳会

会 長 徳 山 み つ こ ・ 会 員 一 同

おめでとうございます

六甲川柳会 「ろっこうみち」

会 員 一 同

10年間続いた勉強会「メダカの学校」は昨年3月閉校し、替って句会「ろっこうみち」を立ち上げました。皆様のご参加をお待ちしています。

連絡先 〒659-0026 神戸市東灘区魚崎西町4-1-11
山崎武彦 TEL.098-842-6235

新年明けましておめでとうございます

城北川柳会

藤	綱	永	小	江	近	伊
原	島	井	林	島	藤	達
千	榮	縣	杵	勝		郁
恵	子	笹	香	弘	正	夫
子						

謹賀新年 川柳塔まつえ吟社

主幹 石橋 芳山

同人一同

事務局 〒690-0001 松江市東朝日町206-7 石橋芳山方
TEL.090-2003-5846

あけましておめでとうございます

川柳塔みちのく

主 幹 福 士 慕 情

本会創立 30 周年記念句会を 7 月 1 日開催。
詳細は別途ご案内致します。

あけましておめでとうございます

い ず も 川 柳 会

会 長 竹 治 ちかし
会 員 一 同

事務局 〒693-0026 出雲市塩治原町3-1-5 竹治ちかし 方
TEL 0853-22-4309

賀 正

川 柳 ね や が わ

会 員 一 同

正 賀 社 塔 柳 川

主 幹
理 事 長
副 主 幹
副 理 事 長
副 理 事 長
常 任 理 事

森	松	中	鈴	久	大	内	石	鶴	木	川	新	小
松	原	川	木	保	久	田	田	田	本	上	家	島
まつ	寿	ひろ	い	千	眞	志	隆	遠	朱	大	完	蘭
お	子	介	さ	代	澄	津	彦	野	夏	輪	司	幸
吉	藤	藤	内	島	片	江	居					
村	村	井	藤	田	山	島	谷					
久	亜	宏	憲	誠	か	勝	真					
仁	成	造	彦	一	ず	弘	理					
雄					お		子					

川柳塔社常任理事会

編集後記

★新年や年を取るほど白い雪 薫風

★平成30年の読み初めは帯木蓬生（はきはぎほうせい）著「守教」。蓬生は東大仏文科卒業、2年間TBSに勤めた後、九州大学医学部に学び精神科医となった。その傍ら小説を書くという異色の経歴の持ち主。職業柄医学に関わる作品が多いが歴史小説も読ませる。「守教」（新潮社刊）は上下2巻。670頁に及ぶ。★帯には「信じて折り、そして涙する」「戦国から開国まで。無視されてきたキリシタン通史」「転ぶか、裏切るか、それとも、死か」「いままで誰も描きえなかった美しく尊い魂の記録」上下巻の帯を読むだけでも胸苦しくなる大作。蓬生はこの

作品のために80数冊の関連資料に目を通している。緻密な検証と共に、作家の深い洞察力が歴史の空白の時間を埋める。

★平成29年で爽やかな印象を残したのが将棋の藤井聡太4段。私は将棋も囲碁も全く知らないがひとり将棋盤に向かっていた父を思い出す。将棋とはどういうものか知りたいと、羽生善治著「こども将棋入門」（池田書店）を取り寄せた。「持ち駒」「先後手」「序盤戦」「中盤戦」「終盤戦」など将棋から出た言葉が多いことも知った。叶うなら実践をしたいものだが：。★29年11月26日、37回川柳塔みか月大会に蘭辛主幹は小学1年生のお孫さん陽君と参加。森中恵美子選、兼題「伝説」で陽くんの川柳「さるからねにんげんになるでんせつだ」が入選。鮮やかな

ひとこと

自分の言葉で

川柳を始めて三十年余りになつてしまいました。家庭のもろもと川柳の同時進行には居間が最適です。メモ用紙と6Bの鉛筆が座ついても手の届くところにある。この状態を家族は迷惑がらず我慢をしてくれていることに、まず感謝です。

今まで続けてこられた川柳の魅力とは何だろうと、思う時があり

川柳デビューだ。今回を以ってみか月大会は幕を降ろすという。今は亡き中原諷人さん、その後を継がれた森山盛桜さんの熱意、そして宿泊ホテルの「山紫苑」の露天風呂に惹かれてみか月大会を楽しむにできた。由緒ある大会が幕を降ろすことは寂しい。（朱夏）○編集のお手伝いをするようになつて、電車に乗る機会が増えた。ある時、一つ空いていた優先席にた。女性は妊娠していた。まず立ち話の定番の噂話をしない仲間ができたこと、人間観察の楽しさに気付いたこと、私の脳みその量をはるかに超えた皆様に出会えたこと、新しい言葉や情報を息子に馬鹿にされながらも聞いて、世間の流れについて行きたいと思ったことです。自分の言葉で、川柳に向き合い、時々には怠けながらも長くつき合つて行きたいと思います。（古久保和子）

近づいていった私と若い女性の顔が合った。女性を私を一瞥して座り、スと顔を上げ、「ごめんなマホに取り組み始めた。」とある時、八十路を過ぎたと覚しき杖の老人に、私が席を譲ろうとした。老人は「イヤイヤ、あんたも同じ年寄りや。」と、丁寧に断りになった。その時私は六十九歳。○ある時、老人が「若いモンが何しとるんや。」と叱って若い女性を立たせた。女性は妊娠していた。まず立ち話の定番の噂話をしない仲間ができたこと、人間観察の楽しさに気付いたこと、私の脳みその量をはるかに超えた皆様に出会えたこと、新しい言葉や情報を息子に馬鹿にされながらも聞いて、世間の流れについて行きたいと思ったことです。自分の言葉で、川柳に向き合い、時々には怠けながらも長くつき合つて行きたいと思います。（古久保和子）

○ある時、スマホに集中していた若い男性がふと顔を上げ、「ごめんなさい、気付かなくて。」と言って女性に席を譲った。女性のマタニティーマークに気付いたのだつた。○電車の中は、人間社会そのものであり、川柳のモトを乗せて走っているようだ。人間観察のチャンスと思えば、本社に行く時間もまた楽し、デス。（眞澄）

「川柳塔」への投句について

- (1) 川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友（誌代半年分以上前納の定期購読者）に限り、本誌綴込みの投句用紙を使用してください。
- (2) 愛染帖・檸檬抄・一路集・インスピレーション・ナビ（印象吟）への投句は、同人・誌友に限りです。初歩教室は誌友のみとします。愛染帖・一路集・初歩教室は川柳塔柳箋（本社事務所取り扱い）、檸檬抄は本誌綴込みの投句用紙を使用してください。
- (3) 各欄への投句は、必ず氏名と住所（県・市名）を明記してください。
- (4) 各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。ファックスでの投句は御遠慮下さい。

川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から15時までにお願いたします。

作品募集

3月号発表 (1月15日締切)

川柳塔 (8句) 小島蘭 幸選
水煙抄 (8句) 川上大輪 選
愛染帖 (2句) 新家完司 選
檸檬抄「もつと」 (2句) 山口光久 共選
インスピレーション・ナビ (2句) 斉尾くにこ 選
一路集 (2句) 「手抜き」 大西泰世 選
「新品」 木田比呂朗 選
「ピンク」 (3句) 居谷真理子 選
初歩教室 「ピンク」 (3句) 居谷真理子 選

4月号
檸檬抄「浮く」
一路集「リセット」「無言」
初歩教室「囲む」

本社1月句会

会費 1000円
投句料 500円 (切手可)

と き 1月9日(火) 13時開場・13時40分締切
と ころ アウィーナ大阪 4階 金剛の間
天王寺区石ヶ辻町19-12 電06-6772-1441

兼席 兼題 「NHKひるまえ川柳」
おはなし 「和風」
「たつぷり」
「子ども」
「笑う」
「トップ」

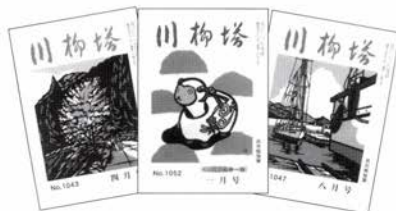
小島蘭 幸氏
龍島恵子 選
山野寿之 選
鈴木いさお 選
山岡富美子 選
古今堂蕉子 選
新家完司 選

本社2月句会
7日(水) 午後1時から
兼題 「勢い」「のどか」「イメージ」
「傾く」「自由」

川柳塔WEB句会のご案内

課題「静か」 [くんじろう 共選]
居谷真理子
締切 1月20日 発表 1月25日頃
投句料 無料
インターネットで「川柳塔」を検索しWEB句会をクリックしてご投句ください。

川柳・俳句・エッセイ・小説
新聞・広告・ポスター・伝票等
あなたの思いをかたちにします。



美研アート

〒530-0022 大阪市北区浪花町9-4
TEL (06) 6372-1178
FAX (06) 6372-1196
E-mail: bikenart@ea.mbn.or.jp

定価 八百円 (送料83円)
半年分 五千円 (送料共)
一年分 九千八百円 (同)

二〇一八年(平成三十年)一月一日発行

発行人 小島和幸
編集人 木本朱夏
印刷所 美研アート
〒543-0052 大阪市天王寺区大道一四一七
花野ビル201号室
発行所 川柳塔社
電話 (06) 6772-1441
振替 〇〇九八〇一四一九八四七九番

川柳募集

「ごま」にまつわる
あなたならではの

一句を募集します。

兼題 「ごま」 川柳塔社主幹 小島蘭幸 選
応募要領 郵便八ガキに2句、郵便番号、住所、
氏名、電話番号を明記してください。

入選20句、準特選2句、特選1句に賞品。
本紙4月号にて発表いたします。

発表 2018年1月31日（当日消印有効）
締切り 2018年1月31日（当日消印有効）
投句先 〒543-0052 大阪市天王寺区
大道1丁目14番17号 花野ビル201号室

川柳塔社 ゴマ川柳係 宛

オニザキの

手作りの味わいに
こだわって
六十年

つぎま



株式会社 オニザキコーポレーションセルス
〒862-0951 熊本市中央区上水前寺1-6-41 OCOビルディング

TEL ☎ 0120-30-5050

木本朱夏監修 猫川柳アンソロジー『にとばの国の猫たち』



小説家・有栖川有栖の
書き下ろし猫エッセイ収録

「猫の本を作りたい！」無類の猫好きで知られる川柳家・木本朱夏が愛猫たちへのオマージュを込めて制作しました。川柳をメインに、エッセイ・写真・イラスト。一冊まるごと猫・猫・猫。猫好きさんはもちろんそうじゃないあなたも、ことばの国のユニークな猫たちと遊んでください。

文庫本サイズ・116頁・定価1,080円（三冊以上で送料無料）

ご注文は あざみエージェント・オンラインショップ

<http://azamiagent.com> または

TEL 090-3726-5853 FAX 06-6923-5680